

しみし者が今復官游の身と爲る、其の境遇から見て今夜舊游即ち司空曙が事を戀ふ念を生じた  
るなり、秦地は長安を指す、故人成遠夢長安に於て手を攜へて遊びし故人は死すもあり、去る  
もあり、遠夢の如く感ず、楚天は今宿する淮浦の地を指す、多雨在孤舟蓬窗を打つ雨聲、何ぞ  
聞くに堪んや、諸溪近海潮皆應今日の江蘇省淮安府が即ち淮浦なれば黃海に臨んで、我邦横濱  
の如き處、素隱は峽中にて山多き處と云ふ、此の邊の山は極めて淺く、北方の如き高山は曾て  
無し、獨樹邊淮葉盡流淮に邊うて種る獨樹は落葉が他へは飛ばず盡く水に入て流れ去る、暗に  
自身の獨杭州に向ふを云ふなり、淮浦と杭州と相去る最早支那里、百里餘、別恨轉深何處寫寫  
すと云ふは我が長安を去て此に來る恨みを何處の物を目當として咏寫せんやとなり、前程唯有  
一登樓魏の王粲は憂を寫さんと欲して樓に登り「登樓賦」を作る、我も亦別恨を寫すには王粲  
に倣うて登樓の一法あるのみ、一は司空曙の方を望み、一は長安を望み、一は我が懷を寫さん  
となり、

【評論】此の篇、第二句の戀舊游の三字より他の五十三字を運轉すること自由自在の法を見る  
べし、起句も對句なることも知らざるべからず、一の字二字有るは病とす、在と有とは妨げざ  
るも巧とは言ひ難し、李と曙との交游の深き、白と元との如き其の集に就て見るべし、

尋郭道士不遇

白居易

郡中乞暇來尋訪 洞裏朝元去不逢 看院只留雙白鶴  
入門唯見一青松 藥爐有火丹應伏 雲碓無人水自春  
欲問參同契中事 未知何日得相從

郡中に暇を乞うて來つて尋訪す、洞裏元に朝して去つて逢はず、看院只留  
む雙白鶴、入門唯見一青松、藥爐火あり丹應に伏すべし、雲碓人なくし  
て水自ら春く、參同契中の事を問はんと欲す、未だ知らず何れの日か相從  
ふことを得ん、

【略傳】白居易字は樂天、其の先は太原の人、華州の下邳に徙る、貞元十六年進士及第し、元  
和對策して翰林學士と爲る、事に因て江州の司馬に貶す、左拾遺に遷る、忠州の刺史に徙る、  
入つて司門員外郎と爲る、主客郎中を以て知制誥たり、長慶中に中書舍人より杭州の刺史と爲  
る、會昌の初、刑部尚書たり、致仕し六年にして卒す、年七十五、尚書右僕射と贈す、

【句釋】郭道士は仙道を修習する者、傳は未詳、郡中は郡衙、樂天が江州司馬の時、乞暇官の



休暇を乞ふ、而して道士を尋訪す、然るに洞裏は道士の住觀、僧なれば寺なり、朝元は道士の祖たる玄元李老君の處に去られしなり、去不逢遇と逢とは大抵字義同じ、看院は俗語の留守居役を云ふ、仙院を看護するゆる看院なり、只留雙白鶴道士の留守を司どるは只雙白鶴のみ、入門唯見一青松鶴あれば松あり、松あれば鶴あり、藥爐有火丹應伏爐中を見れば活火あり、定めし丹砂を焼く火ならん、雲確は雲母を搗く確なり、雲母は石藥、無人水自春「キララ」を搗く水車の機械は人を勞せず自ら春づく、欲問參同契中事「參同契」は魏伯陽が著はす所の書名、素隱の注に曰く、魏伯陽古文の龍虎二經を得て盡く妙旨を得、因て其の象を約して參同契上中下三卷を著はす、宋の寶祐二年儲沛、序を作つて曰く、魏先生龍虎を祖として周易參同契を作る、實は河圖に出たるものなり、坎離の九一を以て藥物と爲し、卦氣の分至を以て火符と爲す、私に云ふ分至とは春分秋分夏至冬至の類、九一とは九は陽數の極、一は陽位の初を云ふ、龍虎の二經は道家に於て易家の河圖洛書の様なるものと見ゆ、樂天は此の書中の事を道士に問んと欲するなり、未知何日得相從今日相訪うて相遇はず、又何れの日にか相從うて其の理を聞くを得んや、

【評論】此の篇、一二は之を尋ぬる所以を叙し、三四五六は道士不在中の所見を叙し、七八は

我が情に歸宿す、舊注に一意の格と云ふ、

早秋寄題天竺靈隱寺

賈島

峯前峯後寺新秋 絶頂高窗見沃州 人在定中聞蟋蟀

鶴曾棲處掛彌猴 山鐘夜度空江月 汀月寒生古石樓

心憶懸帆身未遂 謝公此地昔曾游

峯前峯後寺新秋、絶頂の高窓沃州を見る、人は定中に在りて蟋蟀を聞き、鶴曾て棲む處彌猴を挂く、山鐘夜度る空江の水、汀月寒生ず古石樓、心に帆を懸けんことを憶へども身未だ遂げず、謝公此の地に昔曾て遊ぶ、

【句釋】早秋は七月、寄題は遠方に在つて詩を作りて寄題する、來游にはあらず、天竺寺と靈隱寺との二寺、浙江の杭州府、西湖を隔つ數里の地に在り、上天竺寺と中天竺寺と、下天竺寺との三寺あり、靈隱寺は一寺、勝景は靈隱を以て第一とす、晉の咸和元年、西天の僧惠理歎じて曰く此は是れ天竺靈鷲山の小嶺なり、知らず何れの年にか飛來する、佛釋迦在世多く仙靈の爲に隱せらる、今此も復爾り、因て錫を靈隱寺に掛けて飛來峯と號す、峯前峯後寺新秋舊注に峯



前は天竺寺、峯後は靈隱寺と、大に誤る、天竺の峯前峯後も、靈隱の峯前峯後もの意なり、絶頂高窓見沃州此の飛來峯頂の高窓即ち寺の窓より沃州の羣山が見ゆる、越州の新昌縣の東に當りて此の山有り、人在定中間蟋蟀人とは寺僧を云ふ、僧は坐禪の房に在つて瞑目端坐す、特に蟋蟀を聞く爲にはあらず心息を觀するが爲めなれども、靜寂なるを以て蟋蟀の聲が特に響くなり、鶴會棲處挂欄猴鶴の昔棲息せし高樹今日は欄猴が挂る即ち遊び居るなり、山鐘夜度空江月江を度り來る鐘の響き特に人の心耳を澄ましむ、空江の空は靜の意味、空江と云ふ名詞にあらす、汀月寒生古石樓石崖上の梵樓に影を移す所の月は、汀即ちナギサより生ずるものなり、江も汀も共に西湖と見て可、心憶懸帆は心中に此一游せんと憶ふなり、舟江の期望を云ふ、身未遂此の三字にて「寄題」の題意を表はす、謝公は晉の謝安、此地昔曾游謝安常に臨安の山中に在つて石室に坐して澹谷に臨んで悠然として歎じて曰く此れ亦伯夷と何ぞ遠からん、東山に靈隱寺が西湖の靈隱寺と同名なりしを以て用ひしものならん、杭州の靈隱寺は謝公の遊びし事なし、

【評論】此の篇、天竺靈隱二寺の勝を叙し悉くして全く餘蘊なし、遠景近景、之に加ふるに情思を以てす、暗に自身を謝公に比する者の如きは浪仙の抱負を窺ふに足るなり、會二字あるは

亦小疵とす、

題宣州開元寺水閣

杜牧

六朝文物草連空 天淡雲閒今古同 鳥去鳥來山色裏  
人歌人哭水聲中 深秋簾幕千家雨 落日樓臺一笛風

惆悵無因見范蠡 參差煙樹五湖東

六朝の文物草空に連る、天淡く雲閒にして今古同じ、鳥去り鳥來る山色の裏、人歌ひ人哭す水聲の中、深秋簾幕千家の雨、落日樓臺一笛の風、惆悵す范蠡を見るに因なきことを、參差たる煙樹五湖の東

【句釋】宣州開元寺の事は前卷絶句の下に於て已に辨せり、六朝も已に辨せり、文物は文華風物を云ふ、六朝時代の文華風物の盛んなるは今見るべからず、今見る所は草連空草が一面と云ふ意味、草が生長して居ると見るも亦可、天淡は天の色を云ふ、雲閒は一本雲開に作る、閒の誤字ならんと思ふ、開では淡に切ならず、今古同自然界の事は今も古も同じ、鳥去鳥來山色裏一鳥去るも一鳥來る、山色を喜ぶ者の如し、人歌人哭水聲中「列子」に衆人且歌ひ衆人且哭す



とある、「拾遺記」に水、石に激する聲、人の歌ふに似たり、今の句水聲を形容し、且實際人が今を歌ひ古を哭する事を形容す、深秋は八月、簾幕千家雨水閣の上より下方を瞰れば雨の爲め千家悉く簾を下し幕を垂れる、落日は夕暮を云ふ、必ず晴天のみ用ふる語にあらず、樓臺一笛風何處の樓臺なるを知らず、笛聲を送り來る、雨は見る所、笛は聞く所、惆悵無因見范蠡宣州は吳の宣城郡、范蠡が越王を助けて吳を亡ぼし、功成り名遂げて身退く、今日は其の范蠡を見ること能はざるを惆悵す、即ち自身を傷む意も含む、參差は高低と略同意、煙樹五湖東「吳越春秋」に蠡扁舟に乗じて三江を出で五湖に入る、人其の適く所を知ること莫し、太湖に五湖あり曰く瀟湖曰く洮湖曰く射湖曰く貴湖及び太湖、太湖の小支太湖に連なる故に總じて太湖と云ひ又五湖と云ふ、范蠡が西施を引き具し、其の湖中へ沈めしとの説もあり、杜牧は美人を好む性より、范蠡が西子を具して五湖に隠れしを羨むと素隱和尙辨す、牧が意必ず然るにあらざるなり、

(374)

【評論】此の篇、本集の題に「題宣州開元寺水閣閣下宛溪夾溪居人」とあり、宛溪は源嶧山より出、流れて城東を繞る、其の溪を夾んで人を居らしむ、溪の西岸に人家が在るなり、寺に遊んで明鏡心燈の事を言はず、千家の簾幕、一笛の樓臺を言ふ、杜が佛典を讀まず、又禪理に通

せざること見るべし、王右丞をして此の題を作らしめば、其の品格の高き幾等なるを知らざるものあらん、謝茂秦は此の詩を評して韻短調促、抑揚の妙無しと、

長安秋夕

趙嘏

雲物淒涼拂曙流 漢家宮闕動高秋 殘星數點雁橫塞  
長笛一聲人倚樓 紫艷半開籬菊淨 紅衣落盡渚蓮愁

鱸魚正美不歸去 空戴南冠學楚囚

雲物淒涼として曙を拂つて流る、漢家の宮闕高秋を動かす、殘星數點雁塞に横はり、長笛一聲人樓に倚る、紫艷半ば開いて籬菊淨く、紅衣落ち盡して渚蓮愁ふ、鱸魚正に美なれども歸り去らず、空しく南冠を戴いて楚囚を學ぶ、

(375)

【句釋】長安秋夕趙嘏は浙江の人なるが、長安に寓し、未だ進士第に上らざる時の作、秋は早中、晩の三秋あり、是れ早秋とす、雲物は「左傳」に分至啓閉、必ず雲物を書すと、天地山川の氣象を云ふ、淒涼はサビシキ形容語、拂曙流は朝來より晴景なるを言ふ、漢家宮闕は長安城、



●動高秋高秋に動くもの唯宮闕にあらざるも題意に切ならしめん爲め宮闕を出ず、高天の秋景城中に満たざるは無し、殘星數點の中に雁横塞上に雁の横はるは秋高ければなり、長笛一聲の中に人倚樓樓上に人の倚るは笛を吹けばなり、數點を見、一聲を聞く者は趙嘏なり、紫艷は菊花の紫色麗艷を言ふ、半開雛菊淨中秋や晩秋なれば菊は全開、半開とあるに依て知る早秋なることを、是れ陸上の景、紅衣落盡紅色の蓮花は已に落盡す、蓮は夏日の物にして秋日の物にあらず、渚蓮愁渚と雛とにて水陸を分つ、是れ水上の景、鱸魚正美不歸去張翰は秋風の起るを見て、鱸魚の美と蓴羹の味を思ひ、遽かに故郷に歸る、然るに我は鱸魚の美を思はざるにあらず如何せん未だ衣錦ならざる者、遂に歸去する能はず、空戴南冠學楚囚昔し晉侯鍾儀を見て問て曰く南冠にして繫がれたる者は誰ぞ、有司が曰く鄭人獻する所の楚囚なり、今我も南方即ち吳中の風俗をして北方の長安に居寓するは鄭人獻する所の楚囚の如き者に類すととなり、

【評論】此の篇、題目の秋夕、早秋と晩秋と秋望との三異本あり、素隱は曰く雲物の凄涼たるを見、秋懷を起し、終日止まず夜に入るまで感慨多し、終夜一睡もせず、今夜も早や明方になり衆星皆西に流れ、今は唯數點を餘すのみ、此の師秋夕の題意を佐します、夕に作りて曉に達したるものと定むる如し、今時寧齋曰く起句に「拂曙」の二字あり、題して「秋夕」といふ全

●相矛盾す、『本集』に長安早秋『才調集』に長安秋望『唐詩鼓吹』に長安晩秋と云ふ、皆夕字を題せず、傳寫の誤ならんと辨じ、而かも早秋か秋望か晩秋かを言はざるは何ぞや、今、半開と鱸魚とを以て考ふれば早秋なる如く、紅衣落盡の語を重く見れば、晩秋なるが如く、甚だ以て明瞭ならず、余をして言はしむれば、「秋望」と爲すを以て第一とす、必ず早晩を定むるの要なし、何ぞや時節に依りて花の開落遲速あればなり、『才子傳』に曰く嘏曾て浙西に家す、家に愛姬あり、嘏の出る、留めて母に侍せしむ、會ま中元に鶴林寺に遊ぶ、浙の師、長官、窺ひ見て之を悦び奮うて歸る、明年嘏及第す、然るに此の事あり、詩を賦して曰く寂寞たる堂前日又曛す、陽臺は去て不歸の雲と作る、當時聞く説らく沙吒利と、今日青娥使君に屬す、師之を聞て殊に慘慘、介を遣はし姬を送りて長安に入る、時に嘏方に關を出で途横水驛に次す、馬上に於て相逢ふ、姬因て嘏を抱て痛哭す、信宿にして卒す、遂に横水の陽に葬むる、嘏思慕已ます、臨終に目に見る所ありと、時方に四十、幾ばくも無く嘏亦卒すと、薄命の才人、亦憐まざるべけんや、杜牧長笛一聲の句を嘆じて「趙倚樓」と稱するに至りては嘏知己無きの恨は無きなり、實に第四句は千秋不朽の名句とす、



宿山寺

項斯

栗葉重重覆翠微 黃昏溪上語人稀 月明古寺客初到  
風度閒門僧未歸 山菓經霜多自落 水螢穿竹不停飛

中宵能得幾時睡 又被鐘聲催著衣

栗葉重重翠微を覆ふ、黃昏溪上語人稀なり、月明かにして古寺客初めて到る、風度つて閒門僧未だ歸らず、山菓霜を経て多くは自ら落ち、水螢竹を穿つて飛ぶことを停めず、中宵能く幾時か睡ることを得んや、又鐘聲に著衣を催さる、

(378)

【略傳】項斯字は子遷、江東の人、會昌四年の進士、潤州丹徒縣の尉と爲る、尙書楊敬之、雅其の詩を愛す、至る所之を稱して嘗て詩を贈りて云ふ、平生不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>藏<sub>二</sub>人善<sub>一</sub>、到處逢<sub>レ</sub>人說<sub>二</sub>項斯<sub>一</sub>、名此を以て益顯る、

【句釋】宿山寺潤州の寺ならん、未詳、栗葉重重覆翠微栗の葉が盛んに茂りて山に滿つ、黃昏溪上語人稀上る者は上り、下る者は下り、黃昏ならんとして溪上には人已に稀、月明古寺客初

到客とは項自身を云ふ、風度閒門僧未歸月は嶺上に在り、風は林間を渡る、而かも門猶ほ閉ざざるは山僧下山して未だ歸らざる故なり、山菓經霜多自落暗に山僧の慾念無きを云ふ、山僧に慾念有る時は菓物の自ら落ちるを待んや、水螢穿竹不停飛暗に山僧が慈念あるを云ふ、山僧に慈念なければ秋晚に至るまで螢豈飛んや、中宵能得幾時睡山中の幽味、偶また來り掬す、夜睡る能はず、又被鐘聲催著衣熟眠する能はざる間、已に曉鐘を聞て起て衣を著るを促さるるに至る、  
【評論】此の篇、山寺の静趣を描寫して太だ巧妙と爲す、客初到の仄仄に對し、僧未歸の仄仄平を以て承け、幾時睡の仄仄仄に對し、催著衣の仄仄平を以てす、律詩の正法眼藏として傳へざるべからず、其の句句實況なることは山中に住したる者は自ら首肯すべし、何を贅言を要せん、

(379)

題永城驛

薛能

秋賦春還計盡違 自知身是拙求知 惟思曠海無休日  
却喜孤舟似去時 連浦一程兼汴宋 夾堤千柳雜唐隋  
從來此恨皆前達 敢負吾君作楚詞



秋賦春還つて計盡く違ふ、自ら知る身は是れ知を求むるに拙きことを、惟思ふ曠海休日なからんや、却つて喜ぶ孤舟の去時に似ることを、浦に連るの一程汴宋を兼ね、堤を夾むの千柳唐隋を雜ふ、從來此の恨皆前達、敢て吾君に負いて楚詞を作らんや、

【句釋】永城驛は河南省歸德府永城縣治なり、秋賦とは郷貢なり、縣とか郡とかにて選出せられ京城に向つて考試に及第せしむるを云ふ、春還京に在て冬を過ぎ春に向つて郷へ還る、落第して還るが故に計盡違と云ふ事志と違つたるなり、自知身是拙求知試験官に知己もあらば、落第せざりしも計られず、己は知己無きを以て遂に落第せり、然らば、我が拙なる反對に巧なる者が一方に在ると勿論なり、時代の状態を發揮すと謂ふべし、惟思曠海無休日道行はれずんば桴に乗じて海に浮ばん、海は常に滔滔として休日無し、却喜孤舟似去時夷門即ち大梁城より舟に乗じ郷に歸らんとして此の永城驛に至る、孤舟は自身乗る舟、去時は桴に乗じて去る時、道の行はれざる時は去ると云ふ孔子の意を以て此の句に寄す、膽亦大なりと謂ふべし、連浦一程兼汴宋汴州と宋州とは河南に在り、永城驛に鄰接す、浦上の一略、此の二州に通ずとなり、

夾堤千柳雜唐隋長安より江都へ向ふ路次の堤上植うる所の柳隋柳と唐柳とを混す、從來此恨皆前達余が及第せざる恨みは余一人ならず古來の達人も大抵は然りと云ふ意、敢負吾君作楚詞屈原は君に負いて身を水に投じ楚辭と云うて君を恨む言辭を千秋に餘したるが余は身不遇なりとも屈原の如く君を恨む如きことは爲さずとなり、君は即ち天子を指す、  
【評論】此の篇、極めて其の本能を發揮して藏す所なきもの、薛能は誇大狂にして其の人物固より論するに足らざるもの、此の詩に就て彼此評するの愚なるを信ず、此の詩は要するに此の選本より除去すべきものなり、

慈恩偶題

鄭谷

往事悠悠成浩歎、浮生擾擾意何能、故山歲晚不歸去、

高塔晴來獨自登、林下聽經秋苑鹿、溪邊掃葉夕陽僧、

吟餘却起雙峯念、曾看菴西瀑布冰、

往事悠悠浩歎を成す、浮生擾擾意に何ぞ能くせん、故山歲晚るれども歸り去らず、高塔晴れ來りて獨自ら登る、林下に經を聽く秋苑の鹿、溪邊に葉



を掃ふ夕陽の僧、吟餘却つて起す雙峯の念、曾て看る菴西瀑布の冰、

【句釋】慈恩は寺なり長安に在り、偶題は偶然來つて題したるなり、及第の人は此の寺に來つて其の名を雁塔に題すること唐時の習慣と爲す、往事悠悠成浩歎作者が今此の寺に來り、雁塔の題名を見るに就きても種種の感想生じ浩浩たる嘆息を發せざる能はず、往事は自身の事も前代の事も過去に屬する事總て此の中に籠る、浮生擾擾竟何能我は第一に及第したり、我は高官に上りたりと紛紛擾擾として聞く所なるが、世は到底浮生なり、五十年百年榮も達も富も貧も竟に同一穴、何事をか果して能くせんや、故山は作者の故郷即ち袁州の山、歲晚不歸去春を故山に迎へずして他郷に歳を送るは、游子の尤も嘆息する所なり、高塔晴來獨自登慈恩寺の雁塔は六級にして高さ三百尺、貞觀二年玄奘が印度より梵本を攜へ歸り之を藏せんが爲め建したるなり、郷に歸らず却て他郷の塔に登る、林下聽經秋苑鹿必ず鹿有りて遊ぶ我が寧樂の如きや否やを知らず、佛教の愛護の理を言ふと見ても可なり、經を聽く鹿は亦佛性を具有する意、溪邊掃葉夕陽僧夕陽に當り落葉を掃ふ僧は即ち釋迦牟尼佛が自ら竹林精舎の庭を掃はれし故事を用ふ、但寂寥なる景を詠するにはあらず、深理を含めるものなり、吟餘却起雙峯念今日廣東省韶州府曲江縣に曹溪あり、此の曹溪に雙峯寺あり、晉の代曹叔良が私宅を寺と爲ししもの禪

法を弘通する道場とす、鄭谷が今慈恩寺に登りて吟哦し却て昔雙峯寺に遊びし事を憶起する、曾看庵西瀑布水雙峯寺に於て曾て瀑布の水を看し事あり、玲瓏一塵も著けざる底の佛法を知る慈恩の俗寺に比すれば清淨なりと裏面に其の意を云ふ、表面に現はれざるを以て評家多く此の事を知らず、余の特筆する所以、

【評論】此の篇、寺に題する詩として頗る理を得たるもの、慈恩の教寺に題するに曹溪の禪寺を賞す、作者乃ち禪法に於て悟入する所あるか、是の故に句として圈破すれば其の重きと結二句に在り、寧齋起句より六句に至る盡く圈し七八の二句圈せず批せず、何等の意たるを知らず、李端の宿淮浦より此に至る九首、前虛の處に、景物を用ひて情思を叙し、後實の處に直に景物を言ひ、結句に至り情思を叙ぶるの作法を示したるなり、

都城蕭員外寄海棠花

羊士諤

珠履行臺擁附蟬 外郎高步似神仙 陳詞今見唐風盛  
從事遙瞻魏國賢 擲地好辭凌綵筆 浣花春水膩魚牋  
東山芳意須同賞 子着囊盛幾日傳



珠履の行臺附蟬を擁す、外郎の高歩神仙に似たり、陳詞今見る唐風の盛なるを、從事遙る瞻る魏國の賢、擲地の好辭綵筆を凌ぎ、浣花の春水魚牋に賦つく、東山の芳意須らく同じく賞すべし、子を著け囊に盛て幾日か傳へん、

【略傳】 羊士諤は知を李吉甫に受く、又最も呂溫と善、薦めて御史と爲す、又嘗て資州刺史と爲る、後、汀州寧化縣の尉と爲る、其の性碩險、公事を以て京に至る、時に王叔文事を用ひ、其の非を公言す、叔文之を聞て怒り、詔を下して之を斬んと欲す、韋執誼不可と爲す、遂に貶せらる、

【句釋】 蕭員外が海棠花と云ふ詞曲を羊に寄贈せらる、此の詩以て謝を言ふなり、珠履は「タマノクツ」楚の春申君、食客三千人、悉く珠履を穿たしむ、今以て蕭に比喩する、行臺は官名、蕭に附隨して參内する人を言ふ、擁附蟬冠の飾を附蟬と云ふ、脚下は珠履、頭上は附蟬、盛装の状見るべし、外郎高歩似神仙蕭は多數の隨員を隨がへて歩する態、堂堂として神仙かと疑はしむ、陳詞は蕭が詩を指す、陳は「ツラネル」なり、今見唐風盛蕭は晩唐に近き人なるが、詩

は盛唐時代の風が有ると嘆するなり、從事は隨行する役人、遙瞻魏國賢外郎に隨行する人は恰かも魏の曹子建即ち陳思王に隨つて遊ぶ王粲や陳琳の如き賢者なり、遙の字は唐より魏は世已に遙遠なり、擲地好辭綵筆晉の孫綽が賦を作りて范榮期に示して曰く卿が賦は地に擲てば當に金聲を作すべし、後漢の蔡邕が曹娥が碑に題して云ふ、絶妙好辭と、梁の江淹が郭璞を夢む、五色の筆を取り去る、後に詩を爲る、絶て美句無し、郭璞に美句無きは江淹が綵筆を奪ひ去ればなり、今此の三故典を運用して以て蕭が文彩を讚嘆す、浣華は蜀中の溪の名、春水魚牋浣華にて製する紙を魚牋と名く、又金花魚子と名く、春時に製するを以て賦ぎると云ふ、奇麗なるを云ふ、東山芳意復同賞謝安が妓を攜へて東山に遊びし事あり、今我と君と妓を攜へて同じく賞す、子著囊盛幾日傳晉の王羲之が「來禽帖」に云ふ日給の藤子、皆囊に盛るを佳と爲す、函封すれば多くは生せず、與に子を致すべし、當に之を種うべし、詩の意は、蕭が詞曲を寄せられたるは例せば謝安の妓が曲を奏する如く、同じく我も賞すべし、依て願くば花のみならず其の子をも寄贈し玉へとなり、我邦に多くある海棠は子無きもの然るに眞の海棠は秋子を結んで食ふべきものなり、

【評論】 此の篇、多く故事を用ひて故事の爲めに使役せられざる所、正に其の技倆を見る、詩



流麗極まり無し、

陳琳墓

溫庭筠

曾於青史見遺文 今日飄零過古墳 詞客有靈應識我  
霸才無主始憐君 石麟埋沒藏春草 銅雀淒涼起暮雲  
莫恠臨風倍惆悵 欲將書劍學從軍

曾於青史に於て遺文を見る、今日飄零して古墳を過ぐ、詞客靈あらば應に我を識るなるべし、霸才主無くして始めて君を憐む、石麟埋没して春草に藏し、銅雀淒涼として暮雲起る、恠しむこと莫れ風に臨んで倍す惆悵すること、書劍を將て從軍を學ばんと欲す、

【句釋】 陳琳字は孔璋、廣陵の人、曹操其の才を愛して以て司空と爲し記を管せしむ、軍國の書檄多くは琳が作る所、嘗て草して操に呈す、操先きに頭風に苦しむ、琳が作を讀み翕然として起て曰く此れ我が疾を愈すと、數ば厚賜を加ふ、墓は下邳に在り、曾於青史古代紙の無きとき青竹を治して簡を作り青簡と曰ふ、史官の書する所のものを青史と云ふ、見遺文『漢魏百三家集』には陳琳の文あり、琳初め亂を冀州に避く、冀州の牧、袁紹之を辟し典密事と爲す、紹死して後魏に赴むきしなり、今日飄零過古墳、今飄零して江東に遊び、偶ま其の古墳を過ぐる、詞客は陳琳なり、有靈應識我が如何なる人なるやは尋常人は知る能はず、君にして靈あらば君は定んで我が才を識らん、霸才無主始憐君陳の飄零する時、袁紹之を辟し、文章を作り、檄を草し、以て劉備に告て言ふ曹公德を失すと、後紹敗れ、琳曹操に歸す、操が曰く卿、紹が爲めに書を作る、但孤身を罪すべきのみ、何ぞ上祖父に及ぶや、琳罪を謝して曰く、矢弦上に在り、發せざるを得ず、操其の才を愛して責めず、今、琳は霸才なるも主其の人を得ず、我は君を憐れむとなり、石麟は石にて造る麒麟、冢傍に置くもの、埋沒藏春草青たる春草に埋沒せられて分明に墓を見る能はず、銅雀荒涼對暮雲琳が主と爲す操の銅雀臺は今日荒涼唯暮雲に鎖す、莫恠臨風倍惆悵温が墓前に於て東風に臨み惆悵する態を人は決して恠しむ莫れ、欲將書劍學從軍昔は琳操に隨うて從軍し、軍中に檄を草す、乃ち書と劍とを持したる者、今琳を弔するに就て我も亦君の如くならん志を持すとなり、

【評論】 此の篇、表面琳を弔して裏面に我を弔するものの如し、傲兀なるあり、沈痛なるあり、多讀に忍びざる詩とす、寧齋は霸才無主とは温自身を云ふと、誤謬ならずとせんや、詞客は琳



を指すなれば、對句として此れは作者に屬すとの考へならんや、一人の事を二句へ拆き用ふる例多し、獨此の篇のみならず、

鸚鵡洲眺望

崔塗

悵望春襟鬱未開 重臨鸚鵡益堪哀 曹瞞尙不能容物  
黃祖何曾解愛才 幽島暖聞燕雁去 曉江晴覺蜀波來  
誰人正得風濤便 一點征帆萬里回

悵望すれば春襟鬱として未だ開けず、重ねて鸚鵡に臨んで益す哀しむに堪へたり、曹瞞尙ほ物を容るること能はず、黃祖何ぞ曾て才を愛すること能解せん、幽島暖にして燕雁の去るを聞き、曉江晴て蜀波の來るを覺ゆ、誰人か正に風濤の便を得て、一點の征帆萬里より回る、

【略傳】崔塗字は禮仙、光啓四年の進士、壯歲にして巴蜀に遊び、老大にして隴山に遊ぶ、家を江南に寄す、毎に離怨の作多し、

【句釋】鸚鵡洲は三國の時、黃祖が禰衡を殺して埋めし處、鄂州の江中に在り、悵望春襟鬱未

開禰衡が才を抱きながら非命に死したることを思へば我が春襟は鬱として開く能はず、重臨鸚鵡再游したるゆる重なり、益堪哀我も禰衡の如き運命なるかと考ふれば哀しまざるを得んや、曹瞞曹操の字を阿瞞と云ふ、尙不能容物禰衡は英主に事へんと欲して曹瞞の處へ行く、曹瞞は小器禰衡の才を抱きて兀傲なるを忌み、之を放逐して、江夏へ遣る、黃祖は江夏の太守、何曾解愛才黃祖は無智妄昧の徒、何ぞ禰衡を用ふるの量あらんや、遂に才を愛せず才を忌み之を殺して此に埋む、幽島は此の洲を云ふ、暖聞燕雁去燕は鳥にはあらず國の燕なり、燕國の天に向つて雁が去る聲を聞く、燕は國名、平用、鳥名仄用は小兒も知る所、曉江は浙江を指すもの如し、晴覺蜀波來浙江に水の茫茫たるは是れ巴蜀の水が融じて流れ來るが爲めなりと知る、誰人正得風濤便眺望する所、誰人かは知らず、風濤の穩かなるに利便を得て、一點征帆萬里回る者は得意、望む者は失意、羨むの意窮まり無し、

【評論】此の篇、禰衡を揚ぐる爲め、曹瞞と黃祖を抑へ、一は物を容るるの量なく、一は才を愛するの機なきを罵る、後世の詠史家、宜しく此の篇を熟讀すべし、

繡嶺宮

古殿春殘綠野陰 上皇曾此去泥金 三城帳屬昇平夢



一曲鈴關悵望心 苑路暗迷香輦絕 繚垣秋斷草煙深  
前朝舊物東流在 猶爲年年下翠岑

古殿春殘る綠野の陰、上皇曾て此に泥金を去つ、三城の帳は昇平の夢に屬し、一曲の鈴は悵望の心に關す、苑路暗に迷うて香輦絶え、繚垣秋斷えて草煙深し、前朝の舊物東流在り、猶ほ爲に年年翠岑より下る、

【句釋】繚嶺宮は陝州の峽石縣に在り、唐の高宗顯慶三年に置く、玄宗も開元十三年に封禪の祭を此の宮に爲す、古殿春殘綠野陰晚春初夏の候、崔塗が來りし時節、上皇は玄宗なり、曾此去泥金玄宗が封禪の時、此に於いて金櫃を以て玉璽金檢を承け、之を纏ふに金繩を以てし、之を封するに金泥を以てし、印するに受命の璽を以てす、禮を行うて妃を立て風を九州に省し、金を五岳に泥る、故に云ふ去泥金と、去は捨と同義、金泥の如き貴きものを惜します用ひたるを言ふ、去は金を用ひざる、三城帳尙書が行幸に供奉して三部の帳を設け、其の外蔽は以て城を排す、屬昇平夢其の事が今日より見れば天下昇平の時の一夢に屬するのみ、一曲鈴楊太眞が馬鬼驛にて殺されし後、玄宗が都に歸り情に堪へずして自ら作りし曲を「雨霖鈴曲」と云ふ、太眞と共

に蜀へ出奔せし時、霖雨旬に涉り、道に鈴聲を聞きし事を忘れ難き爲めなり、關悵望心今作者が其の曲を聞くにはあらざるが、繚嶺宮の荒涼たるを見れば玄宗が盛時の狀と全く異なるを以て、詩人悵望の心に關せざる能はず、苑路暗迷香輦絶今は香輦來らず、苑路を掃ふの用なし、暗に迷ふ所以なり、繞垣四方の牆垣を云ふ、秋斷草煙深香輦來らず草煙の深き所以、前朝高宗玄宗の二朝、舊物東流在り其の前朝を弔する舊物は他に無し、但東流の水のみ在りて前朝を記す、猶爲年年下翠岑東流の水は翠岑より下りて海に入る、

【評論】此の篇、懷古詩として様に依て胡蘆を描くもの、結末に至りては羅隱の「唯餘巖下多情の水、猶ほ解く年年驛に傍うて流る」と同一套語なり、「羊士諤より此に至る四首前虛の内」に故事を用ひたる格、



前實後虛

周弼曰く其の説は五言に在り、然れども句既に長きときは飽滿に易し、景物情思互に相揉拌して痕跡無く、唯才餘り有る者之を能くす、前聯は景を叙し、後聯は情を叙す、實は景なり、虚は情なり、其の虚實を留與して景中に情あり情中に景あり、彼は虚、此は實と斧鑿の痕あるは未だ至らざるものとす、乃ち張南史の春山道中を以て初入の法門と爲す、

春山道中寄孟侍御

張南史

春來游子傷歸路 時有白雲邀獨行  
水流亂赴石潭響 花發不知山樹名  
誰家魚網求鮮食 何處人煙事火畊

昨日已嘗村酒熟 一盃思與孟嘉傾

春來游子歸路を傷む、時に白雲の獨行を邀ふるあり、水流亂れ赴いて石潭響く、花發いて知らず山樹の名、誰が家の魚網か鮮食を求むる、何れの處の人煙ぞ火畊を事とする、昨日已に村酒の熟せるを嘗む、一盃孟嘉と傾け

んことを思ふ、

【略傳】張南史字は李直、幽州の人、試參軍を以て亂を避け揚州に居る、再び召す、未だ赴かずして卒す、

【句釋】孟は姓、侍御は官名、其の人未詳、游子は張南史自ら云ふ、傷歸路亂を避け揚州へ歸る、種種と傷懷多し、時有白雲邀獨行白雲は青雲の反對、青雲は榮達なり、白雲は隱淪なり、況んや獨行を邀ふ、寂寥の氣限り無し、水流亂赴石潭響道中見る所、溪流の狀、花發不知山樹名道中見る所、山花の態、誰家魚網求鮮食「尙書」に「庶を奏して鮮食せしむ」とある、水上の景、何處人煙事火畊「漢書」に曰く草を焼て水を下し稻を種る、草稻と並び生ず、交り去て水を下せば草死れて稻活す、是を火畊と云ふ、陸上の景、此の二句十四字、共に兵亂を知らずして生活して居る人の狀を云ふ、昨日已嘗村酒熟新酒を昨日獨飲したるに味太だ宜し、一盃思與孟嘉傾獨飲は興味少なし、故に孟嘉と共に飲まんと思ふなり、晉の孟嘉は桓温が幕府參軍と爲る、九日龍山に遊んで同僚と酒を飲む、風吹て嘉が帽を落す、嘉知らず、桓温問て曰く酒何の好きと有つて卿之を嗜むや、曰く明公但酒中の趣を得ざるのみ、侍御の姓、孟なり、以て喩ふ、徒らに古人を出したるにはあらず、



【評論】此の篇、一種の拗體作法なり、全首自らの事を詠じ結句僅かに寄する所以を叙す、邀  
獨行の三字より意義の生ずること亦律體の正法、

早春歸盤屋寄耿漳李端

盧綸

野日初晴麥隴分 竹園村巷鹿成羣 萬家廢井生新草

一樹繁華對古墳 引水忽驚冰滿澗 向田空見石和雲

可憐荒歲青山下 唯有松枝好寄君

野日初晴 野日初晴 野日初晴 野日初晴 野日初晴 野日初晴 野日初晴 野日初晴 野日初晴 野日初晴

一樹の繁華古墳に對す、水を引かんとして忽ち氷の澗に滿つるに驚き、田

に向つて空しく石の雲に和することをみる、憐むべし荒歲青山の下、唯松

枝のみありて好し君に寄するに、

【句釋】盤屋は縣の名、陝西省鳳翔府、今の詩は盤屋縣の盤屋山なり、耿漳と李端二人なり、

野日初晴野村の日は初めて晴る、麥隴分晴天なるが故に麥隴が分明となる、竹園村巷鹿成羣鹿

を以て兵に比す、安祿山の亂後、村里までも荒廢に及び昔日昇平の時と異なるを云ふ、鹿を眞

の鹿と解するは滑稽なり、萬家廢井生新草盤屋は廢井多く、早春は新草多し、一樹繁華對古墳  
一樹の繁華は萬家の廢井に及ばず、古墳は新草に及ばず、其の憐むべき狀は共に同じ、引水忽  
驚氷滿澗水を引て田に澆がんと欲したるも水更に流れず、流れざるは氷が澗に滿つればなり、  
向田空見石和雲石より雲を生じて、雲と石と相和するなり、賊と民と和し、氷の如く人心未だ  
融解せず、可憐荒歲青山下盤屋山の下、亂後にて一物も君に呈すべき物無し、唯有松枝好寄君  
呈すべき物は唯松枝のみ、松枝を實際に送りしにはあらず、自身の節の固きに比す、  
【評論】此の篇、亂後の状態を詠するに蘊藉の言を以てし、句句悉く憐む可きの景、而して  
題目、早春の二字全く離れず、盤屋の荒涼たる、彷彿として眼に在り、千古不朽の佳篇とす、

松滋渡望峽中

劉禹錫

渡頭輕雨灑寒梅 雲際溶溶雪水來 夢渚草長迷楚望

夷陵土黑有秦灰 巴人淚應猿聲落 蜀客船從鳥道回

十二碧峯何處所 永安宮外是荒臺

渡頭の輕雨寒梅に灑ぐ、雲際溶溶として雪水來る、夢渚草長うして楚望を



迷はし、夷陵土黒うして秦灰あり、巴人の涙は猿聲に應じて落ち、蜀客の船は鳥道より回る、十二の碧峯何の處の所ぞ、永安宮外是れ荒臺、

【句釋】松滋渡は江陵に屬す、望峽中此の松滋渡を超ゆれば峽州と爲る、禹錫峽州へ謫せらるる時の作、渡頭輕雨灑梅渡頭に於て先づ目に觸れし景、雲際溶溶峽中の地、漸漸として高し、故に雲際と云ふ、溶溶は水の盛なる貌を云ふ、雪水來雨の爲め雪が融じて天外より來る、夢渚は雲夢澤地名を云ふ、草長迷楚望峽中は即ち古の楚國、今渡頭より之を望むに草の長き爲め何處とも判然せず、是の故に迷ふなり、楚の昭王曰く江漢睢漳楚の望なり、顔延年が詩に「江漢楚望を分つ、夷陵は峽州なり、毛遂楚王に説て曰く白起は一豎子のみ、一たび戦うて郢郢を擧げ、再び戦うて夷陵を燒く、土黒有秦灰今に至るまで戰國の時、白起が燒きし灰有るに由て土色は黒し、巴人涙應猿聲落峽中は猿多し、巴國の人は此の猿聲を聞き斷腸の思に耐へざる也、蜀客船從鳥道回鳥道は小さな道、其の小さな道より蜀客は回る、蜀道の高處を通過し來ると云ふ意味、十二碧峯巫山の十二峯は峽中に在り、四時色碧、頂に神女廟あり、何處所「イヅクゾ」と二字で訓む、今水夫に問ふなり、永安宮外是荒臺夔州の奉節縣に永安宮あり、劉備の崩

する所、先主を慕ふ意ありと素隱評す、慕ふ意は全く無きなり、句法として言及したるのみ、【評論】此の篇、題目の望字を注して一篇を成すもの、一一望中の景ならざるは無し、世、禹錫を推して詩豪と爲す、眞に詩豪の名に背かず、

春日閒坐

官曹崇重難頻入 第宅清閒且獨行 塔蟻相逢如偶語  
園蜂速去恐違程 人於紅藥偏憐色 鶯到垂楊不惜聲

東洛池臺怨拋擲 移文非久會應成  
官曹崇重にして頻りに入り難し、第宅清閒にして且獨り行く、塔蟻相逢うて偶語する如く、園蜂速に去て程に違はんことを恐る、人は紅藥に於て偏に色を憐み、鶯は垂楊に到つて聲を惜まず、東洛の池臺怨むらくは拋擲せしことを、移文久しきに非ず會ま應に成るべし、

【句釋】春日閒坐は春風に對して閒居無事を詠す、官曹は役人輩なり、崇重は威嚴を示すを云ふ、難頻入再三の訪問は能はずとなり、己れは朗州の司馬なるが、其の上役の所へは度度行き



がたし、其の故は嚴格に過ぎて面白くなきなり、第宅は我が邸を云ふ、清閑且獨行題目に獨坐とあるに支障する如くなるが決して支障せず、庭園など散步する意味を獨行と云ふ、友も客も來らざるなり、塔蟻塔下に往來する羣蟻、相逢如偶語偶は對なり、對向して談話するが如き狀を云ふ、園蜂速去恐違程園中に飛來飛去する蜂は來りしと見る間に速かに去る、去るかと思ふ中に又來る、殆んど時刻に遲背するを恐るる如き狀を云ふ、世人の偶語、役人の奔走、此の二句に比するものの如し、人於紅藥偏憐色我は芍藥の紅麗を見て偏に其の色を可憐に思ふが、鶯到垂楊不惜聲鶯は我と異なり、垂楊の陰に入て聲を惜ます鳴く、君王色を好み、讒人君子を傷つくるを諷す、東洛は東方の洛陽、池臺洛陽に禹錫の本宅あり、然るに朗州の司馬と爲りては身如何ともするなし、怨拋擲留守にして置く事を怨むなり、移文『齊書』に曰く周彥倫は鍾山に隱る、後詔に應じて令と爲る、却て此の山を過ぎんと欲す、孔稚圭が北山移文を作りて之を譏る、非久會應成禹錫の意、我は東洛の人なるに長安に移り、更に朗州の司馬と爲る、然るに風聞する所、久しからずして長安に召還せらると、依て東洛へも入らんかと思ふ、されど孔稚圭如き人ありて北山移文を作りて我を譏る者あるを恐るとなり、

【評論】此の篇、本集の題は「和僕射牛相公春日閒坐見懷」とあり、此の中で八字を除き去

る、牛相國とは牛僧孺なり、官等は相國と司馬、大に異なるが、詩としては僧孺贊を禹錫に執りしなり、禹錫一代に於て不平なるは朗州司馬たりし時を以て甚だしと爲す、托諷の詩、大抵此の時代に成る、方外の高僧に知己多きは畢竟是れが爲めのみ、此の篇以て其の一斑を見るべし、

晏安寺

李紳

寺深松桂無塵事 地接荒郊帶夕陽 啼鳥歇時山寂寂  
野花殘處月蒼蒼 碧紗凝艷開金像 清梵銷聲閉竹房  
丘隴漸平連茂草 九原何處不心傷  
寺は松桂に深うして塵事なし、地は荒郊に接して夕陽を帶ぶ、啼鳥歇む時山寂寂、野花殘る處月蒼蒼、碧紗艷を凝らして金像を開き、清梵聲を銷して竹房を閉づ、丘隴漸く平にして茂草を連ぬ、九原何れの處か心傷せざらん、

【略傳】李紳字は公垂、中書令敬玄が曾孫なり、人と爲り短少、時に短李と號す、憲宗の元和



中、進士と爲る、穆宗召して拾遺翰林學士と爲す、敬宗滌壽二州の刺史に遷す、文宗の開成、河南の尹と爲り、武宗の時、淮南節度使と爲り卒す、李德裕、元稹と三俊と號せらる、

【句釋】晏安寺は亳州に在り、亳は絳州と同じ、今日の山西省絳州絳縣東南、即ち李紳が郷里の寺、或は謂ふ檀越寺ならん、寺深松桂林と桂樹の陰深くして寺は閑寂なり、無塵事一塵も到らず、寺の清淨なる知るべし、寧齋は荒廢せる寺と云ふ、荒廢の理由詩に於て分明ならず、北接荒郊寺の接する所、荒郊であるが、寺も荒廢せりと言ふにあらす、帶夕陽夕陽の意は曉日と異なる、寺の荒廢せる意味は此の三字より判じたるならん、啼鳥歇時山寂寂鳥聲以外に聲なければ、鳥聲歇めば山は自ら寂寂たり、野花殘處月蒼蒼人の賞する者なき野花憐れに残る月之を照す、月影も亦蒼蒼たり、碧紗は佛堂に挂けたるもの、凝艶開金像碧紗の莊嚴具ある中に金銅の佛體開く、開くは寶龕の扉が開きあるなり、清梵銷聲閉竹房僧が誦經の聲消滅して後、其の竹房は閉づ、丘隴漸平連茂草隴上の少しく平坦なる處青青たる草が茂る、隴は冢なり、九原何處不心傷九原は元來、地下の事なるが、今地下と見るは淺し、墓原と見るを以て正しとす、丘隴の東西南北何處を見ても心を傷ましめざるもの無しとの意なり、唐以前の百官の墓地皆此の地にあればなり、

【評論】此の篇、寧齋は評して非常に名篇なる如く言ふが、李としては至るものにあらず、前に啼鳥を出し後に梵聲を出し、同一聲に屬するものを前後二聯に出す、斷じて巧なるものにあらず、李紳は憫農の詩あり、禾を鋤いて日午に當る、汗は滴たる禾下の土、誰か知らん盤中の飧、粒粒皆辛苦、

館娃宮

皮日休

艷骨已成蘭麝土 宮牆依舊壓層崖 弩臺雨壞逢金鏃  
 香徑泥銷露玉釵 硯沼祗留山鳥浴 屨廊空信野花埋  
 姑蘇麋鹿眞閑事 須爲當時一愴懷

艷骨已に蘭麝の土と成り、宮牆舊に依て層崖を壓す、弩臺雨に壞れて金鏃に逢ひ、香徑泥銷して玉釵を露はす、硯沼は祗だ山鳥の浴を留め、屨廊は空しく野花の埋むるに信す、姑蘇の麋鹿眞に閑事、須らく當時の爲に一たび懷を愴ましむべし、

【句釋】館娃宮は江蘇省蘇州の硯石山に在り、吳王の西施を置きし宮、吳の俗、美人を娃と云



ふ、故に美人を館する所の宮の義、艷骨已成蘭麝土一代美人を代表して天下羨望の種と爲りし西施の骨も已に土中に埋没して見るべきなし、艷骨を埋めし土、犬骨や馬骨を埋めし土とは異なる、猶ほ蘭麝の香氣を留む、麝と云ふ獸は雲南に産するもの、宮牆依舊壓層甍美人は已に死したるも、空牆は依然として層甍を壓する如く簞ゆ、弩臺は美人等をして弓弩を習はしたるもの、雨壞逢金鏃弩臺の舊跡が雨の度毎に壞れて往往金鏃を發掘する、香徑は採香徑、美人等と共に吳王が香花香草を種るし徑泥銷露玉釵雨の爲め土中が壞れて往往玉釵即ち玉の「カンザシ」が露はる、硯沼は硯石山の硯池を云ふ、祇留山鳥浴人の舟游するなければ、山鳥が得意に浴の池と爲す、屨廊は響屨廊榭楠即ち「クスノキ」を以て製す、西施が歩行する毎に屨の音が響く、吳王は其の音を聞て一種の快意を感せしなり、空信野花埋其の廊下も今日は往來する人無く、野花空しく之を埋むるのみ、姑蘇は臺名、吳王闔閭が築きしもの、此の臺にて日夜西施と遊ぶ、麋鹿眞閑事『史記』に吳王が子胥に死を賜ふ時、子胥天を仰ぎ歎じて曰く嗟乎讒臣亂を爲す、王乃ち我を誅すと、他の書には子胥、吳王を諫めて曰く臣恐らくは久しからずして、麋鹿姑蘇の上に游ばんと、其の子胥の諫を用ひざるに由て遂に其の事「ムダ」になる、閑事は「ムダ」の意義なり、須爲當時一愴懷當時は吳王の時、館娃宮に遊ぶ者は其の興る所以、其の亡ぶ

る所以を想うて我も彼も驕奢女色は戒しめざるべからずとなり、懷愴ましむる者は詩人なり、俗人の知る所にあらず、

【評論】 此の篇、徹頭徹尾、吳王の荒淫を諷し兼て人主の訓戒と爲す、皮日休は賊徒黃巢の爲め殺さるるに臨み、神色自若たりと、其の詩人としての人格も高しと謂ふべし、詩庸流を抜く固より其の所なり、

方干隱居

李山甫

咬咬嘎嘎水禽聲 露洗松陰滿院清 溪畔印沙多鶴跡  
 檻前題竹有僧名 問人遠岫千重意 對客閒雲一片情

早晚塵埃得休去 且將書劍事先生

咬咬嘎嘎たり水禽の聲、露は松陰を洗つて滿院清し、溪畔沙に印して鶴跡多し、檻前竹に題して僧名あり、人に問ふ遠岫千重の意、客に對す閒雲一片の情、早晚か塵埃休し去ることを得て、且書劍を將て先生に事へん、

【略傳】 李山甫は咸通間の人「唐書」の王鐸傳に載するを按ずるに數ば進士に擧すれども黜け



らる、魏の幕内樂が禍に依て且中期の大臣を怨み樂彦禎が子の従を導き訓ふるに詭謀を以てし兵を高雞泊に伏せ劫かさしむ、王鐸が家屬吏佐三百餘人皆害に遇ふ、即ち其の人なり、

【句釋】方干は桐廬の人、幼にして清才あり、世の營務に拙、鏡中に隱居す、湖北に茅齋あり湖西に松島あり、家貧なるも古琴を蓄へて、行吟醉臥以て自ら娛しむ、隱居は即ち鏡湖上なり咬咬嘎嘎は水禽の啼聲を形容す、字義は未だ詳ならず、露洗松陰滿院清湖には水禽鳴き庭には松あり露氣之に滴たり院中皆な清し、溪畔印沙多鶴跡溪沙に跡あるは即ち鶴の遊びしを知る、檻前題竹有僧名竹に題したる詩は即ち是れ山僧なるを知る、問人主人方干に問ふ、遠岫千重意山に岩穴あるを岫と云ふ、此の岫が千萬重なるを見て感興は日日起るならんと問ふ、對客甫自ら客と云ふ、閒雲一片情悠悠として何等求むる所無き雲を閒と云ふ、早晚塵埃得休去方干が自適の事を聞いて我も羨望の念起らざるを得ず、世間の塵事を休し去らんことを希ふが、それは早晚ぞや、且將書劍事先生書と劍とは諸生の離すべからざる具、是の故に此の具を携帶し來りて方干先生に師事せんと欲するなり、

【評論】此の篇、清遠閒淡其の隱居の佳なる事想像に餘りあり、李山甫は議すべき所あるも、方干其の人の高きは全く此の詩に露はる、張南史の春山道中より此に至る七首、前實の語軽く

後實の情深きものなり、

酬李端病中見寄

盧 綸

野寺昏鐘山正陰 亂藤高竹水聲深 田夫就餉還依草

野雉驚飛不過林 齊沐暫思同靜室 清羸已覺助禪心

寂寞日長誰問疾 料君唯取古方尋

野寺の昏鐘山正に陰し、亂藤高竹水聲深し、田夫餉に就いて還た草に依り、野雉飛ぶに驚き林を過ぎず、齊沐暫く思ふ靜室を同うせんことを、清羸已に覺ゆ禪心を助くることを、寂寞として日長く誰か疾を問はん、料る君が唯古方を取つて尋ねんことを、

【句釋】酬李端病中見寄李端が病を養うて野寺に在り詩を得て盧綸に寄す、依て之に酬いたるなり、野寺昏鐘山正陰是れ前日、盧綸が李の病を野寺に問うた時の景を叙す、夕暮ならんとして鐘鳴り山も亦暗くなる、亂藤高竹水聲深寺門の周圍に亂藤や高竹あり、其の間を流るる水聲は澗底に深く聞える、田夫畊田の野夫、就餉午時に當り正に食ふ、還依草草を敷て坐するなり、



野雉驚飛「驚き飛ぶ」と訓むときは、田夫の足音に野雉が驚き飛ぶなり、「飛ぶに驚き」と訓むときは一雉が飛べば衆雉が共に飛ぶなり、今後説を取る、且後説を以て趣致多しとす、不過林遠く奔らざるが野雉の性なり、齊沐は齋戒と沐浴、極めて身を清淨に持すること、暫思同静室君は野寺の淨室に病を養ふなるが、我も君と同様に梵行を暫らく修せんと思ふ、清羸は清く瘦せたること、已覺助禪心李端の清羸なる態を見ると言はずして覺る本禪心を助長するが故なるを、寂寔日長誰問疾「維摩經」に問疾品あり、佛陀が諸弟子をして維摩の疾を問はしむ、然るに諸弟子悉く維摩の爲め説破せらる、此の詩其の字面を用ひて意は反對に問ふ人の無きを言ふ、肺病なりし事分明なり、料君唯取古方尋人の問ふ者無ければ、君自ら古の醫方を把て治療法を尋ぬるならんと料り知るなり、

【評論】此の篇、一二は夕暮に訪問の事を叙し、三句以下は翌日の事を叙す、李端は今日所謂肺病の人にて、念の塵世に求むる無く、高僧皎然に依て書を讀み、意況清虚、酷はだ禪侶を慕ふ、端自ら言ふ余少にして神仙を好み、且くも去ること能はず、友人暢當禪門を以て導かる、余が心未だ其の門を得ざるを知る、是に由て之を觀れば、初め仙を學び後佛を學びしが如し、古方の二字、淨名の字に改めなば一層妙ならんと思はるるが、初め仙方を學びし事を忘れざる

爲めならん、問疾は淨名經に出る語なれば、唯其の切なるを思はしむ、

贈道士

褚戴

簪星曳月下蓬壺 曾見東臯種白榆 六甲威靈藏瑞檢  
五龍雷電遶霜都 唯教鶴探丹丘信 不使人窺太乙爐  
聞說葛陂風浪惡 許騎青鹿從行無

星を簪にし月を曳いて蓬壺を下る 曾て見る東臯に白榆を種るしことを、六甲の威靈瑞檢に藏め、五龍の雷電霜都を遶る、唯鶴をして丹丘の信を探らしむ、人をして太乙の爐を窺はしめず、聞くならく葛陂風浪惡しと、青鹿に騎つて行に從ふを許さんや無や、

【略傳】褚戴字は厚之、乾寧二年の進士、家貧、梁宋間に客として困すること甚し襄陽節度使君牙に詩を投ず、君牙絹千疋を贈る、後、裴贇貢舉を知し、之を薦むと云ふ、  
【句釋】贈道士何人なるや未詳、簪星曳月は星冠月佩、即ち道士が身の飾具なり、下蓬壺蓬



萊と方壺、日常仙人の住處、今下界へ下るなり、曾見東皐種白榆東皐は東方、白榆は星の名、天地開闢の時、天帝が白榆星を東方に配置せし事を見しならんと云ふ、六甲は甲子、甲寅、甲辰、甲午、甲申、甲戌、老君六甲符に云ふ、丁卯の神は司馬卿、丁丑の神は趙子玉、丁亥の神は張文通、丁酉の神は藏文公、丁未の神は石叔通、丁巳の神は崖巨卿、威靈藏瑞檢瑞は玉、檢は匣、玉匣中に藏する者は六甲六神の威靈なり、五龍雷電遠霜都五方の星を五龍と稱す、此の五方の星が雷電の如き光輝を放つて霜壇を遶るなり、霜の字は潔白を意味し、都の字は壇を意味す、唯教鶴探丹丘信道士は鶴を使用すること自在にして、仙人の住する丹丘へ遣はし其の信を探索せしむ、不使人窺太乙爐太乙丹を煉る爐火の事は尋常の人間をして決して窺知せしめず、是れは秘法なればなり、聞説葛陂風浪惡『神仙傳』に壺公が費長房に竹一竿を遣り、竹に乗り地を縮めて歸らしむ、後、竹を葛陂に投すれば化して龍と爲ると、風浪の惡しきは龍が棲めばなり、許騎青鹿從行無蘇耽は常に青鹿に騎つて往來したることあり、我も亦蘇耽の如く道士の行歩に従がつて行かんと欲す、君之を許すや否やとなり、

【評論】此の篇、道士の事を叙するに、塗澤甚だ過ぐ、素隱は節節生意格の詩體なりとて稱讚すと雖も、其の實稱讚の價無きものなり、余をして評せしむれば俗惡下劣のものなり、

送客之湖南

白居易

年年漸見南方物 事事堪傷北客情 山鬼趨跳唯一足

峽猿哀怨過三聲 帆開青草湖中去 衣濕黃梅雨裏行

別後雙魚定難覓 近來潮不到滄城

年年漸見南方物、事事堪傷北客情、山鬼趨跳唯一足、

峽猿哀怨三聲を過ぐ、帆開いて青草湖中に去り、衣濕うて黃梅雨裏に行く、

別後雙魚定んで覓め難からん、近來潮は滄城に到らず、

【句釋】送客之湖南樂天が杭州に在つて客の湖南の潭州へ行くを送る、年年漸見南方物樂天は

太原の人、太原は北地に屬す、其の北地の人が、杭州の刺史と爲つて此に住する久し、南方の事物に看熟し來る、事事堪傷北客情情を傷ましむる所以のものは、事事好む所のものにあらざればなり、山鬼趨跳唯一足嶺南に獨足にして反踵なる者あり之を山魃と云ふ、趨跳は其の態を言ふ、人面にして猴身、峽猿哀怨過三聲峽中を通過して猿聲を聞くときは定んで鬪腸し玉はんとなり、帆開青草湖中去一帆を開いて青草湖中に去り玉ふぞ、青草と洞庭の二湖は、半ば潭州



に屬し、半ば岳州に屬し、南を青草湖とし、北を洞庭湖と曰ふ、衣濕黃梅雨、裏行梅天の時節、南方を旅行する者衣服の敗黣するを憂ふが常態なり、別後雙魚定難覓、雙魚は其の書信を云ふ、近來潮不到、湓城江州德化縣の西一里に湓城あり、曾て人あり此の浦中に於て銅盆を洗ふ、水に墮し之を取れば一龍の出るを見ると、潮到らざれば、雙魚も到る能はず、

【評論】此の篇、對を以て起し、所謂句句傷情を叙し、自家の詩、他卑陋のものと大に徑庭あり、其の得も其の失も、共に此の和平に在り、此の詩和平中に在つての佳章とす、

送劉谷

村橋西路雪初晴 雲暖沙乾馬足輕 寒澗渡頭芳草色

新梅嶺上鷓鴣聲 郵亭已送征車發 山館誰將候火迎

落日千峯轉迢遞 知君回首望高城

村橋の西路雪初めて晴る、雲暖に沙乾いて馬足輕し、寒澗渡頭芳草の色、新梅嶺上鷓鴣の聲、郵亭已に征車の發するを送る、山館誰か候火を將て迎へん、落日千峯轉た迢遞、知んぬ君が首を回らして高城を望むことを、

【句釋】劉谷は未詳、嶺南へ赴くなり、西路村橋の西路まで其の行を送る、雲暖沙乾天氣は暖、沙土は乾く、馬足輕劉谷が騎馬は行に宜し、寒澗の七字は水上の景、新梅の七字、山上の景、芳艸は不歸草、鷓鴣は行不得、送る者は行き得ず、行く者は歸り得ず、此の中限り無き傷心あり、郵亭は驛亭長を云ふ、已送征車發劉谷が征車を亭長之を送る、山館誰將候火迎松明を候火と云ふ、山館に君の著車を迎ふる者は誰ぞや、落日千峯轉迢遞は「ハルカ」又「トホシ」なり、落日は人の感傷を起さしむるの時なり、知君回首望高城望む所の高城は長安、劉谷の常在地なれば、其の方角を回望せざるを得んや、

【評論】此の篇、樂天一家の法、發露して隠さざるもの、紀曉嵐にあらざるも、粗俚の譏りは免れざるべし、

江上逢王將軍

虬鬚憔悴羽林郎 曾入甘泉侍武皇 鵬沒夜雲知御苑

馬隨春仗識天香 五湖歸去孤舟月 六國平來兩鬢霜

唯有桓伊江上笛 臥吹三弄送斜陽



虬鬚憔悴す羽林郎、曾て甘泉に入りて武皇に侍す、鵬は夜雲に没して御苑を知り、馬は春仗に随つて天香を識る、五湖歸り去る孤舟の月、六國平げ來る兩鬢の霜、唯桓伊が江上の笛あつて、臥して三弄を吹いて斜陽を送る、

【句釋】江上は分明ならざるが杭州に在ての作ならん、王將軍は未詳、虬鬚が蟠虬の如くなるなり、唐太宗曰く虬鬚以て弓を掛けつ可しと、憔悴は老て衰へたるなり、羽林郎は官名、武人に附與する名、文官は關からず、王將軍が曾て此の官なりしなり、曾入甘泉甘泉宮は圓至曰く三あり秦の甘泉は渭南、漢の甘泉は雲陽縣磨石嶺上、隋の甘泉は鄠縣に在り、秦の始皇、太后を迎て咸陽に入り、復甘泉に居る、徐廣曰く表に云ふ咸陽の南宮なり、秦時の咸陽は渭の南北に跨がる、則ち此の宮は渭北の咸陽に在らずして渭南の咸陽に在り、此れ秦の甘泉なり、漢の元封元年に始めて磨盤嶺秦宮の側に即て甘泉を作る、此れ漢の甘泉なり、元和志に曰く隋宮は鄠縣の南二十里に在り、甘泉谷に對す、此れ唐の甘泉なり、侍武皇玄宗を指す能はず假りに武皇と云ふ、玄宗護衛の侍從武官たりしなり、鵬は「オホワシ」鷲の大なるもの、没夜雲知御苑鵬が夜雲に没すと雖も我は御苑中の物なりと知るが故に又歸り來るなり、天子夜獵の事、上

代之れ有りしと云ふ、馬隨春仗識天香此の句意は馬が隨仗に習うて天香を聞き識るなり、天子の隨兵を仗と云ふ、仗前に香を焚く之を天香と云ふ、必ずしも儀式にはあらず、天子の費澤なるが故に香などを焚く、五湖歸去孤舟月王將軍が歸隱を云ふ、六國は秦の王翦王賁父子が平らげたるを以て今王の姓同じきが故に譬ふ、平來兩鬢霜多年軍中に往來疾驅したるを云ふ、唯有桓伊江上笛晉の桓伊、征南將軍と爲る、王徽之、之に江上に遇うて曰く聞く卿善く笛を吹くと、今以て王將軍が歸隱に際し、珍寶を多く攜帶せず、但一笛のみ將て去る、其の高潔を意味するなり、臥吹三弄送斜陽晉の征軍將軍が王徽之の爲め馬より下り床に踞して三弄して去る、今乃ち王將軍を云ふ、臥の字は必ず横臥と見るにあらず、氣儘にと云ふ俗語の意味なり、

和皮日休酬茅山廣文

陸龜蒙

一片輕帆背夕陽、望三峯拜七眞堂、天寒夜漱雲芽淨、雪壞晴梳石髮香、自拂煙霞安筆格、獨開封檢試砂床、

【評論】此の篇、自家の常習を脱して岑嘉州及び高逵夫の領域に入るもの、將軍の風采、將軍の高潔、王翦を以て譬へ、范蠡を以て比し、前半は過去を叙し、後半は現在を叙し、所謂、行氣虹の如く、行神空の如きもの、自家の一誦三嘆すべきは此れ是れ等の篇に在り、



莫言洞府能招隱 會輓颯輪見玉皇

一片の輕帆夕陽に背き、三峯を望んで七眞堂を拜す、天寒うして夜雲芽の  
淨きに漱ぐ、雪壞れて晴れて石髮の香しきを梳る、自ら煙霞を拂つて筆格  
を安んじ、獨封檢を開いて砂床を試む、言ふこと莫れ洞府能く隱を招くと、  
會ま颯輪を輓つて玉皇に見ゆ、

【句釋】 和皮日休酬茅山廣文初め廣文が詩を作り皮に寄す、皮乃ち和して作る、其の皮が詩に  
更に和したるものが陸なり、一片輕帆背夕陽皮日休が茅山へ至れる時の事西を背にして東に向  
ふゆる背夕陽と云ふ、望三峯茅山は潤州延陵縣に在り、大茅君と中茅君と小茅君の三峯あり、  
七眞堂は七真人堂、七真人の偶像を置く、大茅、中茅、小茅、大許、小許、陽、郭の七真人、  
天寒夜漱雲芽淨『上元寶經』に云ふ大極真人は四極の雲芽を服すと、此の雲芽は何物たるを解  
せざるが茶に雲芽の稱あるより見れば、是れは茶と見て可なり、茶で口を漱ぐなり、漱ぐ者は  
皮日休なり、雪壞晴梳石髮香苔の異名を石髮と云ふ、雪が融壞したるに依て庭を見れば苔色が  
奇麗に人の髪を梳げづる如くなり、自拂煙霞安筆格此の煙霞は讀んで字の如くなるや、或は廣

文が文の美なるを形容して言ふなるや、字の如く天の煙霞と見る方可ならん、安筆格安は安置、  
筆格を安置する、其の筆格を安置する机邊も煙霞が線遠する、是れ仙家の常なればなり、自ら  
是を拂ふ、獨開封檢試砂床封檢は大切なる函、即ち其の大切なる函を開いて砂床を試む、朱砂丹  
砂にて道士が藥に煉るなり、辰州の丹砂、下に白石あり上に砂あり、其の石、玉の如し、土人  
これを砂床と謂ふ、共に是れ廣文が所作を言ふ、莫言世人に言うては不可と令する、洞府は赤城  
に在り、仙人の住處、能招隱隱淪の徒を招尋するなり、會碾碾は輓と同じ、車聲の轟く響き、  
颯輪は仙人の乗る車を、颯車羽輪と云ふ、此の颯車羽輪を輓らすにあらざれば到る能はず、見  
玉皇而して天上の玉皇、即ち仙の本尊に相見せんとなり、

【評論】 此の篇、一二三四は皮日休を言ふ、五六は廣文を言ふ、七八は皮と廣と并せて言ふ、  
日本にて都良香が氣齊れて風は梳る新柳の髪、と歌うて、後句未だ成らざるに羅城門上に鬼  
あり歌うて曰く氷消して波は洗ふ舊苔の鬚と、此の三四の句を學びしものなり、此の鬼亦真人  
の使役する所の鬼ならん、

宿雨清秋霽景澄 廣庭高榭更晨興 煙橫博望乘槎水  
蒲津河亭 唐彦謙



日上文王避雨陵 孤棹夷猶期獨往 曲欄愁絕每長凭  
思鄉懷古多傷別 此際哀吟幾不勝

宿雨清秋霽景澄む、廣庭の高榭更に晨に興く、煙は横はる博望乘槎の水、日は上る文王避雨の陵、孤棹夷猶獨往を期し、曲欄愁絶毎に長く凭る、郷を思ひ古を懷うて多く別を傷む、此の際哀吟幾んど勝へず、

【句釋】 蒲津は關名、山西省蒲州府永濟縣、古代舜の都する所、河亭唐は王重榮が推舉に依て河中從事と爲る、其の後、四方を流寓して此を經過せしものならん、宿雨清秋霽景澄是れは詩として常套語、廣庭は河亭の廣庭なり、高榭水中の臺を榭と云ふ、此に宿して晨早く起きたるなり、煙横博望乘槎水銀河に猶煙が朝來横はるとの意、漢の張騫は西域に往來して博望侯に封せらる、槎即ち「イカダ」に乗り天漢に至りて牛女を見しと其の事を云ふ、日上文王避雨陵蒲津の東方に當つて東嶂、西嶂の二山あり、是れ周の文王が雨を避し處、今此の山に當りて旭日の上るを見る、孤棹は孤舟に棹して、夷猶は「楚詞」に出づ君行かずして夷猶す、猶與と同じ、雨か晴かと「タメラフ」なり、期獨往獨往を定めたるが、曲欄愁絶每長凭一旦は發足せんかと定

めたるも尙不安の念に襲はれ曲欄に凭て兔や角愁思する、思郷懷古多傷別故郷の事や、過去の事を懷へば或は恩人の王重榮は害に遇ひ、郷里の故人は死し、或は別れ、皆な是れ傷むべし、此際哀吟幾不勝幾は「ホトンド」俗語の「ドウシテモ」に當る、

感 懷

劉長卿

秋風落葉正堪悲 黃菊殘花欲待誰 水近偏逢寒氣早

山深長見日光遲 愁中卜命看周易 夢裏招魂誦楚詞

自笑不如湘浦雁 飛來却是北歸時

秋風落葉正に悲むに堪へたり、黃菊殘花誰を待んと欲する、水近うして偏に寒氣の早きに逢ひ、山深うして長く日光の遲きを見る、愁中に命を卜して周易を看、夢裏に魂を招いて楚詞を誦す、自ら笑ふ湘浦の雁にだも如か



ざるを、飛び來つて却て是れ北歸の時、

【句釋】 感懷は秋に逢うて感じたる懷を寫すなり、吳仲孺の誣奏に依て罪にあらすして姑蘇の獄に繋がる、是れ獄中の作とす、秋風落葉正堪悲秋風の颯颯、落葉の蕭蕭、尋常人すら此の聲を聞き悲しまざるは無し、況んや詩人が獄中に於てをや、黃菊殘花欲待誰我が故園の菊花は垂殘の色を餘して畢竟誰を待つや、主人は獄に在つて天日を仰ぎ見る能はず、況んや故園に去て爾を賞するの事あらんや、水近偏逢寒氣早姑蘇は支那第一の水國なり、到處然り、況んや獄牢の如きは國の邊隅に置く、水近うして寒氣を知る早きは當然なり、山深長見日光遲イツマデも日光を見るの遅き意、疑獄を悲しむ意、天恩を拜せざるの意、愁中卜命看周易周の文王が易を作り玉ひし處は獄中なり、我も其の運命を卜せんが爲め愁へ乍ら之れを讀む、夢裏招魂誦楚詞招魂と云ふは人の死する時に、其の實に死したることを知らざる先きに、其の死人の常に著けたる衣を持って屋上に上り、東方に向つて衣を倒にし振つて魂來分と三度呼ぶ、而して蘇生せざれば、實に死したること知つて、喪具の用意を爲す、屈原の弟子宋玉が、屈原の爲め文を作り以て屈原の魂を招く、而して屈原は未だ死せざるの時なり、二句共に哀愁の極を言ふ、自笑不如湘浦雁非常に悲んだ結果、却て自ら笑、悲の極笑に歸す、此の笑亦悲しむべきなり、何

故に悲しむべきや湘浦の雁にだも如かざればなり、飛來秋は北地より南來し、春は南地より北地へ飛來するが雁の性なり、而して彼は其の性の儘を行なふ、我は其の儘を行なふ能はず、却是北歸時南より北に歸る、時正に春、  
【評論】 此の篇、一讀過、浩然として彌よ哀し、文房の人と爲り剛直、權貴に屈せず、兩度の遷謫は畢竟自ら取る所なりとの論あり、此の詩悲慨の中、勁健の氣を存し、中唐を代表せる作と謂つ可し、

輞川積雨

王維

積雨空林煙火遲 蒸藜炊黍餉東菑 漠漠水田飛白鷺  
陰陰夏木轉黃鸝 山中習靜觀朝槿 松下清齋折露葵  
野老與人爭席罷 海鷗何事更相疑  
積雨空林煙火遲し、藜を蒸し黍を炊ぎて東菑に餉す、漠漠たる水田白鷺飛び、陰陰たる夏木黃鸝轉ず、山中に習靜して朝槿を觀じ、松下に清齋して露葵を折る、野老人と席を争ひ罷む、海鷗何事ぞ更に相疑ふ、



【句釋】 輞川は陝西の藍田縣に在り、王晩年に宋之間が藍田の別墅を得たり、輞口に在り、水  
 舎下を周り竹洲花塢あり、道友裴迪と舟を浮べて往來し琴を弾じ、詩を賦す、積雨は霖雨なり、  
 空林は清淨なる林の意味、枯林の如く葉も無き林と混する勿れ、煙火遲晨炊の煙火を揚ぐる者  
 遲し、俗市と喧寂を異にするを云ふ、蒸藜野菜を蒸す、炊黍「キビ」を炊ぐ、餉東菑菑は田なり、  
 東田に畊作する者に餉せしむ、午時の食を與ふるなり、漠漠は暗く連なる貌、水田飛白鷺此の  
 五字は李加祐が句、陰陰は暗く茂りたる貌、夏木嘯黃鸝此の五字も李加祐が句なり、漠漠陰陰  
 の四字を添加して以て始めて神采奕奕たるなり、山中習靜坐禪して萬物を靜觀す、觀朝槿必す  
 しも字の如く槿花を觀ると言ふにあらす、人世の浮幻、朝槿の如きことを觀するなり、松下清  
 齋松下に倚て清淨潔齋する、折露葵『顏氏家訓』に蔡朗が父純、蓴を以て露葵と爲す、露葵は  
 即ち蓴菜なり水郷の出す所、松下にて之を羹にして食ふ、折の字を疑うて云云する者は字に泥  
 んで詩を知らざるもの、野老與人爭席罷我は上席なり、彼は下席なりと野老輩が争ふが、王が  
 席などを貪著せざるを見傲うて遂に野老も其の争ひを罷めしなり、海鷗何事更相疑我は彼を取  
 らんと欲する念無きに鷗は何事ぞ我を疑うて飛び去るや、『莊子』に海上の翁、海上に之く毎に  
 則ち羣鷗之に隨がふ、後之を取んと欲す、機心一たび萌す、鷗鳥舞うて下らず、

【評論】 此の篇、王一家の正宗の存する所、起句の積雨より結句の海鷗に至るまで字として精  
 ならざるは無く、句として妙ならざるは無し、曰く空林、曰く東菑、曰く水田、曰く夏木、曰  
 く山中、曰く松下、曰く白鷺、曰く黃鸝、曰く朝槿、曰く露葵、字として清ならざるは無く、  
 句として淡ならざるは無し、積雨の二字より他の五十四字出で、而して他の五十四字悉く積  
 雨の二字に歸す、而して畊父の勞を憐れむ意もあり、自然を樂むの意もあり、世外に道を求む  
 るの意もあり、實に他千萬言の勞して功無きものに比して五十六字宇宙を牢籠すと謂ふ可し、  
 古人云ふ詩中に畫あり、畫中に詩ありと、眞に此の詩に於て是を見る、

石門春暮

錢起

自笑鄙夫多野性 貧居數畝半臨湍 溪雲雜雨來茅屋  
 山雀將雛傍藥欄 仙籙滿床閒不厭 陰符在篋老羞看  
 更憐童子宜春服 華裏尋師到杏壇  
 自來笑鄙夫野性多きことを、貧居數畝半は湍に臨む、溪雲雨を雜へて茅  
 屋に來り、山雀雛を將て藥欄に傍ふ、仙籙床に滿ちて閒厭はず、陰符篋に



在り老て看るを差づ、更に憐む童子春服に宜しく、華裏師を尋ねて杏壇に到ることを、

【句釋】石門は山東省濟南府臨邑縣に在り、錢起の別墅に於て春暮の景を叙す、自笑鄙夫多野性我自身の性質は野性にして摺紳の性にあらすと自ら笑ふ、鄙夫は謙遜して云ふ、貧居數畝半臨湍我家は極めて小なるが景は稍や可なり、湍水に臨んであればなり、湍は急湍俗に云ふ「ハヤセ」急瀬なり、溪雲雜雨來茅屋是れ非情物の景、山雀將雛傍藥欄是れ有情物の景、藥欄は藥草園にして花藥の欄にはあらず、仙籙は仙書、籙は籍なり、滿床閒不厭仙書を多數に藏して床に滿つる程あり、清閒なるを厭はざるは此れを讀めばなり、陰符黃帝陰符經三卷、陰は性の宗、符は命の本、内は以て身を修め、外は以て國家を治む、蘇秦が鬼谷子より授かりしものは太公望が「陰符」なりと云ふ、在篋老羞看蘇秦が一所懸命に陰符を讀みしは畢竟功名の念增長すればなり、我は老て功名の念無し、故に此の書を見るを差づ、差づるは竟に讀まざるなり、仙籙の句は、讀書に志の存するを言ふ、陰符の句は功名に念の無きを言ふ、更悵童子宜春服「論語」に春服既に成る冠者五六人、童子六七人、とあり、可憐なる童子が各の春服を著して來る、華裏

尋師到杏壇「莊子」に孔子緇帷の林に遊んで杏壇の上に坐し、絃歌して琴を鼓す、杏壇は澤中の高處、一に云ふ壇名と、

【評論】此の篇、閒居自適の情趣を寫して清絶限り無し、仙書と兵書と論語と莊子の四書を運用して而かも頭巾氣無し、正に是れ大家の作、

酬慈恩文郁上人

賈島

袈裟影入禁池清 猶憶鄉山近赤城 籬落罅間寒蟹過  
莓苔石上晚蛩行 期登野閣閒應甚 阻宿幽房疾未平  
聞說又尋南岳去 無端詩思忽然生  
袈裟の影は禁池に入つて清し、猶ほ郷山の赤城に近きを憶ふ、籬落罅間寒蟹過ぎ、莓苔石上晚蛩行く、野閣に登らんことを期せば閒應に甚しかるべし、阻られて幽房に宿し疾未だ平ならず、聞くならく又南岳に尋ねて去ると、端無く詩思忽然として生ず、

【句釋】慈恩は寺名、文郁は吳の湘東郡の人、來つて長安の大寺慈恩に住したるが、今南岳へ



歸らんとて詩を作り島に寄す、島即ち此の詩を以て報酬せしなり、袈裟は梵語「キヤラサエ」の略音を寫す、譯すれば、「不正色」となる、不正色とは純なる色、即ち紫、紅、白、黃等總て純にして雜ならざる色の反對、故に之を又壞色と譯す、義譯して「離染服」「出世服」「無垢衣」「忍辱鎧」「福田衣」「蓮華衣」と云ふ、三種あり僧伽梨、大衣、二十鬱多羅僧、上衣、七條安陀會中衣五條是れなり、日本の佛徒は「衣」と「袈裟」と分つが滑稽の極なり、衣の外に袈裟なく、袈裟の外に衣なき也、是の故に木蘭樹の如き色に染めて著するを正とす、影入禁池清寧齋は禁池は慈恩寺中に在りと云ふ、素隱は禁中の池水なりと云ふ、放魚池と見れば寺中の説可なり、單に禁池と見れば宮禁中の説可なり、慈恩寺は長安の巨刹にして天子も猶幸す、寺主と爲る者は宮禁へ出入自由なれば、上人が參内して其の袈裟の影が禁池に映じて清しと見るもの如し、其の實上人は塵垢無し清淨の僧なりと云ふ意、猶憶郷山近赤城郷山は故郷の山、即ち南岳山、赤城は郡名、唐の台州府なり、即ち天台山の在る所、參内すること自由なる高僧は天下幾人も無し、尋常の俗僧なれば其の榮達を喜ぶなるに上人は然らず、此の榮達にかかはらず猶南岳や天台の山水を憶うて居らるとの意なり、離落罽間寒蟹過罽は訓「サクル」裂也とありて、離の孔罽なり其の間に蟹が往來する、是れ南岳の實況、莓苔は「コケ」石上晚蛩行一方には蟹が往來し

一方には蛩が往來す、幽趣靜味、慈恩寺に無き所とす、是れも南岳の實況、期登野閣閒應甚素隱は此の野閣を解して云ふ、南岳へ歸られなば再び相見無けん、依て我等が野閣は幽閒なるほどに上人の機を舒べ玉ふにもよかるべしと、若し素隱の解する如くなれば應期の二字頗る著處なし、期の字は上人と島と二人にかかる、二人して共に野閣に登らんことを約束爲したるも如何せん我は阻宿幽房疾未平病の阻害する所と爲つて幽房に起臥し上人と會て期したる野閣の閒游行吟は能はずと嘆するなり、素隱和尚の解は全く誤まる、寧齋云ふ野閣に登るを言うて其の閒を羨む、閒を羨む所以の者は己れが幽房に疾を養うて未だ平癒せざるが爲なり、此の解は「應」の字を重く見たる結果なり、今取らず、聞説又尋南岳去會て野閣に登る志を聞て已に其の閒を知る然るに又南岳に去ると、上人は閒愈よ閒なるなり、無端は用處に依て、意義を異にす、『史記』田單傳に太史公曰く兵は正を以て合し、奇を以て勝つ、奇正相生じて環の端無きが如し、『漢書』に天圓かにして端無し、故に觀る可らず、見るに由しなきなり、端の首と始の訓あるを知らば自ら解し易し、如何とも爲さず」が今の詩意とす、詩思忽然生病中ながら上人の行脚するを聞き久しく消滅したる詩思が今日突然として湧き忽然として成りしとの意、

【評論】

此の篇、題目、慈恩の事は僅か一句に其の意を叙し、而して餘の七句は上人と自身の



事を合叙し、極めて細景を出して極めて幽趣を表はし、浪仙家法の推敲の至るもの、文郁の詩は惜い哉『全唐詩』に逸して傳はらず、

江亭秋霽

李 郢

碧天涼冷雁來疎 閒看江雲思有餘 秋館池亭荷葉後  
野人籬落豆花初 無愁自得仙翁術 多病能忘太史書  
聞說故園香稻熟 片帆歸去就鱸魚

碧天涼冷雁の來ること疎なり、閒に江雲を看て思餘りあり、秋館の池亭荷葉の後、野人の籬落豆花の初、愁なきも自ら得たり仙翁の術、多病能く忘る太史が書、聞くならく故園香稻熟すと、片帆歸り去つて鱸魚に就かん、

【略傳】李郢字は楚望、大中十年の進士、初め餘杭に居る、出るときは山水の興あり、入るときは琴書の娛あり、馳競に疎にして、藩鎮從事と爲り、侍御史に終ふ、

【句釋】江亭秋霽江上の小亭、秋日の霽景、碧天涼冷空を仰げば秋天は碧にして秋氣は涼冷なり、雁來疎雁の多數來らんことを望むも恨むらくは疎なり、郷信の少なるを云ふ、閒看江雲思

有餘江上の雲を看るは即ち郷信の至らんことを思ふ、而かも至らず、思の窮まらざる所以、秋館池亭荷葉後時節秋晩に際すれば益す思窮まらず、荷葉後は荷花の散後を云ふ、九月の候なり、野人籬落豆花は秋晩に開き、冬日實を收む、節物を見て光陰の移變に感するなり、無愁自得仙翁術我は憂愁の性は持たず、故に仙術なぞを知つて愁を消する如き思は無用なるが、而かも自然と葛仙翁が鍊丹の秘術は心得して居る、多病能忘太史書多病は記憶の力薄きを云ふ、是れ一種の病なればなり、諸注皆誤る、『史記』百三十卷は漢の司馬遷著はす所、太史公は即ち司馬遷なり、忘るる所以は功名に念の無きが爲めなり、聞說故園香稻熟人の言ふを聞くに只今は杭州正に香稻熟する時節なりと、片帆歸去就鱸魚稻の熟する時は、秋晩、秋晩は鱸魚の正に美なる時なり、鱸魚の美を思つて故園へ歸らんと欲する者何ぞ獨、張翰のみならんや、

【評論】此の篇、李が未及第の時の作とす、前途希望の光を認むるを以て、郷を思ふと雖も、失意の態を爲さず、仙翁の術を得たりと稱す、良とに然るを知る、

漢南春望

薛 能

獨尋春色上高臺 三月皇州駕未回 幾處松筠燒後死  
誰家桃李亂中開 姦邪用法元非法 唱和求才不是才



自古浮雲蔽白日 洗天風雨幾時來

獨春色を尋ねて高臺に上る、三月皇州駕未だ回らず、幾處の松筠か焼後に死し、誰が家の桃李か亂中に開く、姦邪法を用ふる元法に非ず、唱和才を求むる是れ才ならず、古より浮雲白日を蔽ふ、天を洗ふの風雨幾時か來らん、

【句釋】漢南は本、楚の地、秦、天下を兼て漢より以南を南郡と爲し(荊州)、漢より以北を南陽と爲す(鄧州)、今日湖北省荊州府江陵縣なり、五代の劉巖、國を稱して南漢と云ふ、此れは廣東省廣州府、薛能が許州の忠武城を守りし時の作、獨尋春色上高臺四方の春色を望見せんと欲して高臺に上る、三日皇州駕未回僖宗は廣明元年十二月黃巢が兵亂を避けて蜀に幸し、此より六年を経、光啓元年二月京師に還る、然らば此の詩は廣明二年三月に作りしものなり、皇州は長安を指す、幾處松筠焼後死臺上より望見するに處處の松樹や竹林が兵火の爲め焼かれ皆枯死する、誰家桃李亂中開兵亂に逢うて事事物物悲惨なる處、桃李の開くは是れ誰が家ぞや、姦邪用法元非法姦邪は何人と明示したるにはあらざるも田令孜が侯昌業の上疏を屏ぞけ權を專

らに爲す類の徒を指すと見て可なり、正法にあらずして所謂邪法なり、唱和求才不是才文を賦し詩を作るも根柢の無き徒は是れ眞の才にあらず、彼れ唱へ此れ和す憐れなる輕薄才人を罵する、自古浮雲蔽白日浮雲は姦邪の臣なり、白日は天子なり、天子の聰明を蔽ひ藏す者は南司北司の愚臣輩なり、洗天風雨幾時來周の武王殷の紂王を伐つ時、大に雨ふる、太公望之を稱して洗兵雨と曰ふ、天下を一洗して清明の世に白日を仰ぐは畢竟幾時ならんとなり、

年説は誤謬なり、

春夕旅懷

崔塗

水流花謝兩無情 送盡東風過楚城 蝴蝶夢中家萬里  
杜鵑枝上月三更 故園書動經年到 華髮春惟兩鬢生  
自是不歸歸便得 五湖煙景有誰爭



水流れ花謝して兩つながら情なし、東風を送り盡して楚城を過ぐ、胡蝶の夢中家萬里、杜鵑の枝上月三更、故園の書は動もすれば年を経て到り、華髮の春は惟兩鬢に生ず、自らは是れ歸らず歸らば便ち得ん、五湖の煙月誰あつて争はん、

【略傳】 崔塗字は禮仙、光啓四年の進士、壯歲巴蜀に上り、老大にして隴山に遊び、家を江南に寄す、

【句釋】 春夕旅懷隴山に遊ぶ時の作ならんとの説信に近し、水流花謝兩無情佛語で言へば無情は無常なり、送盡東風前句に花あり、之を承る必ず東風の文字を要す、過楚城隴山は即ち古の楚なり、胡蝶夢中家萬里蝶の夢を見るにはあらず、莊周が夢に胡蝶と爲りし故事あるより此の二字を假りに用ひて句を形容するのみ、萬里の家山を夢むると云ふ意なり、杜鵑枝上月三更樹枝上に杜鵑が不如歸と叫ぶを聞く起て之を見れば正しく夜半にて月明あるのみ、故園書動經年到家は萬里の遠き、動は俗語の「コトニヨルト」に當る、一年二年を経て其の音信を得、華髮春唯兩鬢生華髮は白髮なり、華字を用ひて白字を用ひざるは春字を下に用ふればなり、兩方の鬢

が第一にシラガと爲る、自是不歸歸便得歸らざるも畢竟は自分の意思にて他人の意思にあらず故に自分で歸ると定めなば、歸ることは容易なりとの意、五湖煙景有誰爭歸りて我が自由に遊ぶ處は五湖の煙景なり、五湖は我が土地ゆる、其れはナラヌなぞと他人が争うて言ふことは斷じて出來ずとの意、

【評論】 此の篇、晩唐の宗旨を代表して其の秀潔なるものとす、句句春夕ならざるは無く、語語旅懷ならざるは無し、特に三四の句、妙言外に在り、崔、別に詩あり、五千里外三年の客、十二峯前一望の秋、遂に胡蝶の句に及ばず、兩字重なる崔が作、數に失するものは亦其の得あればなり、

長 陵

唐彦謙

長陵高闕此安劉 附葬纍纍盡列侯 豐上舊居無故里  
沛中原廟對荒丘 耳聞英主提三尺 眼見愚民盜一抔  
千載豎儒騎瘦馬 渭城斜日重回頭  
長陵の高闕此に劉を安んず、附葬纍纍盡く列侯、豐上の舊居故里なく、沛



中の原廟荒丘に對す、耳に聞く英主の三尺を提ぐるを、眼に見る愚民の一  
杯を盜むことを、千載豎儒瘦馬に騎つて、渭城の斜日重ねて頭を回らす。

【句釋】長陵は漢の高祖を葬むる所、渭水の北方、長安を去る三十五里、山の廣さ東西二百二十  
步、高さ十三丈、周り十里八十步、高闕、陵上に廟あり廟門を闕と云ふ、此安劉劉氏の一族を葬  
むる所、高祖、周勃に謂て曰く「劉氏を安んずる者は必ず勃ならん」此の語を用ふ、附葬、景  
盡列侯此の廟の周圍に葬むるものは劉氏に功ある諸侯の墳なり、豊上、舊居無故里高祖の生地は  
豊即ち今日の江蘇省徐州府豐縣なり、然るに豊の民を後、盡く驪邑、今日の陝西省西安府臨潼  
縣に徙せしより、此の方を新豊と稱す、徐州には故里無き所以、沛中原廟對荒丘沛は即ち徐州  
なり、原廟の原は重なり先に廟あり更に重ねて立つるなり、耳聞、英主提三尺、英主は高祖なり、  
白蛇を斬るも三尺の劍、天下を取るも三尺の劍、高祖曰く吾布衣を以て三尺の劍を持って天下を  
取ると、眼見、愚民盜一杯、天子も生きて居る中は犯すと能はざるが死後は愚民にだも及ばざるな  
り、陵上の土、「ツカミ」を盜まるるも知らざるなり、文帝の時、張釋之廷尉、警視總監たり人あり  
蹕を犯す、釋之罰金に當てんと奏す、帝怒つて之を死に致さんと欲す、後に人あり高祖の玉環

を盜む、釋之、棄市せんと欲す、街頭の帝之を族せんと欲す、一族悉釋之、冠を免じ、謝して曰く  
法此の如くならば足りなん、今此を盗んで之を族す、假令へば愚民、長陵一杯の土を取らば陛  
下何を以てか法を加へんや、千載豎儒高祖より千載後の豎儒崔自身が今日騎瘦馬にて此の陵下  
を過ぐ、豎儒とはツマラヌ儒者、自ら稱する語、渭城斜日重回、頭英主の墓前なら下馬して通過  
するが法なり禮なり、其の禮も爲さず、渭城即ち長安の夕陽方に入らんとする時、斷えず頭を  
回らして長陵を望むとなり、高祖昔し酈食其を罵つて曰く豎儒幾んど乃翁が事を敗ると、千年  
前の豎儒は酈食其なり、今日の豎儒は唐彦謙なり、高祖知るあらば、今日の豎儒を如何とする  
や、

【評論】此の篇、正堂堂、當面より攻向し、一步も假借する所なく喝破す、高祖三尺の劍、  
其の利、鋭なりと雖も、斷じて此の詩を斬る能はず、箕張翼舒の陣一甲一戈も容るる能はず、  
盛唐の諸公も此の詩の前には戈を戟さめ刃を柙にせざるべからず、謂つ可し一部の詩史と、

咸 陽

韋 莊

城邊人倚夕陽樓 樓上雲凝萬古愁 山色不知秦苑廢  
水聲空傍漢宮流 李斯不向倉中悟 徐福應無物外游



莫恠楚吟偏斷骨 野煙蹤跡似東周

城邊の人は夕陽の樓に倚る、樓上の雲は萬古の愁を凝らす、山色は知らず  
秦苑の廢するを、水聲は空しく漢宮に傍うて流る、李斯倉中に向つて悟ら  
ずんば、徐福應に物外の游無かるべし、恠む莫れ楚吟偏に骨を斷つことを、  
野煙蹤跡東周に似たり、

【句釋】 咸陽は秦の宮、今長安城の亂後を咏するが目的、秦の咸陽の名を借る、實は長安の  
故宮を詠するなり、城邊咸陽城邊、人は韋莊自ら謂ふ、夕陽樓夕陽にあらざれば憑弔の念強く  
起らざればなり、樓上雲凝萬古愁雲の動かす固結する如き形を凝と云ふ、樓上より第一天上の  
愁雲を見る、山色不知秦苑廢依然として山色は蒼翠なり、秦苑の美なるときと同様なり、知ら  
ば色を改める道理、其の改めざるを見れば知らざるなり、山は終南も東山も皆此の中に在り、  
水聲空傍漢宮流樊川や洛水も依然古の如く漢宮即ち甘泉宮や長樂宮に傍うて混混流る、山も  
水も無情のもの故に故宮の廢荒を愁へず、李斯不向倉中悟秦の李斯は楚の上蔡の人、年少の時  
郡の小吏と爲り、吏舎の廁中の鼠、不潔を食ひ人犬に近づき、數しば之を驚恐するを見る、又

倉に入り倉中の鼠、積粟を食ひ大廡の下に居り、人犬の憂を見ざるを觀る、李斯歎じて曰く人  
の賢不肖、譬へば鼠の如し、自ら處する所に在るのみ、乃ち荀卿に從て帝王の術を學ぶ、若し  
李斯に此の悟が無きときは、徐福も亦悟り無きなりとの意、應無物外游徐福字は君房、始皇よ  
り童男女三千人を托せられ、藥を東海に求めて遂に還らざるなり、李斯が悟は惡なり、徐福の  
物外游は善なり、物外は國外の意、仙境に去る意、唐末朱全忠等が跋扈に堪へず、良臣義士は  
皆山中に遁逃するを云ふ、莫恠楚吟偏斷骨國を憂へて其の吟する事の痛意切なるを云ふ、吟の  
痛苦なること楚の屈原の如きは無し、我も亦屈原が離騷を作り、身を水に投じたる程の痛意あ  
り、人は之を恠しむ莫かれ、野煙蹤跡似東周野火の煙の横はる寂趣を見ても唐の今の世は殆ん  
ど東周に似たり、又秦の滅亡したるも東周に似たり、詩人たる者斷骨せざるを得んや、秦は東  
周を亡ぼし其の周都へ都したる咸陽も亦亡びたり、成王は鎬京に都するも、幽王に至り犬戎の  
拔く所となり、平王乃ち洛邑に移る、是れを東周と爲す、  
【評論】 此の篇、表面秦の亡滅を悲しみ、裏面唐の亡びんとするを慨して作る、雄渾悲壯、筆  
墨淋漓、盛唐の中に雜ふるも亦辨すべからず、劉長卿の感懷より此に至る九首、落句に至り、  
別に新意を設けて前の六句を結びたるものなりと云ふ、



結句

周弼曰く其の説五言に在り、異なる所以のものは皆平安婉順を取る、意盡きて止む、奇健に  
あらずとは此れなり、王真白が末句は稍振作す、宋の嚴羽は結句の格を謂ひ、楊萬里は結句  
の趣を謂ふ、奇健なるものを求むるに尤も多からず、多からざるは作製に難ければなり、高  
山に石を轉ずるが如くと云ふ者、亦奇健の謂ひなり、周論は周論として知れば足る、

過九原飲馬泉

李益

綠楊著水草如煙 舊是胡兒飲馬泉 幾處吹笳明月夜

何人倚劍白雲天 從來凍合關山道 今日分流漢使前

莫遣行人照客鬢 恐驚憔悴入新年

綠楊水に著いて草煙の如し、舊と是れ胡兒の飲馬泉、幾處か笳を吹く明月  
の夜、何人か劍に倚る白雲の天、從來凍合す關山の道、今日分流す漢使の  
前、行人をして客鬢を照さしむる莫れ、恐らくは驚かん憔悴して新年に入

るに、

【略傳】 李益字は君虞、長じて軍に従ふ二十年、籌を運し勝を決すること尤も其の長する所、  
鞍馬の間に在て文を作り詩を賦すと云ふ、七言絶句に至りては有唐三百年其の右に出る者寥寥  
とす、余嘗て李白と王昌齡と李益を以て唐七絶三賢と爲す、

【句釋】 九原は漢の五原郡、今日の山西省忻州より吳喇忒及び鄂爾多斯方面一帯を云ふ、飲馬  
泉胡人此に於て馬に飲かはす處、綠楊著水草如煙柳枝の長さ、草色の美なる知るべし、舊是胡  
兒飲馬泉胡兒の兒は男兒の兒と同じ、胡人を抑下したる語にはあらず、豊州城北に此の飲馬泉  
あるなり、幾處吹笳明月夜鐵笳又は蘆笳、戍樓にて夜警の爲め吹く、其の跡は幾箇處ぞや、何  
人倚劍白雲天何人は前の幾處に對する幾箇處と幾箇人となり、誰も彼もの意に當る、宋玉曰く  
長劍耿耿として天外に倚る、從來は「モトハ」なり、凍合關山道寒地にて氷の解けし事なき關山の  
道が、珍らしや今日分流漢使前氷が融解して東流西流と分れて漢使即ち我の前を流るる、胡と  
漢との講和結了後を云ふ、莫遣行人照客鬢氷結してあれば客鬢を照す憂は無きも融解しては我  
が客鬢を照す憂がある、是の故に照す莫れと云ふ、若し照さるれば、心配が起る、恐驚憔悴入  
新年新年は春なり、春は樂しむべきものなり、然るに憔悴の容を水にて見れば自ら驚き樂んで新



年を迎ふる意無からんとす、此の行人は自身も他人も共に合して云ふ、  
【評論】此の篇、七律の神品として王維の下に在らず、高適岑參亦以て配すべきに足る、三四二句殊に敵あること無し、偉麗中に俊豪の處あり、老杜が「三年笛裏關山の月、萬國兵前草木の風」是れ軒輊すべし、趙嘏が「一千里の色中秋の月、十萬の軍聲半夜の潮」麗と雖も粗豪、到底此の三四の上に出る能はず、人二字あるは小疵とす、

欲到西陵寄王行周

李紳

西陵沙岸回流急 船底黏沙去岸遙 驛吏遞呼催下纜  
棹郎閒立道齊橈 猶瞻伍相青山廟 未見雙童白鶴橋

欲責舟人無次第 自知貪酒過春潮

西陵の沙岸回流急なり、船底沙に黏して岸を去ること遙かなり、驛吏遞に呼んで纜を下せと催す、棹郎閒に立つて橈を齊へよと道ふ、猶ほ瞻る伍相青山の廟、未だ見ず雙童の白鶴橋、舟人の次第なきことを責めんと欲して、自ら知る酒を貪つて春潮を過せしことを、

【句釋】西陵は漢縣、荊州江夏郡、今湖北省黃州府黃岡縣西北、是れ縣としての西陵なり、此の西陵は一地方の名なるべし、沙岸回流急舊注に云ふ西陵渡は蕭山縣の西二十里に在り、錢王陵の吉語にあらざるを以て西興と改む、然らば今の浙江江蘇の間に屬す、船底黏沙去岸遙黏は「ネバル」沙多きを以て水來るときは舟岸に就き、水去るときは舟も亦岸を去る、岸上まで行きしも舟遠きに在つて如何ともする無し、驛吏遞呼催下纜津吏共が相遞に纜を解き帆を卸せと呼び叫ぶ、棹郎は水夫、閒立道齊橈水夫は習熟の功あり聊かも驚かず橈を齊へよと下知す、猶瞻伍相青山廟是れ舟中より後方を瞻る、伍相は伍員字は子胥、楚より吳に奔る、吳之を申の地に封す、吳の宰相と爲るに由て相と云ふ、杭州の青山に其の廟あり、民其の忠義を憐れんで立つる所、未見雙童白鶴橋是れ舟中より前方の景、我が行處は此の橋なり、桓闡、陶弘景に事へて辛勤年あり、一日二青童、白鶴あり空より下りて庭に集まる、弘景軒に臨んで之に接す、童の曰く太上桓のみを命す、是に於て桓天衣を服し、白鶴に駕し天に昇り去、此の橋は蕭山縣より東方三十五里、餘姚より西方二里に在り、欲責舟人無次第此の句は俗語にて言へば船頭等の無責任を詰責せんとするなり、彼等が時刻を守らずして舟が沙に粘する如き失體を爲したるを言ふ、自知貪酒過春潮舟人を責めんと欲して更に考ふ是れ我の誤りでありしとを、我の誤りと



は何ぞ所謂舟中の無聊を慰する爲め酒を飲み過ごし春潮の満ちて發船に都合よき時を忘却したり、故に此の時刻の齟齬を來せしなり、何ぞ舟人の罪ならんやと、遂に責めんと欲して責めざるなり、

【評論】此の篇、専ら舟行なるが故、句句悉く水中の景を叙し、驛吏が叱斥する態、棹郎が沈著の狀、描寫し得て眞に逼る、以て水行詩の範と爲すべし、

洗竹

王貞白

道院竹繁教畧洗 鳴琴酌酒看扶疎 不圖結實來雙鳳  
且要長竿釣巨魚 錦籜裁冠添散逸 玉芽修饌稱清虛

有時記得三天事 自向琅玕節下書

道院竹繁くして略ぼ洗かさしむ、琴を鳴らし酒を酌んで扶疎を看る、圖らざりき實を結んで雙鳳を來さんとは、且要す長竿巨魚を釣らんと、錦籜冠を裁して散逸を添へ、玉芽饌を修して清虛に稱ふ、時あり記得す三天の事、自ら琅玕の節下に向つて書す、

【略傳】王貞白字は有道、信州永豐の人、乾寧二年登第し、後天王の岐に狩するに値ひ邂逅居書を著はす、復祿を干めず、當時大に芳譽を得、性恬和にして易象を明にす、手づから爲る所の詩三百篇及び賦文等を編で雲溪集と爲す、世に傳ふ、卒して家山に葬むる、

【句釋】洗竹洗は変なり密竹林を伐て疎竹林と爲す、洗は「スカス」意なり、道院は王が住する家、質素な家なるが故に道院と言ふ、竹繁教略洗繁は密なり、略は疎なり、鳴琴酌酒看扶疎竹林を童僕に命じて扶疎ならしめ、以て之に對し琴を鼓し酒を飲むなり、不圖結實來雙鳳竹林を設けし意は、實を結ばしめ以て雌雄の鳳凰來らしめんと圖りしにはあらず、黃帝の時、鳳凰が東園の梧桐に集まり、帝の竹實を食ひし事あるを以て其の反意を云ふ、且要長竿釣巨魚我が竹林を設けし意は巨竹を養ひ以て巨魚を釣るに適する竿を得んが爲めなり、錦籜は竹の皮、即ち錦の如き紋を爲せばなり、裁冠添散逸竹の皮を以て冠を製し、之を被り以て閒散幽逸、道人の風彩を添んと云ふ、玉芽は筍なり、修饌稱清虛筍を以て羹にし我が饌を調すれば清淡恬虚の食物たるを云ふ、漢の高祖が布衣たりし時、竹皮冠を製して被りし事あり、有時記得三天事道家にて三天なる貴き天ありと説く、佛教の忉利天、都率天、夜摩天等の類、所謂清微天、禹餘天大赤天是を三天と云ふ、平生道家を慕ふもの今此の洗竹に依て平生の記憶を引起したるなり、



自向琅玕節下書琅玕は竹の異名、三天の事を思ひ出したるが故に竹の節の下に於て詩を書するなり、古代紙の未だ無き時、字を書するに竹を截て火に炙り以て簡に作り之に書す、之を汗書又殺青と云ふ、今竹に關係なき三天の事を言表したるは首句に「道院」の二字あればなり、

【評論】此の篇、一二の句は其の洗を叙し、三四以下竹と我との景情を叙し、七句意表天外より出て、以て八句を活躍せしむ、尋常咏物の造花的なるに比すれば實に生生の勢、玉笋の天を衝かんと欲するが如し、周昉の末句を賞する洵とに我が意を得たり、

惜花

韓偓

皴白離情高處切 膩紅愁態靜中深 眼隨片片沿流去  
恨滿枝枝被雨淋 總得苔遮猶慰意 若教泥汗更傷心

臨堦一盞悲春酒 明日池塘是綠陰

皴白の離情高處に切なり、膩紅の愁態靜中に深し、眼は片片に隨がひ流に沿ひ去る、恨は枝枝に滿ち雨に淋がる、總て苔の遮ることを得ば猶ほ意を慰めん、若し泥をして汚さしめば更に心を傷ましめん、堦に臨んで一盞春

酒を悲しむ、明日池塘是れ綠陰、

【句釋】惜花落花を惜んで作る、韓が朱全忠の爲め惡まれ濮州の司馬に貶せられし時の作、皴白は將に落ちんとする花、皴は音シウ訓「面ノシワ」殘花を人の衰老に譬ふ、解し易く言へば「白ヲ皴ム」なり、白は盛色、皴は衰色、色の衰へたるを形容せるにはあらず、落る時は皴で、開く時は白の意なり、離情高處切花が散つて高處より落るを花心あらば自ら其の情の切なるものあらん、膩紅は紅色の油ざりたる如きを云ふ、愁態靜中深靜なるが故に愁態の特に深きを覺ゆ、眼隨片片沿流去落花が片片皆流水に沿うて去るを特と見る、恨滿枝枝被雨淋片片流るるは枝枝空しくなる所以、雨の淋ぐ色を殺ぐと甚し、恨の移らざる樹枝は一も無し、總得苔遮猶慰意苔蘇上に落ちて留まる花は水に隨て流るとは異なる、聊か我が意を慰さむ、若教泥汗更傷心泥は苔と反對、苔上は淨し、泥中は汚濁、其の泥中の汚濁と爲る花は一層の傷心ならずや、臨堦一盞悲春酒一盞の酒も愉快に飲むにはあらず、傷心を遣らん爲めなるを以て是を悲しむ所以、明日池塘是綠陰風物の變化するを傷む、綠陰亦愛すべきも箇は問題が別なり、今は綠陰と爲るを悲しんで花を惜しむ、

【評論】此の篇、表面花に在りて裏面は朱全忠の爲め時の王室が苦しめらるるを傷む、池塘綠



陰と爲るは朱全忠の天下と爲るなり、花の散ずるは唐室の衰滅を諷するなり、此の意を以て此の詩を讀む更に痛恨なるものあらん、李益の過九原より此に至る四首は結句の奇健なるものと爲す、周弼の意、詩の優劣は次第順なりと素隱云ふ、洵とに當れり、

詠物體

周弼曰く説は五言に在り、唐末に至りて忽ち一體を成す、詠する所の物に拘はらず別に外意を入て描寫の巧を失はず、喜ぶに足るものあり、然れども特に前聯に意を用ふ、頗る密にして後聯は未だ稱ふこと能はず、康熙帝云く孔子曰く之を邇うして父に事へ、之を遠くして君に事へ、多く鳥獸草木の名を識る、夫、父に事へ君に事ふるは忠孝大節なり、鳥獸草木は至微なり、吾夫子並に擧げて之を極言す、然らば則ち詩の道、其の名を稱するや小、其の類を取るや大、即ち一物の情にして忠孝の旨に關す、繼ぎて騷賦より以來、未だ之れ易ふるあらず、此れ昔人詠物の詩、由て作る所なり、  
黄宗義曰く詩人は天地の清氣を萃め、月露風雲花鳥を以て其の性情と爲す、月露風雲花鳥の天地間に在るや俄頃滅没す、唯詩人能く之を散せざらしむ、

崔少府池鷺

雙鷺應憐水滿池 風飄不動頂絲垂 立當青草人先見  
行傍白蓮魚未知 一足獨拳寒雨裏 數聲相叫早秋時

雍陶



林塘得爾須增價 况與詩家物色宜

雙鷺應に憐むべし水の池に満るを、風飄せども動かず頂絲垂る、立つて青草に當れば人先づ見る、行いて白蓮に傍へば魚未だ知らず、一足獨拳す寒雨の裏、數聲相叫ぶ早秋の時、林塘爾を得ば須らく價を増すべし、況んや詩家の物色と宜しきをや、

【句釋】 崔は姓、少府は官名、池鷺は「サギ」一名、雪客、白鳥、春鋤、絲禽なり、雙鷺雌雄の

二、應憐水滿池水の湛湛たる池に雙鷺の游戲する態を見れば甚だ可憐であるとの意、風飄不動頂絲垂風力が如何に強く吹くも身體は動かさず、水中の魚をネラフ爲めなり、頂絲の垂るは鷺の特質なり、立當青草人先見池頭の青草に當つて立てば鷺は白く草は青し、人の眼に停まり易し、行傍白蓮魚未知池中の白蓮に沿て行くときは鷺も蓮も共に同色なる故に魚は鷺の爲め食はれんことを知らず、一足獨拳寒雨裏歩する時は兩足なれども立つて居る時は一足を拳ぐ、是れ亦鷺の特質なり、寒雨の裏殊に幽趣を添ふ、數聲相叫早秋時の爲めに叫ぶやは動物學者と雖も容易に解し難きも、詩人は侶を喚ぶ爲めに相叫ぶと定むるなり、林塘得爾須增價崔が家の林

鷓 鴒

鄭 谷

塘爾がある爲め風趣一段と價を増す、况與詩家物色宜少府は詩人なり、故に詩家の語を用ひて以て鷺の潔白と詩品の潔白と好對照なりと云ふ、今日の語で言へば頗る詩的なりと云ふなり、【評論】 此の篇、後世謝瞿輩の詠物に比すれば未だ全く形骸に屬せず、血肉清鮮なる所あり、『全唐詩話』に陶簡州に在り、憑道明なる者刺を通じ調を乞ふ、曰く員外陶のと舊識ありと、聞者の人道明の言を以て通ず、引見するに及んで知る者にあらず、陶呵して云ふ君と平生に味し、何の日に相識ぞ、道明曰く員外の詩を誦し、員外の徳を仰ぐ、日に詩集中に相見る、何ぞ相生を隔つと云ふや、乃ち立當青草一人先見、行傍白蓮魚未知を吟ず、陶之を聞き欣然之を優遇する舊知の如し、以て此の詩の一時に喧傳せられし事知るべし、亦詩壇の佳話と爲すべし、

暖戲煙蕪錦翼齊 品流應得近山雞 雨昏青草湖邊過  
華落黃陵廟裏啼 游子乍聞征袖濕 佳人纔唱翠眉低  
相呼相喚湘江曲 苦竹叢深春日西  
暖に煙蕪に戯れて錦翼齊し、品流應に山雞に近づくことを得べし、雨昏う



して青草湖邊に過ぎ、華落ちて黃陵廟裏に啼く、游子乍ち聞て征袖濕ひ、佳人纔に唱へて翠眉低る、相呼び相喚ぶ湘江の曲、苦竹叢深く春日西す、

【句釋】 鷓鴣は形、母雞に似て、頭は鶉の如く、性霜露を畏れ、早晚には出ること稀なり、夜栖に木葉を以て身を蔽ふ、雌雄多く相對して啼く、越中殊に多し暖地なればなり、暖燠煙蕪錦翼齊暖日には煙の簇がる平蕪に於て相游戲す、而して其の錦の如き羽翼は整然として參差するもの無し、品流應得近山雞其の部類に屬する同形同種の物を求むれば山雞即ち雉を以て比すべきなり、雨昏青草湖邊過湖北の鄂州府に青草湖あり、江南道中の者は此の湖邊を必ず通過する今鄭が過ぎるとき此の鳥の啼くを聞く、時恰かも雨昏昏たるなり、花落黃陵廟裏啼娥皇と女英二妃を祀る廟を黃陵と云ふ、青草湖を去る數里の地、游子は旅客なり、乍聞征袖濕旅人が此の鳥の啼くを聞き涙征衣を濕ほす所以は、鳥聲が悲哀を感ずるのみならず、場處が場處なればなり、佳人纔唱翠眉低支那古代の歌曲に「鷓鴣詞」と云ふあり、佳人が絃に合せて唱ふるとき、其の佳人の情緒が何とも言へぬ哀愁を表はすなり、翠眉低は佳人の此の詞を唱ふる時の態度を云ふ、相呼相喚湘江曲黃陵廟の在る所は湘江の曲なり、此の二妃は舜を慕うて此に至り死し

たる處なるを以て、今雌雄の鷓鴣が相呼び相喚ぶ、其の物情を満足する態を見れば詩人豈一滴の涙なからんや、苦竹は竹の名詞、白あり紫あり、其の筍の苦味なるを以て名く、叢深春日西竹林の西に夕陽の傾むくも知らずして游戲すとなり、

緋桃

唐彦謙

短牆荒圃四無鄰 烈火緋桃照地春 坐久好風休掩袂  
夜來微雨已沾巾 敢同俗態期青眼 似有微詞動絳脣  
盡日更無鄉井念 此時何必見秦人  
短牆の荒圃四に鄰なし、烈火の緋桃地を照して春なり、坐久しくして好風袂を掩ふことを休む、夜來の微雨已に巾を沾す、敢て俗態の青眼を期する



に同じからん、微詞の絳脣を動すことあるに似たり、盡日更に郷井の念なし、此の時何ぞ必ずしも秦人を見ん、

【句釋】 緋桃は紅色の桃花、短牆荒圃四無鄰桃は美なるも其の在る所、甚だ殺風景とす、牆は短かく、圃は荒涼、四邊には人家なし、烈火緋桃照地春惡地なるに關せず桃花は烈火の如き紅色を以て得意に春を潤色す、坐久好風休掩袂火の如き緋桃を見て好風に對す、好風なるが故に我が袂を飄すに到らざるなり、或人は「坐久しく見る中に好風吹き來れども、あまり見事なるゆゑに風の爲に袂を吹きまくられても掩ふことを休めて見とれたるなり」袂を吹きまくる風は暴風なり、好風にはあらず、此の解其の誤知り易し、素隱和尙は曰く「此の花があまりに見事なるを以て良や久しく坐して愛賞したぞ、しかれば其の好風光が、あらはに見えたぞ、短牆の中に在る花なれば、たとへば美人の袂を掩ふことを休めて、そのままにして面を現はしたる如くぞ」と此の説も曲解なり、袂は人に就く、花の譬へにはあらざるなり、夜來は黄昏や晚來とは異なる、昨夕の事なると知らざるべからず、昨夕の如きは非常に熟覽して微雨已沾巾微雨の巾を沾はす事も知らざりし位なり、昨夕なるが故に已の字大に活躍す、其の熟覽したる證

據には雨の爲め巾を沾したることも知らざりしを以て知れとなり、敢同俗態期青眼晉の阮籍は酒を持ち來る者は青眼に迎へ、酒を持ち來らざる者は白眼を以て之を迎ふ、是れ頗る卑しき事にて俗態と云ふの外無し、此の花は此の如き俗態は無しと云ふ、似有微詞動絳脣楚の宋玉が「好色賦」に曰く大夫登徒子、楚の襄王に侍して宋玉を短つて曰く玉の人と爲り體貌閑麗、口に微詞多し又性色を好み、願くは王、與に後宮に出入せしむると勿れ、此の賦中の微詞は語同じく意同じからず、此の桃花は人を迎へて何事か絳脣を開いて言はんとするに似たりとなり、盡日更無郷井念此の花を今日吟賞して郷井即ち郷里の事は全く念頭に挂からぬとなり、此時何必見秦人武陵桃源の仙境に入て以て秦を避けし人を見ざるとも、此の閬州に在つて此の花を見る、此の外に何の願も無しとの意、

【評論】 此の篇、四無鄰と更無と同字稍や疵なるも大體に於て佳構と謂つ可し、第二句と第八句は題を見ざるも桃なるを知る、其餘の句は桃なるや李なるや題を缺くときは分明ならざる所、寧齋の評して不即不離、傍敲側擊して之を出すと云ふは甚だ明解とす、然れども咏物此の如きは至るものにあらざることと知る可し、



牡丹

羅 鄴

落盡春紅始見花 花時比屋事豪奢 買栽池館恐無地  
看到子孫能幾家 門倚長衢攢繡輓 幄籠輕日護香霞  
歌鐘滿坐爭歡賞 肯信流年鬢有華

春紅を落ち盡して始めて花を見る、花時比屋豪奢を事とす、買つて池館に栽ふんとするも恐らくは地無からんことを、見て子孫に到るは能く幾家ぞ、門は長衢に倚つて繡輓を攢め、幄は輕日を籠めて香霞を護す、歌鐘滿坐争つて歡賞す、肯て信ぜんや流年鬢に華あることを、

【句釋】牡丹は一名鹿韭、鼠姑、木芍藥、又花王の稱あり、唐以來花の富貴なるものと號して上下歡賞す、落盡春紅始見花百卉千花、零落の後、牡丹漸く花開く、即ち春晚夏初なり、花時比屋事豪奢唐の武后、臘日後苑に遊び百花に宣詔して皆開かしむ、唯牡丹獨遲し、遂に洛陽に貶す、洛陽の盛んなる是れが爲めなり、比屋は家々と云ふ意味、買栽池館恐無地豪奢を競ふが故に我は百種あり、我は千種ありなどと稱して遂に栽うるに地無きまでに至る、買んと欲す

るも栽うる地を所有せずと云ふ意にはあらず、石川鴻齋が「地狹隘ニシテ場所ノ無カラシコトヲ思ヒ」と云ふは作者の意にあらず、看到子孫能幾家奢る者久しからず、彼の如き高價なる花を處狭きまで栽る以て互に其の富貴を誇るも子に傳へ亦孫に傳へる者は果して幾家か存するや門倚長衢攢繡輓長衢は洛陽城中を云ふ、此の洛陽城中の第一至便の地位を占め、錦繡の輓即ち貴人の乗る車を日日門前に停め置くなり、幄は「トバリ」籠輕日護香霞風の爲めには破らるる恐れあり、雨の爲めには色損する虞あり、是の故に幄を設けて適宜の溫度にて永く牡丹の香霞を持續せしむ、歌鐘滿坐争歡賞甲家は歌唱し、乙家は鐘鼓し、珍膳佳肴維れ日も足らざる有様なり、肯信流年鬢有華鬢端に白毛を生ずるは久しからざるなり、年華流水、昨日は少年今は白頭、此等の事は肯て全く信せざるもの如しと悲しむなり、

【評論】此の篇、牡丹の名を借りて以て人の豪奢を諷するもの、而して一篇の骨子、豪奢の二字にあり、豪奢なるが故に花を栽るて餘地無く、豪奢なるが故に子孫を保つ能はず、而して繡輓、而して香霞、而して歌鐘、而して遂に直ちに白毛を生ずるを信せざるに至る、全く人を戒しめ、花は名を借るに過ぎず、唐賢詠物の眞理此の如し、後世寫生的詠物とは大に反す、以て法と爲すべし、



牡丹

羅隱

似共東風別有因 絳羅高捲不勝春 若教解語應傾國 任是無情也動人 芍藥與君爲近侍 芙蓉何處避芳塵 可憐韓令功成後 辜負穠華過此身

東風と共に別に因あるに似たり、絳羅高く捲いて春に勝へず、若し語を解せしめば應に國を傾くべし、任ひ是れ無情なるも也人を動かす、芍藥君が與めに近侍と爲り、芙蓉何れの處にか芳塵を避く、憐むべし韓令功成つて後、穠華に辜負して此の身を過ごすを、

【句釋】似共東風別有因百花が東風と因縁あるは尋常なり、然るに牡丹のみは特別に因縁ある如く思はる、絳羅は絳色の羅、花園を護る具、高捲不勝春羅を高く捲き揚げて賞觀する其の情に勝へず、若教解語應傾國解語の花は已に天下國家を亡ぼす其の例多し、若し此の如き美麗なる花が解語のものなりせば必ず一國の帝王も之に惑うて國家を亡ぼすに至らん、任是は「タトヒコレ」と訓む、無情也動人無情ですら能く人の情に勝へざらしむ、蓋し無情は解語に勝る、

何故に勝るや之れが爲め天下國家を亡ぼすに至らざるなり、芍藥は牡丹に類する花、故に牡丹を木芍藥と云ふ、與君牡丹を指して君と云ふ、爲近侍君主に對して直に其の命を奉ずる者を近侍と云ふ、牡丹は君主なり、芍藥は侍臣なり、芙蓉何處避芳塵芙蓉花は稍や敵と爲すに足る、而かも何處に在るか形を見せず、定んで春の芳塵を避けて居るならん、可憐は俗語の可哀相に當る、韓令は韓弘なり、「藝苑雌黃」に曰く韓弘は元和中宣武の節制を罷め、始めて長安に至る、私第に花あり、命じて之を刷り去らしむ、曰く吾豈兒女の輩に倣はんやと、功成後功の成らざる時は賞花の暇無きも、功成りし後は牡丹を見て樂しむも可なり、然るに韓は之を爲さず、故に可憐と云ふ、辜負は「ソムク」孤負に作るを可とす、穠華此の奇麗な華、過此身到當一生涯、牡丹に背きて歡賞の日無し、

【評論】此の篇、句として三四の外擊節すべきもの無し、五六の句に至りては俗の俗なるもの此の如きもの宋人猶之を能くす、豈唐人を待んや、

梅花

吳王醉處十餘里 照野拂衣今正繁 經雨不隨山鳥散 倚風如共路人言 愁憐粉艷飄歌席 靜愛寒香撲酒樽



欲寄所思無好信 爲君惆悵又黃昏

吳王醉ふ處十餘里、野を照し衣を拂つて今正に繁し、雨を經れども山鳥に隨つて散ぜず、風に倚つて路人と共に言ふが如し、愁へて憐む粉艶の歌席に飄ることを、靜に愛す寒香の酒樽を撲つことを、所思を寄せんと欲するに好信なし、君が爲に惆悵すれば又黃昏、

【句釋】梅花と題するも單に梅花にあらず孤山の梅花を咏せしなり、杭州に在る時の作、吳王は夫差なり、醉處十餘里夫差が都の金陵に於て、金陵より一日程の西湖の周圍に梅花を栽て以て盛開の日、此の處に飲燕す、其の梅花の圃廣きこと十有餘里なり、照野は梅の色、拂衣は梅の香、今正繁雜隱が今日其の梅を見る其の時花正に繁きなり、經雨不隨山鳥散一雨を經れば大抵の花は散落するも梅花のみは雨や鳥の羽にて打たるも容易に散せぬなり、倚風如共路人言風の吹くに遇へば肩を動かし路上の人と言はんと欲する風情なり、愁憐我は愁ふ、而して彼を憐む、粉艶は白梅の奇麗なるを言ふ、飄歌席歌舞の席上へ花片が飄散するなり、經雨の句と意味が一貫せず、強て解する者は曰く「かく堅固の花なれど日數が立たば自ら散亂す」と此の如く

解すれば解せざるにはあらず、而かも曲解に近し、詩其のものは一氣が通せざるなり、靜愛寒香撲酒樽梅の香氣が酒樽を撲て來る、靜坐して益す其の愛すべきを覺ゆ、欲寄所思無好信我は今江南に在り、北方の人は今日梅花開くとは夢想もせざるべし、故に一枝を折て其の信を傳へんと欲するも、其の傳ふるの道無きを云ふ、昔し越の使者登つて梅枝を執て梁王に遺る、梁の臣韓子が曰く焉んぞ一枝の梅を以て列國の君に遺る者あらんや、梅花信を寄す此に起る、爲君北方に在る友人を君と云ふ、惆悵又黃昏此の如く思ひ、今日も又黃昏惆悵する所以なり、

【評論】此の篇、其の佳處を言へば、氷肌玉骨等の字を用ひず、但梅花の神を寫す處に在り、其の短處を言へば已に山鳥に隨て散ぜずと言ひ而して第五句粉艶歌席に飄ると言ふ、相矛盾する處に在り、救ふ者は已に雨あり風あり故に飄の字切なりと、何ぞ必ず此の如くならん、風の字は言の字を以て已に其の意を表はす、飄の字にあらずんば風を承けずとは小兒の言なり寧齋曰く精力人に絶すと謂ふ可しと、昭諫知るあらば地下に大笑せんのみ、孟啓の『本事詩』に曰く唐の宰相鄭畋、深く隱を器とす、畋の一女、美にして才あり、常に隱の詩を愛誦して竊かに其の人を慕ふ、一日隱、鄭を訪ふ、女窗隙より之を窺ふ、隱の貌甚だ醜なるを以て遂に其の詩を燒き復誦せず、昏亦成らず、嗚呼昭諫不幸不運亦是れ愁憐すべき人ならずや、雍陶の池



鷺より此に至る六首是れ咏物の體なり、唐人の咏物、此の如く餘韻有つて盡きず、宋元人に至りては字と意と共に盡く、唐賢を以て正宗と爲す所以なり、素隱は曰く雍陶は鷺の字を犯すと、然らば唐彦謙も緋桃の字を犯したり、犯すと雖も自然なり、不自然の犯さざるより却て勝るものと謂ふ可し、

卷の三

五言律

四實

周弼曰く謂ふところは中の四句皆景物にして實なり、開元大曆に此の體多し、華麗典重の間に雍容寛厚の態あり、此れ其の妙なり、稍變じて然して後、虚間に入るに情思を以てす、故に此の體當に衆體の首爲るべし、昧者之を爲す則是堆積窒塞して意味寡なし、總て客觀界の景を實と謂ひ、主觀界の情を虚と謂ふ、即ち杜審言の雲霞以下二十字悉く客觀に屬するもの、周の意、此の四實四虚と體を分つ中で四實を以て賦するが開元大曆間名家の法と爲す所、四虚は此より降りし世の體と爲すもの如し、其の作法は華麗の間に雍容の態を爲す、詩法に精通する者にあらずんば構成し難く、又詩法に未熟練の者が爲す時は所謂堆積窒塞、徒らに字を填むるのみにて流暢ならざるに至ると慨す、元の范德機曰く、雲霞梅柳、是れ早春を説く、六義に於て是れ賦、黄蝶綠蘋、是れ早春の景物、六義に於て是れ興なり、司空曙が、「經廢實



慶寺二の詩、池晴龜出曝、松腹鶴飛廻、兩句景物を言ふ、六義に於て是れ興、古砌碑横草、陰廊畫雜苔、兩句人事を説く、六義に於て是れ賦なり、此の説非なり、蓋し早春を賦するとき、は早春の景を言ふ、廢寺を賦するとき、廢寺の景を言ふ、此れ詩中の四句皆早春未だ嘗て前を以て賦と爲し、後を興と爲さざるなり、龜出、鶴飛、則ち寺に僧なきと知る可し、碑横草、畫雜苔、則ち寺廢すること久し、亦未だ嘗て前を以て興と爲し、後を賦と爲さざるなり、大凡そ律詩、題指す所あらば、其の詩皆賦なり、題指す所無きは皆興なり、周伯弼、此の詩の中聯を以て四實と爲し、曙が詩の中聯を四虚と爲す固に之を疎に失す、是れ四實四虚説に反對したる論なり、此の反對論は獨范ならず、明の李東陽なども反對す、蓋し伯弼の意、名詞に屬するものは實にて、動詞、又形容詞に屬するものを虚と定むるが如し、名詞動詞の區別上より之を言へば、伯弼の説亦成立せざるにあらず、然りと雖も法は正に入て奇に出るを貴ぶ、范説も一法なり、周説も一法なり、未だ遽かに彼此取舍すべからず、互に存して可なり、律法、起二句を破題と爲し、次二句を領聯と爲す、上を承くるを要す、次二句を景聯と爲す、下に轉ずるを要す、末二句を結句と爲す、起承轉合の四法、絶句と何ぞ異ならん、此の起承轉合の法の紊るを得ざることは猶ほ人に四肢五體を完備するが如し、頭は足下にあるべから

す、足は頭上に置くべからず、若し誤つて之を爲さば所謂性性甚だ觀に堪へず、讀者仔細に察すべきなり、

早春游望

杜審言

獨有宦游人、偏驚物候新、雲霞出海曙、梅柳渡江春

淑氣催黃鳥、晴光轉綠蘋、忽聞歌古調、歸思欲沾巾

獨宦游の人あり、偏に驚く物候の新たなるに、雲霞海を出て曙、梅柳江を渡りて春なり、淑氣黃鳥を催し、晴光綠蘋に轉ず、忽ち古調を歌ふを聞いて、歸思巾を沾さんと欲す、

【略傳】杜審言、字は必簡、襄陽の人、進士に擢でらる、隰城の尉と爲る、又、天官侍郎より洛陽の丞に遷り、事に坐して嘉州司戶參軍に貶せらる、武后の時、著作佐郎を授けらる、膳部員外に遷る、神龍の初、張易之に交通するに坐し、峯州に流さる、入て國子監主簿修文館直學士と爲り大學士に卒す、子を聞と云ふ、聞が子則ち杜甫なり、

【句釋】早春游望は杜が晉陵に在つて作る所、本集に「和晉陵丞早春游望」と作る、或は云ふ







トホルなり、對珠林寺中の閒林を云ふ、摩尼珠を以て林と爲す、『阿彌陀經』の語を用ふ、雁塔は釋迦佛在世に一比丘あり、羣雁の飛ぶを見て乃ち曰く我が食に充つ可しと、雁即ち地に墮つ、佛の曰く此れ雁王なり、食ふべからず、乃ち雁塔を立つ、塔は譯して高顯と曰ふ、徳を表し、人の仰いで以て瞻るべきもの、風霜古塔の時代古きを云ふ、龍池は別に故事なきも龍王は佛說法の席へは必ず連なる故、特に雁の字に對して用ふ、歲月深此れも時代古きを云ふ、池なるが故に深の字を用ふ、實は歲月久しきなり、紺園園林の樹、紺色なるが故、紺園は一種の名詞として寺に多く用ふ、他に用ひざるにもあらず、澄夕霽夕日雨後の霽景、澄清甚だし、碧殿は碧色の佛殿、下秋陰は秋陰を碧殿に下すと素隱は解するが然らず、秋日の昏陰ならんとする景色が先づ碧殿より其の氣分を知らるとなり、秋の陰氣が山中に滿つと云ふ鴻齋説も可ならず、歸路煙霞晚夕日歸路に就かんと、煙霞も亦晚色を表す、山蟬處處吟字の如く晚蟬が曄曄と啼く、素隱曰く煙霞は女色に比し、山蟬は小人の佞を構ふるに比す、豈作者の意ならん、但字の如く解して可なり、

【評論】此の篇、紀曉嵐の評に氣味自ら厚し、故に華にして靡ならず、方虛谷曰く、唐の律詩、初盛、少しく梁陳を變ず、而して富麗の中稍や勁健を加ふ、此の篇の如き者は是れなり、余をし

て評せしめば、單に寺を咏せしのみ、實地も珠林も共に徒勞の觀あり、寶珠の二字、意二句に盡き、下の六句と沒交渉なり、七句は秋の景色にあらず、全く春を咏するものの如し、方紀の二家、精讀せずして稱す、余が言を知るあらば、定んで首肯すべきなり、

晚至華陰

皇甫曾

臘盡促歸心 行人及華陰 雲霞僊掌出 松柏古祠深

野渡氷生岸 寒川燒隔林 溫泉看漸近 宮樹晚沈沈

臘盡きて歸心を促がす、行人華陰に及ぶ、雲霞仙掌より出で、松柏古祠深

し、野渡氷岸に生じ、寒川燒て林を隔つ、溫泉看て漸く近し、宮樹晚に沈

沈、

【略傳】皇甫曾字は孝常、潤州丹陽の人、天寶中兄の冉と進士に登る、侍御史監察を歴、事に坐して貶せられて舒州司長陽翟の令に徙る、兄と名を齊うす、當時張氏の景陽、孟陽に比すと云ふ、

【句釋】華陰は縣名、今の陝西省同州府なり、臘盡促歸心將に正月に逼らんとして我の歸心を



促がすこと切、舒州に貶せられ赦に遇て歸るなり、行人は皇自身、行は歸なり、及華陰今日は華陰縣まで來り此に詩を作る、華は去聲、平聲にあらず、雲霞仙掌出此の華陰縣に五嶽の一人の華山あり、山の高五千仞、首峯に五崖あり、下より之を望めば仙掌の形の如し、乃ち此の仙掌より出る所の雲霞を望む、松柏古祠深華山に在る神祠は天子自ら祭る所のもの、其の古祠を望まんとするに、松柏は森森として茂盛す、千秋萬古鬱然たるを云ふ、野渡氷生岸尚ほ是れ寒天なり、野渡の岸には氷が張る、寒川燒隔林寒塘に草を燒くものは林を隔てて看る、溫泉看漸近驪山の溫泉宮が漸く近く看らるるに至る、宮樹晚沈沈溫泉宮畔の林樹、早已に沈沈たるを望むに至れり、

【評論】此の篇、歸人が心の忙がはしきと華陰の景色の陰深たるとを寫し出して、全く遺憾無し、兄の冉「歸渡洛水」の五律あり、暝色赴春愁、歸人南渡頭、渚煙空翠合、灘月碎光流、澧浦無芳草、滄波有釣舟、誰知放歌客、此意正悠悠、以て此の詩と伯仲すべきなり、

經廢寶慶寺

司空曙

黃葉前朝寺 無僧寒殿開 池晴龜出曝 松暝鶴飛回  
古砌碑橫草 陰廊畫雜苔 禪宮亦消歇 塵世轉堪哀

黃葉前朝の寺、僧なくして寒殿開く、池晴れて龜出でて曝し、松暝うして鶴飛び回る、古砌碑草に横はり、陰廊畫苔に雜る、禪宮亦消歇、塵世轉た哀むに堪へたり、

【句釋】經は經過なり、廢は廢頽なり、寶慶寺は則天武后の建立せし寺、革命は總て前朝の事を滅却するを目的とす、寺亦然り、黃葉前朝寺玄宗の前、睿宗、中宗、高宗、則天の四朝あり、是れを前朝と云ふ、黃葉寺中に滿ち荒涼たる狀、無僧寒殿開佛殿の門扉は開きしままにて之を閉ぢる僧は住せざるなり、池晴龜出曝池水は尚ほ清澄にして、龜が池石に依り甲を日に曝らす、松暝鶴飛回松は翠色鬱鬱たる故に暝くして其の頂上はと見れば鶴が飛び回るのみ、古砌碑橫草古砌僧の洒掃する無し、草色のみ青青、其の間に斷碑が横はるを見る、陰廊畫雜苔寺廊の壁間に種種の畫がある、其畫面は僧の洒掃する者なき故に苔が上るに一任す、禪宮は「テラ」亦消歇テラは方外なり世外なり、尋常人家の如きものにあらざるも亦消滅する此の如し、塵世轉堪哀寺以外の浮世の事は轉即ち「イヨイヨ」哀むべきなり、常住不滅の物は曾て無し、

【評論】此の篇、廢寺の狀態を描きて正面裏面極めて明白なり、無僧の二字、廢の廢たる所以、皆此れより出づ、前朝は唐以前即ち陳なり隋なりと云ふ説も立つ、是れ廣義の前朝にて、一天



子を一朝とする事は是れ狹義の前朝なり、

次北固山下

王 灣

客路青山外 行舟綠水前 潮平兩岸闊 風正一帆懸  
海日生殘夜 江春入舊年 鄉書何處達 歸雁洛陽邊  
客路青山の外、行舟綠水の前、潮平らかにして兩岸闊く、風正しうして一  
帆懸る、海日殘夜に生じ、江春舊年に入る、郷書何れの處にか達せん、歸  
雁洛陽の邊

【略傳】 王灣は先天の進士、開元の初、滎陽の主簿と爲り、馬懷素、羣籍を校正せしめんと欲す、灣其の選中に在り、後、洛陽尉と爲る、

【句釋】 次は「ヤドル」再宿なり、北固山は江西省潤州の北一里に在り、迴嶺の下、長江に臨んで、山勢北來、險固なり、客路青山外我が客と爲て赴く處は北固の青山の外なり、行舟綠水前今我が身の客と爲て置く處は長江の舟中なり、此の二句を『河岳英靈集』には南國多新意、東行伺早天に作る、恐くは初南國云云と作り、後、客路の句に改ためしものならん、潮平兩

岸闊是れ滿潮なるを云ふ、風正一帆懸是れ順風なるを云ふ、海日生殘夜は日の出と夜の曉ける同時なるを云ふ、江春入舊年殘曠已に新年なるを云ふ、海日は遮ざるものなければなり、江春は南方氣暖たかきが故なり、郷書何處達我が故郷に信を寄せんと欲するも托するに人なきを云ふ、歸雁洛陽邊雁は北方洛陽の天に向つて歸る、我が無限の羨意は此に在り、

【評論】 此の篇、盛唐の風格、高華雄亮、良とに神來の作なり、胡應麟曰く海日生殘夜、江春入舊年、景物を形容する千古に妙絶なり、沈歸愚曰く海日の句、本是れ常意一たび鍾鍊を経て便ち奇絶を成す、少陵の無風雲出塞、不夜月臨關、と一種の筆墨なり、此の十字張燕公、進士堂に手書して以て楷式を示す、歸愚又曰く潮平兩岸失を正とす、兩岸を見ざるを謂ふ、別本關に作る少味なり、沈說甚た可に似たり、然れども流行本、關に作るもの多し、『別裁』のみ失と爲すなり、『河岳英靈集』の、南國の十字は承句に應せず、客路云云の句に及ばざるなり、

岳陽晚景

張 均

晚景寒鴉集 秋風旅雁歸 水光浮日去 霞彩映江飛  
洲白蘆華吐 園紅柿葉稀 長沙卑暑地 九月未成衣



晚景寒鴉集まり、秋風旅雁歸る、水光日を浮べて去り、霞彩江に映じて飛ぶ、洲白くして蘆華吐き、園紅にして柿葉稀なり、長沙卑暑の地、九月未だ衣を成さず、

【略傳】張均丞相燕公張説が子なり、太子通事舍人より主爵郎中書舍人に累遷し、燕國公を襲兵部侍郎に累遷し、事に坐して蘇饒二州に貶せらる、復、兵部侍郎と爲る、卒して太子少傅と贈す、

【句釋】岳陽は湖南の岳陽郡なり、地は長沙に屬す、晚景寒鴉集秋日と冬日とは鴉に寒字を付す、「寒キ鴉」なり「寒鴉」と云ふ名詞にあらず、夕暮各の宿樹に集まるなり、秋風旅雁歸「旅雁」なり「旅雁」と云ふ名詞にあらず、天物各の其の歸處あり、我は獨、歸處を得ず、以て之を悲しむ、水光浮日去低き處の水光は高き處の日を浮べて流れ去る、霞彩映江飛高き處の霞彩は低き處の江に映じて飛ぶ、洲白蘆華吐洲は白きものにあらず而かも白きは蘆華が白きを吐けばなり、水中の景、園紅柿葉稀園は紅なるものにあらず、而かも紅なるは秋樹が悉く紅なればなり、此の中柿葉は稀少即ち殘餘を留む、長沙卑暑地卑は「イヤシ」何となく暖た

かき地なり、西、湘江より東榮に至る萬里、故に長沙と曰ふ、九月未成衣「毛詩」の國風に九月授衣とあり、涼衣を脱ぎ綿服を著ける用意は未だ成さず、授衣は旅行中殊に感多きものなり、【評論】此の篇、對を以て起り、層層法あり、古人之を交股格と云ふ、股は人の「モモ」右の股と左の股と互に交へるが如き法なれば名く、洲白の第五句、水光の第三句を承け、園紅の第六句、霞彩の第四句を承く、三四五六、交股にして、一二七八、初破り、後收む、宋の九僧が學ぶ五律多く此の交股法を取る、後生精讀せざるべからず、

晚發五溪

岑參

客厭巴南地 鄉鄰劍北天 江村片雨外 野寺夕陽邊

芋葉藏山徑 蘆華間渚田 舟行未可住 乘月且須牽

客は厭ふ巴南の地、郷は鄰る劍北の天、江村片雨の外、野寺夕陽の邊、芋葉山徑を藏し、蘆華渚田に間はる、舟行未だ住まるべからず、月に乘じて且須らく牽くべし、

【句釋】晚發五溪舟にて五溪を晚日に出發する、五溪は今日湖南省辰州府に在り、漢の「馬援



傳に劉尚武陵五溪の蠻夷を撃て深く入り軍没す、援因て復行を請ふ、注に武陵に五溪あり、曰く雄溪、曰く楠溪、曰く酉溪、曰く瀟溪、曰く辰溪、土俗雄を熊に作り楠を朗に作り、瀟を武に作る、今に在つて即ち辰州界と爲す、水脈は洞庭湖より出るものなり、客厭作者自ら客と云ふ、巴南此地の地は右の巴國、楚曾て巴を滅す、巴の子、五人流れて五溪に入り、以て一溪の長と爲る、中巴と巴西と巴東之を巴南の三巴と云ふ、五溪は即ち巴南なり、我は此の巴南に厭く、郷鄰劍北天唐代國を十道に分つ、河北、河東、關内、隴右、河南、江南、淮南、山南、劍南、嶺南、なり、此の劍南道の以北の郷鄰は五溪なり、江村片雨外舟中より見れば一方の江村は一片過雨の外に明らかなり、野寺夕陽邊一方の野寺を見れば夕陽の寺林に挂るあり、芋葉藏山徑峽中の景狀を言ふ、イモの葉茂盛にして山徑を見る能はず、蘆花間渚田渚邊に在る田なるが故に自然と蘆花が間を侵して開く、舟行未可住素隱は解して曰く舟人どもが云ふ、今は潮が退いて水が浅き程に舟が沙に印すべきぞ暫らく安らいで潮の満つるを待つべしと、岑はこれを聞いて我は片時も路を急ぐぞ、若し左様なことならば、乗月且須牽今夜は月明なり、宜しく舟を牽くべし、

【評論】此の篇、嘉州が安西の幕府を辭し長安に歸る舟中の作、起句對を以て製し、第三、片雨

外と第七未可住と仄三字を二箇處に用ひ、語渾成なるが故毫も嫌ふべきなし、江村片雨外、野寺夕陽邊、嚴維の柳塘春水漫、花塢夕陽遲には及ばざるも皇甫冉の岸明殘雪在、潮滿夕陽多には勝るべし、

仲夏江陰官舍寄裴明府

李嘉祐

萬室邊江次 孤城對海安 朝霞晴作雨 濕氣晚生寒

苔色侵衣桁 潮痕上井欄 題詩招茂宰 思爾欲辭官

萬室江に邊して次し、孤城海に對して安し、朝霞晴れて雨を作し、濕氣晚に寒を生ず、苔色衣桁を侵し、潮痕井欄に上る、詩を題して茂宰を招く、思ふ爾が官を辭せんと欲するを、

【句釋】仲夏は支那曆の五月なり、四、五、六を三夏と云ふ、江陰は今日の江蘇省常州府江陰縣なり、唐代江南道常州、吳の季札の封せられ延陵の故地即ち是れなり、官舍日本の縣廳なり、裴は姓、明府は縣令の敬稱語、法に嚴明なるを謂ふ、萬室は萬家なり、江陰は我が邦横濱の如き處、邊江次江に邊うて次第して在る意味、官舍も亦此に在り、孤城は官舍を云ふ、對海安東



海に面して安全なりとの意、朝霞晴作雨古語に朝霞門を出でず、朝に霞が多き時は、其の日必ず雨なりと、濕氣晩生寒水邊なるが故に常に濕氣勝なり、晩來寒を生ずる早き所以、苔色侵衣桁字音「カウ」字訓「ケタ」平仄兩用にして漾韻の時「衣架」なり、苔は「カビ」と見よ、衣桁にカビが侵略するなり、潮痕上井欄地が卑くければ潮が時ありて井戸の欄干まで上るに至る、題詩招茂宰茂宰は明府と同じ、茂は密、宰は令、知事にも郡長にも用ふべし、招は留の意に見よ、殷勤に留任を勸告するなり、思爾欲辭官表は李に向つて辭職の意あるを告ぐ、故に李は國家の爲め身を勞して官を辭する莫かれと云ふ、

【評論】此の篇、對法を以て起り、一より六に至る、悉く江陰を離れず、水を離れず、七八の二句以て本題に歸宿す、語語儉氣なく正宗と謂つ可し、

山行

殷遙

寂歷青山曉 山行趣不稀 野花成子落 江燕引雛飛  
暗草薰苔徑 晴陽拂石磯 俗人猶語此 余亦轉忘歸  
寂歷たり青山の曉、山行趣き稀ならず、野花子を成して落ち、江燕雛を引

ゐて飛ぶ、暗草苔徑に薰じ、晴陽石磯を拂ふ、俗人だも猶ほ此を語る、余亦轉た歸るを忘る、

【略傳】殷遙は潤州句容の人、天寶間、忠王府倉曹參軍に終ふ、「才子傳」に曰く丹陽の人、天寶間、王維と交を結んで同じく禪寂を慕ふ、志趣高疎にして雲岫の思多し、而して家貧に苦しむ、死して葬むる能はず、一女あり纒かに十歳、日に親に哀號す、愛憐する者贈贈して骨を石樓山中に埋む、詩に工、詞彩不羣、而して警句多し、嗚呼薄倖の詩人なる哉、

【句釋】山行山中に游渉して作る、寂歷は寂寞と同義、サミシキなり、青山曉曉天なる故、未だ一人も行かず、山行趣不稀山中を踏破して見ると趣味は少なからず、野華成子落靜中に動を見る、江燕引雛飛動中に靜を見る、暗草薰苔徑何と稱する草かは知らず故に暗と云ふ、草の香氣が苔徑に薰發する、晴陽拂石磯楊は高く秀づ、晴の字を以て暗に對す、水邊の石磯に枝が風に依り頻りに拂ふ、俗人猶語此詩趣も畫趣も解せざる者を俗人と云ふ、而かも俗人猶ほ此の山中の趣味を語る、余亦轉忘歸詩を解する余に至りては歸るを忘れて山中を徜徉するは怪しむに足らざるべしとなり、

【評論】此の篇趣不稀の三字より以下、非情の華、有情の燕、而して暗草、而して晴陽、山中



の寂味、幽味、總て此の中に在り、蕭散閑淡の作とす、

送陸明府之吁咍

崔峒

陶令之官去 離愁慘別魂 白煙連海戍 紅葉近淮村  
遠浪搖山郭 平蕪到縣門 政成堪吏隱 免負府公恩  
陶令官に之き去る、離愁別魂を慘ましむ、白煙海戍に連なり、紅葉淮村に  
近し、遠浪山郭を搖し、平蕪縣門に到る、政成つて吏隱するに堪へたり、  
府公の恩に負くことを免かる、

【略傳】

崔峒は進士に登り、拾遺集賢學士と爲る、終州の刺史と爲り、元武の令に終ふ、

【句釋】

送陸明府之吁咍 吁咍音イ、縣名なり、安徽省泗州とす、陶令之官去 晉の陶淵明が  
彭澤令と爲て之くが如くなり、以て陸明府の高人なるを表はす、離愁慘別魂 離別に當りて我が  
心魂自ら愁へ且慘むなり、白煙連海戍 海邊を警備する兵戍より時に白煙の連なるを見る、紅  
葉近淮村 淮村に近づくに従つて紅葉が多しとなり、遠浪搖山郭 黃海の方に見ゆる浪なれば遠と  
云ふ、山郭を搖がすかと疑ふ、浪の大なるを云ふ、平蕪到縣門 吁咍は地形上、海には遠し、縣に

洪澤湖の大なるあるも海とは稱し難し、平原一路縣門まで通するを云ふ、政成堪吏隱能く政治  
を視、而かも官俗の味無く、吏と爲つても猶ほ隱者の高潔なる志を行なふべしとなり、免負  
府公恩 府公とせられたる天子の恩に負くを免かるの意、所謂良二千石の職を全うせよと云ふな  
り、

【評論】 此の篇、三四五六、道中の景を叙し、起二句、離恨を説き、結二句、友の爲め訓戒す、  
是れ歸題の格なり、起句、對せざる所、稍や正法を紊すの端緒を開く、惜むべきなり、

溪南書齋

楊發

茅屋住來久 山深人閉門 草生垂井口 花落擁籬根  
入院將雛鳥 攀蘿抱子猿 曾逢異人説 風景似桃源  
茅屋住し來ること久し、山深くして人門を閉づ、草生じて井口に垂れ、花  
落ちて籬根を擁す、院に入る雛を將る鳥、蘿を攀づ子を抱く猿、曾て異  
人の説に逢ふ、風景桃源に似たりと、

【略傳】

楊發字は至之、楊收が兄なり、進士に登り、拔萃せられ左司郎中に至る、又都官郎中



と爲る、蘇州刺史、福建觀察使と爲り婺州刺史に貶せられて卒す、

【句釋】 溪南は一本南溪に作る、季昌曰く戎州南溪郡に南溪縣あり、又簡州に南溪あり、壽昌寺の側に在り、寺側に小桃源あり、要するに大問題にはあらず、書齋は楊が讀書堂なり、茅屋住來久我も亦吾廬を愛すの意なり、山深人閉門人は主人なり、住の仄に人の平を以て承く、草生垂井口井戸の邊は草の生ずるに任す、掃除せざる事知るべし、花落擁籬根籬牆の邊は落花狼藉、而かも掃はざるなり、入院將雛鳥院は書院、齋の外別に院なるものあるにあらず、攀蘿抱子猿我が齋前の崖樹の蘿に攀ちて游戲する猿は鳥と同じく其の子を伴なうて居る、曾逢異人説異人は漁人なり、逢は聞なり、風景似桃源此の地も武陵桃源の仙境と異ならずとなり、

【評論】 此の篇、題目は書齋にして書齋中の事は全く叙せず、但書齋外の寂趣を叙す、三四は非情、五六は有情、有情も非情も皆其の所を得て、各の自然を養ふ意味を表はす、詩格は高からざるも詩趣は甚だ勝る、

泊楊子岸

祖詠

纔入維楊郡 鄉關北路遙 林藏初霽雨 風退欲歸潮  
江火明沙岸 雲帆礙浦橋 客衣今日薄 寒氣近來饒

纔に維楊郡に入れば、鄉關北路遙かなり、林は初めて霽るる雨を藏し、風は歸らんと欲する潮を退く、江火沙岸に明かに、雲帆浦橋に礙へらる、客衣今日薄し、寒氣近來饒し、

【句釋】 泊は舟泊なり、楊子は即ち楊子江、支那の南方一帯を劃する大江、纔は初の意、入維楊郡今日江蘇省揚州府江都縣治即ち古の維楊郡なり、鄉關北路遙洛陽が鄉關なれば維楊郡よりは北方千里を隔つ、林藏初霽雨是れ維楊郡にて見る所の景、林外雨初めて霽たれども林は尙ほ濕うてあることを形容す、風退欲歸潮水中の見る所は如何、潮か退かんとすれば、又風が暴らして再び岸を打つて來る、江火明沙岸是れ夜に入りての景、漁人等が魚を捕る爲めの火が點點沙岸に明かなり、雲帆礙浦橋雲の如く大なる帆を揚げて來たる舟が浦橋の爲め礙へられ通過する能はず、依て帆を下して噪ぐ能を云ふ、客衣今日薄未だ我は單衣のままにて居るが、寒氣近來饒舟泊して其の寒氣の饒きに驚きしなり、饒は多と同義の字とす、

【評論】 此の篇、舟泊の情景、十分に表はれず、「才子傳」に祖詠を評して剪刻省靜にして、用思尤も苦しめり、氣は高からずと雖も、調頗る俗を凌ぐ、稱して才子と稱するに足る、此の詩



第三句江上の景なるに第四句は江中の景、而して五六共に水中の景、剪刻省靜は他の詩に在て然り、此の詩之を缺く、

新秋寄樂天

劉禹錫

月露發光彩 此時方見秋 夜涼金氣應 天靜火星流  
蟲響偏依井 螢飛直過樓 相知盡白首 清景復追游  
月露光彩を發す、此の時方に秋を見る、夜涼うして金氣應じ、天靜にして  
火星流る、蟲響いて偏に井に依り、螢飛んで直ちに樓を過ぐ、相知盡な白  
首、清景復追游せんや、

【句釋】新秋は七月、樂天は白樂天なり、月露發光彩素月も白露も天地相應じて光彩を發す、此時方見秋別様の光彩を發せしより方に是れ秋なりと氣が付きたるなり、發の仄を承るに方の平を以てす、夜涼金氣應火星木金土の五行を四時に配當すれば秋は金に應ず、金の氣たるや涼なり、冷なり、天靜火星流『毛詩』に七月流火とあり、六月は火星が午の方の離火の位に當る七月は午の位を過ぎ西に下る、蟲響偏依井井邊の草根に蟲鳴を聞く、螢飛直過樓樓頭を掠めて

過ぎるものは螢火なり、蟲は鳴處に靜なり故に偏、螢は樓頭を過ぐ故に動なり直なり、相知は知友なり舊友なり、盡は皆なり、白首知友も我も共に白首、秋は感じ易し、故に非常に白首を傷む、而かも傷むとは言はず、清景復追游君も僕も老たり、此の新秋に逢ふも同賞同游する機會を得ずとなり、樂天は謫せられて杭州に在り、禹錫は謫せられて朗州に在ればなり、  
【評論】此の篇、前六句は秋を叙し、七八二句寄示する所以の情を叙す、詩法分明なり、『淮南子』に「葉落而天下知秋」と、此の葉落を言はずして月露を言ふ、作者の工夫此に在り、禹錫は眞に詩豪の名に背かざるなり、

秋日送客至潛水驛

劉禹錫

候吏立沙際 田家連竹溪 楓林社日鼓 茅屋午時雞  
雀噪晚禾地 蝶飛秋草畦 驛樓宮樹近 疲馬再三嘶  
候吏沙際に立ち、田家竹溪に連る、楓林社日の鼓、茅屋午時の雞、雀は噪ぐ  
晚禾の地、蝶は飛ぶ秋草の畦、驛樓宮樹近し、疲馬再三嘶く、  
【句釋】潛水驛は浙江省杭州に在り、吳興と鄰接の地、客恐くは吳興へ赴くならん、候吏立沙



際上官の赴任を迎へる爲め驛亭長は部下の小吏をして沙際に立たしめ以て上官の來るを候す  
田家連竹溪潛水驛は一寒驛に過ぎざるのみ、百姓家が竹溪に連なる以て想像すべし、楓林社日  
鼓春分と秋分の二季に土地神を祭りて以て農事を祈る是れを社日と云ふ、我邦の初午の祭禮の  
如きもの、乃ち今秋社の鼓の音を聞く、茅屋午時雞喔喔の雞聲は正に是れ午時に當る、雀噪晚禾  
地稻田に雀聲の噪がしきは正に是れ豊年、蝶飛秋草畦畦に蝶の飛ぶは正に是れ野菜秀づ、驛樓  
宮樹近吳興は古の吳都、故に吳都の樹を宮樹と云ふ、潛水驛樓は已に吳都に近きなり、疲馬再  
三嘶馬も長途に疲勞したらん、而かも吳都に近づきたるを喜ぶもの如し、  
【評論】此の篇、潛水驛の状態を叙して其の眞を見る如し、余最も其の詩法の嚴に服す、立の  
仄に連の平を以て承け、晚の仄に秋の平を以て承け、音調を諧せしむ、蓋し雞、雀、蝶、馬等  
の連續するは稍やウルサシ、動物は一聯にて止むを可とせんか、

得日觀東房

李質

曾入桃源路 桃源信少雙 洞霞飄素練 壁蘚畫陰窗  
古木疑撐月 危峰欲墮江 自吟空向寂 誰與倒秋釭

曾て桃源の路に入れば、桃源信に雙び少し、洞霞素練を飄し、壁蘚陰窓に  
畫く、古木月を撐ふかと疑ひ、危峰江に墮ちんと欲す、自吟じて空しく寂  
に向はんとす、誰と與にか秋釭を倒さん、

【略傳】李質字は公幹、襄陽の人、擧に應じて成る無し、親有り衡湘に在す、往て謁せんとなす、  
流に沂て湓城の豫章に至る、軍に逐れ舟を捨て武寧よりして返る、會ま黃巢の寇、其の宰を殺す、  
蒼黃前んで去る、得日觀に宿す、酒數罇あり甚だ美、遂に一壺を携へ樓に上り之を酌む、因て  
詩を吟ず、東房の詩是れなり、後、登第して豫章に廉察たり、

【句釋】得日觀は道士の所住、觀は釋氏の寺と言ふが如し、曾入桃源路今自ら得日觀に入るは  
昔漁父が桃源に入りしが如し、比喻を以て言ふ、桃源信少雙得日觀の佳境天下無雙なり、洞霞  
飄素練得日觀洞の霞色は素き練を飄へすが如く、壁蘚畫陰窗得日觀壁の蘚態は恰かも畫紋の如  
く陰窓に描き出す、古木疑撐月古木は即ち喬木、天に冲して宛かも月を撐へる如し、危峯欲墮  
江江に臨んで矗立する危峯は今にも江中に墮んかと思はるる状なり、自吟空向寂自吟は和する  
者なく、知らず日の寂寞に向はんとするを、誰與倒秋釭同元來「カリモ」と稱して「アブ



ラツギ」なり、今酒盃に代用す、酒の相手は誰も居らずと獨酌を嘲けるなり、  
【評論】此の篇、動もすれば危険に墮する韻を以て之を出すに易易掌を翻すが如し、一句の妥當を缺くものなし、

北固晚眺

竇常

水國芒種後 梅天風雨涼 露蠶開晚簇 江燕語危檣  
山址北來固 潮頭西去長 年年此登眺 人事幾銷亡  
水國芒種の後、梅天風雨涼し、露蠶晚簇を開き、江燕危檣に語る、山址北來固く、潮頭西去長し、年年此に登眺す、人事幾ばくか銷亡す、

【句釋】北固山は江西省京口に在り、晚眺晚日に眺望するなり、水國江西、江蘇、浙江等の南方の國は總て水國と云ふ、海に近きを以てなり、芒種は五月の節を云ふ、芒は稻麥のノ、梅天風雨涼梅天は五月炎ならざるべからず、而かも涼し、水國なるを以てなり、露蠶は蠶を育するに屋外に置いて爲す故に露と云ふ、開晚簇蠶の箔を簇と云ふ、所謂五眠後、上簇して之を屋外に乾す其の色雪の如し、江燕語危檣危檣の方に目を移せば江燕が喃喃と舊を語るもの如し、山址

●●●●●北來固此の山の形は勢ひ北方より南を襲ふが如く以て長江に臨む、潮頭西去長長江の潮は蜀の方に向つて流る、●●●●●年年此登眺資は水部員外郎より閩、夔、江、撫、四州の刺史に連除せられ、此の地は自分の管轄下なるが爲め屢ば此の山に登るの機會ありしなり、●●●●●人事幾銷亡安祿山の亂後種種と景狀が變化したるを云ふ、

【評論】此の篇、晚眺に因て感慨を寓し、景あり情あり一唱三嘆すべし、

送可久歸越中

賈島

石頭城下泊 北固暝鐘初 汀鷺衝潮起 船窗過月虛  
吳山侵越衆 隋柳入唐疎 日欲供調膳 辟來何府書  
石頭城下に泊す、北固暝鐘の初、汀鷺潮を衝いて起ち、船窗月を過して虚し、吳山越を侵して衆く、隋柳唐に入て疎なり、日に調膳を供せんと欲す、辟し來るは何れの府の書ぞ、

【句釋】送可久朱慶餘字是可久、字を以て行はる、閩中の人、越中も即ち閩、今日の浙江省紹興府山陰縣なり、石頭城下泊歸らんとして此に泊す、江蘇の江寧府石城城門なり、吳の孫權築く所北固



は山鄰國の江西に屬す、今日は江蘇、江西、二國なるも唐代は一なり、暝鐘初北固山の清涼寺より出る鐘聲は早已に夕陽に逼る、汀鷺衝潮起舟中の所見、船窗過月虛月の船窗に有る間は興もあらん、月落過ちし後は興も虚しからんとなり、吳山侵越衆江南は吳、江北は越、吳國の山は越地を侵す衆きなり、隋柳入唐疎此の長江沿岸は隋の煬帝が植し柳一千三百里の長きに渡る、今日に至りては蕭疎にして又煬帝の如き贅澤を爲す天子なしとの意を含む、日欲供調膳可久が歸國は老親に孝養するが本意なり、即ち日日調膳を老親に供せんと欲す、辟來何府書孝子の名天聽に達して必ず辟し出さるる事あらん、蓋し宮内府なるか文部省なるか、其の辟さるる役所は何であるか判らずと云ふに在り、

【評論】 此の篇、起句より六句に至る悉く道中の事を叙し、七八其の志を叙す、浪仙長江集中誦すべきものの中なり、吳越隋唐の四國を筆下に翻弄す、島佛の詩如來たる所以此に在り、

新安江行

章八元

江源南出永 野飯暫維梢 古戍懸魚網 空林露鳥巢  
雪晴山脊現 沙淺浪痕交 自笑無媒者 逢人作解嘲

江源南より出でて永し、野飯暫く梢を維ぐ、古戍魚網を懸け、空林鳥巢を露はず、雪晴れて山脊現はれ、沙淺くして浪痕交はる、自から笑ふ無媒の者、人に逢うて解嘲を作ること、

【略傳】 章八元は睦州の人、大曆の進士、嘗て郵亭に詩を題す、蓋し楚の音に激するなり、會稽の嚴維、驛に到りて問て曰く爾能く我に從つて詩を學ぶや、曰く能くせん、少頃あつて遂に發す、八元已に家を辭す、維之を賢なりとし遂に親しく指諭す、「才子傳」傳ふる所、曰く八元、大曆六年、王淑、第三人の進士に榜す、京に居る既に久し、床頭金盡き、江南に歸つて韋蘇州を訪ふ、持贈甚だ厚し、復都に來りて制科に應ず、「孰れか是なるを知らず、

【句釋】 新安は唐代江南道に屬す、今日の安徽省徽州府休寧縣治とす、江行其の江の歙縣自する者は黟山より出で、休寧自する者は率山より出で、續溪自する大彰山より出で、婺源自する者は浙山より出づ、浙江より休寧を浜る者を灘と爲す、三百六十あり、江源南出永浙江の源は南方徽州より出るを云ふ、先づ水の地理を説く、野飯暫維梢俗語で言はば一寸辨當を食ふ時間、梢即ち帆綱「ホヅナ」を維ぐ、古戍懸魚網漁人が網を乾す爲め之を古戍に懸ける、空林露鳥



●巢鳥が雛を育する巢なるか、或は已に去て空しき巢なるや、素隠は未だ巢を出でざる雛を養ふに空林の字を以てするは面白しと云ふ、實事は面白きではすまず、恐くは鳥去つた後の空巢が見えるならん、古成は魚網を懸るに宜し、空林は鳥の巢を構ふるものにあらず、雪晴山春現是れ高處の景、沙殘浪痕交是れ低處の景、沙石の淺處は種種の浪が混交するを言ふ、自笑無媒者知已無きを無媒と云ふ、逢人作解嘲揚子雲の如き文豪は人の爲めに解嘲を作るも可なり、余が如きもの如何に無媒なるも解嘲を作りて子雲に擬するは他人の笑を待たず、我自ら笑ふのみ、【評論】此の篇、道中に依て身世の感を寓す、其の人品卑しからず詩も亦卑しからざる所以なり、

三月五日汎長沙東湖

張又新

上巳餘風景 芳辰集遠坳 湖光迷翡翠 草色醉蜻蜓

鳥弄桐華日 魚翻穀雨萍 從今留勝會 誰看畫蘭亭

上巳風景を餘す、芳辰遠坳に集まる、湖光翡翠を迷はし、草色蜻蜓を醉はしむ、鳥は桐華の日を弄し、魚は穀雨の萍に翻る、今より勝會を留めば、

誰か看る畫蘭亭

【略傳】張又新字は孔昭、工部侍郎薦が子なり、元和中に進士高第に及んで左右補闕を歴、李逢吉に附けり、汀州の刺史を罷らる、又李訓に附けり、訓死す、後坐して貶せらる、左司郎中に終る、

【句釋】三月五日即ち上巳の後二日なり、三月三日を三國以來上巳と定めたり、汎は「ウカブ」舟游なり、長沙東湖南の長沙は洞庭湖には遠し、東湖は極めて微小なる湖なり、上巳餘風景初めの巳の日なるを以て上巳と云ふ、二日後なるも依然たる風景なり、芳辰は單に上巳のみならず、三月は悉く通ず、集遠坳は音「ケイ」郊外を坳と曰ふ口と同じ、遠方の水涯に集會すとなり、湖光迷翡翠是の日は天晴朗なるを以て湖光も亦清澄、以て翡翠即ち「カバセミ」も魚を補ふるに迷ふべし、餘りに明白なるは雜色を辨じ難ければなり、草色醉蜻蜓草色盛んに生じ青青たる處亦香氣を發す、蜻蜓即ち「トンボ」も自ら醉ふが如し、此の二句詩として解すべし、理を以て解すべからず、鳥弄桐華日桐の花は晩春に開く、天晴鳥も自然を娛むが如し、桐花日は桐花の日にて名詞にはあらず、魚翻穀雨萍萍の葉は晩春に生じて秋に至る、穀雨は清明後の十五日、魚族も此の期節を娛しむが如し、從今留勝會今日我輩が長沙東湖に汎ぶ勝會を記して以



て後世に留むれば、誰看畫蘭亭晉の穆帝の永和九年三月三日に王羲之が太原孫統等四十一人と山陰の蘭亭に會し酒酣詩を賦し序を製す、好事の者、此の圖を畫き名けて蘭亭脩禊圖と曰ふ、此の蘭亭の勝會も、我東湖の勝會の爲め、人の語るもの無きに至らんか、

【評論】 一二、對を以て起し、尙盛唐の作風、而して第三句第六句は共に水中の景、第四句第五句は地上の景、古來之を互鎖の變格と稱す、

の送人入蜀

李遠

蜀客本多愁 今君是勝游 碧藏雲外樹 紅露驛邊樓

杜宇呼名語 巴江學字流 不知煙雨夜 何處夢刀州

蜀客本愁多し、今君是に勝游す、碧は藏す雲外の樹、紅は露はす驛邊の樓、杜宇名を呼びて語り、巴江字を學んで流る、知らず煙雨の夜、何れの處にか刀州を夢みん、

【句釋】 送人入蜀蜀は今日の四川省成都府を以て中心と爲す、而して重慶、而して夔州、山益す深く、水益す清し、蜀客本多愁古、蜀の望帝は他郷に在て死し、其の魂常に歸を思うて

遂に鳥と化し、以て不如歸去と呼ぶ、此の如き歴史を有する土地ゆゑ游ぶ者は懷郷心起らざるを得ず、是に於てか愁多き所以なり、今君是の字は「ココニ」と訓む、前に蜀客とあり、此の蜀字を承けて是にと云ふ、勝游は景勝を探つて遊ぶを云ふ、勝游の中必ず郷愁を起さんとの意を含む、碧藏雲外樹天も山も雲も樹も悉く碧なるゆゑ特に樹の一種を認めがたしとの意、紅露驛邊樓碧に對する紅は特に目を牽く、其の紅色は何ぞ是れ驛邊即ち旅館の閣樓なり、共に蜀に入る途中の景、杜宇呼名語張華の『博物志』に「杜宇啼て苦しむときは自ら名を呼んで謝豹と曰ふ、」叫と言はずして語と云ふ、味茲にあり、『寧宇記』なる書は未見の書なるが、季昌の註に此の書を引きて曰く、蜀の先は人皇の際に肇れり、黃帝の子、昌意に至りて蜀の女を娶り帝馨を生む、後支庶を蜀に封す、夏殷周を歴て、始めて王者と稱す、蠶叢より拍灌、拍灌より魚鳧、魚鳧より杜宇に至る、杜宇を望帝と稱す、時に荆人の鼈靈と云ふあり、尸水に隨て上り、汝山に至り帝に見ゆ、帝立てて相と爲し開明と號す、會ま洪水あり、爲めに徑山を鑿ちて流を通じ功あり、禪るに位を以てす、又『成都記』に望帝死して魂鳥と化す杜鵑と名く、又子規と曰ふ、自ら謝豹と鳴く、又一説に杜宇位を禪りて西山に升る、隠る時適ま三月子規鳴故に蜀人悲しむ、巴江は古代の巴國、水に因て名と爲す、閬水白水、東南より合流して、漢中より始寧



城下に至る、涪陵に入て、曲折して巴字の如し、或は云ふ、江三流に分れ、中に小流あり、横貫して巴字を成すと、學字流即ち三流説是に近し、不知煙雨夜明月夜と言はずして煙雨夜と言ふ、人の愁思は或は明月、或は煙雨、境に因り、情に因りて異なるも、露旅中に在りては、愁を喚起するの力、雨は月より強きことなり、何處夢刀州蜀中何處の寓に在て、刀州の夢を結び玉ふやと、晉の王濬、廣漢の太守と爲る、夜三刀を臥屋の梁に懸くと夢む、須臾にして、更に一刀を益す、意甚だ之を惡む、主簿李毅拜賀して曰く三刀は州の字と爲す、又一を益すは、明府其れ益州に臨むなり、果して益州の刺史に遷る、後再び刺たり、今君も王濬の如く刀州を夢み、以て益州の刺史と爲る、其の夢みるは何處に在てぞや、

【評論】 此篇中間の四句は蜀を叙し、一二七八の四句は人を叙す、蜀客本多愁の五字を本とし他の七句此の五字の注脚として見るべし、一氣貫通して誤まらず、後生以て規とすべし、紀曉嵐曰く中四句好、紅樓、碧樹、拆用を以て工夫を見る、杜宇一聯細切を以て思致を見る、然れども巴江實に字を學ぶ、杜宇未だ嘗て名を呼ばず、亦微瑕なり、

七里灘

許渾

天晚日沉沉 孤舟繫柳陰 江村平見寺 山郭遠聞砧

樹密猿聲響 波澄雁影深 榮華暫時事 誰識子陵心  
天晚れて日沉沉、孤舟柳陰に繫ぐ、江村平にして寺を見、山郭遠くして砧を聞く、樹密にして猿聲響き、波澄んで雁影深し、榮華暫時の事、誰か識らん子陵の心、

【句釋】 七里灘は今日の浙江省嚴州に在り、後漢の嚴子陵が釣を垂れし處、天晚日沉沉風あれば七里、風なれば七十里と稱する、灘に於て黄昏此に來る、孤舟繫柳陰岸に沿うて柳あり、孤舟以て此れに繫ぎ、而して見る所の景は下句の如し、江村平見寺嚴子陵の菩提を弔する爲め建立せし寺を九隴寺と曰ふ、舟中望む所の寺は是れならんとの舊説なり、山郭遠聞砧村邊には寺を見、山郭には砧を聞く、寺は自然に靜寂なり、砧は自然に哀凄なり、古人を想ひ、又故郷を思ふの意を寓す、樹密猿聲響郭には砧聲、樹には猿聲、愈よ聞て、愈よ凄、波澄雁影深雁も亦人の愁を催す物、其の影波心に落つ、是れも情に堪へざるなり、榮華暫時事唐突此の語を出し、千斤の力あり、之を求むるは即ち之を失するなり、山の極處を窮むれば、遂に降るの法あるのみ、榮華は一夢、何ぞ慕ふに足らん、誰識子陵心子陵本姓は莊、後漢明帝の諱を避て姓



を嚴と改たむ、名は光、字は子陵、少うして光武と同學なり、光武即位に及んで、乃ち姓名を變じて羊裘を被、澤中に釣る、光武其の賢を思うて之を物色す、齊國に於て得たり、三たび召して至る、引て臥内に入り、舊を論じ日を累ね、因て共に起臥す、光足を以て帝の腹に加ふ、明日太史奏す、客星御座を犯すこと甚だ急と、帝笑つて曰く、朕故人の嚴光と共に臥るのみ、諫議に拜するに、受けず、歸隱して富春に畔す、世に高士と稱す、富貴は天子に至つて極まる、而かも達し盡くせば、目的は最早無し、目的無ければ樂も亦無し、樂しむと雖も亦暫時なるのみ、遂に子陵の高潔を我は學ばん、

【評論】此の篇、七里灘の所見を叙し、而して我が所思は子陵に在ることを示す、許渾其の高官に登ると雖も、林泉を樂しむの意消せず、慷慨の氣亦在り、故に懷古詩に於て晚唐其の右に出るもの無しと稱せらる、詩を作りて意義然きときは何等の詮無し、諸子詩ふ三讀せよ、

孤山寺

張 祐

樓臺聳碧岑 一徑入湖心 不雨山長潤 無雲水自陰  
斷橋荒蘚合 空院落花深 猶憶西窗夜 鐘聲出北林

樓臺碧岑に聳え、一徑湖心に入る、雨ならずして山長く潤ひ、雲無くして水自ら陰る、斷橋荒蘚合し、空院落花深し、猶ほ憶ふ西窓の夜、鐘聲北林より出でしことを、

【略傳】張祐字は承吉、南陽の人、或は云ふ清河、或は河東と、其真を知らず、處士を以て蘇州に居、令狐楚其の詩を以て薦む、而かも用ひられず、用ひられずと雖も、其の人極めて高く、詩亦雅思誦すべし、

【句釋】孤山寺は浙江省の杭州府城外に在り、清初の翟灝、翟瀚兄弟の合緝なる『湖山便覽』

卷二に孤山の廣化寺舊孤山に在り、唐宋人稱する所の孤山寺なり、陳の文帝天嘉元年建つ、永福と名く、唐の元和十二年、僧惠皎、法華經を寺の石壁に鐫る、宋僧方簡重建以て廣化と改む、樓臺聳碧岑梵樓禪臺碧色なる山岑に聳ゆ、一徑入湖心碧岑に上る徑は即ち西湖の中心より、漸漸と通するなり、不雨山長潤湖に接する故に山上雨なくとも潤ふが如し、無雲水自陰山に接する故に湖上雲無くも水自から陰るが如し、斷橋は西湖に架せる橋、荒蘚合孤山寺へ往來する善男善女多きときは何ぞ荒涼たる蘚苔なぞあらん、今は武宗沙汰の厄に遭ひ、當年の寺容にあら



す、空院落花深僧が住せざる故に空院、人の賞する無く花も空しく落つ、人の掃ふ無し、深き所以、猶憶西窗夜孤山寺の全盛時代、我來つて一宿せし事を猶記憶する、西窗は寢室の異名なり、津阪東陽は婦人の寢室と云ふ、婦人に限るにあらず、夫も西窗を以て寢室とす、孤山寺に婦人の寢室ある道理なし、東陽先生考を失す、鐘聲出北林西字と北字と偶然に對を成す、曉天の鐘聲が北林中より出でしを記憶するなり、

【評論】此の篇、古師の評に第一句は道場の實景を言うて、以て佛教の向上なるを美め、二句は山門の境致を言うて、宗旨の玄微を美め、三四は以て法雨慈雲の山河大地に遍きを美む、五六は寺の荒廢を謂ふ、風、雅、頌、賦、比、興の六義皆以て備ふと、此の如くにして解す、何の詩か此の如くならざらん、宋の方虛は曰く此の詩、細潤と謂つ可し、然れども太工太偶と、清の紀曉嵐は曰く太工太偶、自らは是れ病、然れども選中（瀛奎律髓）此の類極めて多し、獨此の一首を斥ふべからず、而かも此の一首亦尙未だ太工太偶に至らず、寒山子の「苔滑らかにして雨に關するにあらず、松鳴て風を假らず」は此の三四の句より轉化し來るものなり、胡應麟曰く張が子、小名冬瓜、或以て之を譏る、答て冬瓜瓠子を出すべしと、則ち張が名祐にあらず祐なること知るべし、

惠山寺

舊宅人何在 空門客自過 泉聲到池盡 山色上樓多

小洞穿斜竹 重塔夾細莎 慇懃望城市 雲外暮鐘和

舊宅人何にか在る、空門客自ら過ぐ、泉聲池に到つて盡き、山色樓に上つ

て多し、小洞斜竹を穿ち、重塔細莎を夾む、慇懃に城市を望めば、雲外暮

鐘和す、

【句釋】惠山寺は江蘇省常州府無錫縣の西七里に在り、寺の歴史は未詳、舊宅人何在武宗の厄後、僧徒は還俗し、今寺址あるも住する人無し、空門客自過寺を稱して普通に空門と稱するも、此の空門は「アケバナシ」の門を稱す、故に游客は自由自在に遊ぶ、泉聲到池盡山上より落下する泉の聲は、此の寺の池に到りて聲が盡きるなり、陸羽の「水品」に惠山寺の水を第二と名け、楊子江を第一とし、第三は虎邱、第四は丹陽、第五は揚州大明寺、第六は松江、第七は淮水、七の内二に居す、佳泉たること知るべし、山色上樓多樓上より見れば山色多きなり、小洞穿斜竹小洞へ到らんとするには斜竹を穿ちて達するを云ふ、重塔夾細莎重なりたる「キザハシ」は細



莎即ち「ミクリ」草の爲め路を夾まる、慇懃望城市常州城市を惠山より仔細に望めば、雲外暮鐘和雲外は遠方を指す、暮鐘は此寺より出ると舊注にあるが、住僧無くして鐘聲の出づべき無し、他方より起る鐘聲の和を聞くなり、

【評論】此の篇、對を以て起し、廢寺の荒涼を叙し、味言外に在り、三四特に妙と爲す、方虚谷曰く此詩、孤山寺詩と同じく三四尤も工、五六則ち工にして冗に窘しむ、前聯廢す可らざるを以て故に之を取る、紀曉嵐曰く五六單窘は則ち之れあり、工にあらざる亦冗にあらざる、余も亦紀評を取る、七八の二句は聊か俗陋なるを免れず、二家評せざるは何ぞや、

登蒲澗寺後二巖

李羣玉

五仙騎五羊 何代降茲鄉 澗有堯時韭 山餘禹日糧

樓臺籠海色 草樹發天香 浩笑煙波裏 浮溟興甚長

五仙五羊に騎つて、何の代か茲郷に降る、澗には堯時の韭あり、山には禹日の糧を餘す、樓臺海色を籠め、草樹天香を發す、浩笑す煙波の裏、溟に浮んで興甚だ長し、

【句釋】蒲澗寺は菖蒲澗に在るを以て名くるか、後二巖は寺後に在る二巖に登りて作る、今日の廣東省廣州府番禺縣の東北に在り、晉の咸安中、姚成甫、澗側に於て丈人に遇ふ、曰く此の菖蒲は安期生の種うる所なりと、安期生は古の仙人なり、五仙騎五羊「寰宇記」并に「列仙傳」に高固、楚の相と爲る、五仙人あり、五色の羊に騎て穀穗を持て州人に遺る、因て呼んで五羊仙と爲す、何代降茲郷降下せしことは事實なり、而かも何代なるを知らず、茲郷は廣州を指す、澗有堯時韭此の韭は普通の「ニラ」にあらず、即ち菖蒲を云ふ、「呂氏春秋」に菖蒲一名堯韭とあり、時の字を夾んで、前句の何代を承ける、山餘禹日糧古注に「南越志」を引て曰く、大禹、藤の根を取つて、糧と爲し飢年人之を食ふ、禹餘糧と名くと、澗には菖蒲あり、山には藤樹ありとの意、樓臺籠海色廣州は一方海に接す、寺の樓臺海色を籠る所以は蓋し實況とす、草樹發天香寺門の周圍草樹多し、而かも皆天花の香を發し人に可なり、浩笑煙波裏寺は海中に在り、故に我は煙波裏に於て大笑する、浮溟興甚長滄溟に浮んで遊ぶが如く、我が興は非常に長し、

【評論】此の篇、方虚谷の評に曰く、堯時韭、禹日糧、對工なり、詩は木工を忌む、工にして味無きは近人四六及小學答對の如し、則ち必ず此の式に拘るべからず、善く詩を爲る者は衆體を備ふ、亦此れ無かるべからず、老杜の如きを以て善の善と爲すもの、紀曉嵐曰く、此の評太善、



又曰く起太率易、結尤も語を成さず、五仙騎五羊、何代降茲郷を以て率易とし、浮溟興甚長を語を成さずと云ふ、要するに三四五六の四句を除き一二七八の句は未成品なりと斷ず、或は當る、

送僧還南海

李洞

春往海南邊 秋聞半夜蟬 鯨吞洗鉢水 犀觸點燈船  
島嶼分諸國 星河共一天 長安却回日 松偃舊房前  
春は海南の邊に往き、秋は半夜の蟬を聞かん、鯨は鉢を洗ふ水を呑み、犀は燈を點ずる船に觸る、島嶼諸國を分ち、星河一天を共にす、長安却回の日、松は偃す舊房の前、

【句釋】送僧還南海廣東の廣州は是れ南海郡なり、印度より最も早く佛教の入りし國とす、禪は特に此の地を推す、春往海南邊南海の人にして、長安に來錫せしが、今海南へ往く、往ば即ち還るなり、秋聞半夜蟬前句は行道にて、此の句は禪止であるなり、所謂禪坐して夜半に眠らず、露降るに驚き、蟬が鳴く、其の一聲の微だも聞く、寂靜極まるなり、石川鴻齋は注して曰

く、半夜ノ蟬ハ夜未ダ明ザルニ、蟬聲既ニ啼ヲ云フ、全ク夜半ニ鳴ニハアラズ、人ハ房ニ寢テ夜ガ明ケザレバ起ズ、蟬ハ樹上ニ在リテ夜ノ明ルヲ早ク知ル、故ニ人ヨリイヘバ夜半ニ鳴クカト覺ユルナリ、坐禪觀法シテ、夜モ寢ザルニヨリテ、夜半ノ蟬聲ヲ聞クト云ハ當ラザル解ナリ坐禪ハ兎モ角モ、夜半ニ蟬ノ鳴クコトハ有マジキコト也、此の如き解にては作者の苦辛を没却して、奇句をして變じて陋句と爲らしむるものなり、山中に住したる者は、夜半に鳥聲や蟬聲を聞くこと常なり、蓋し永續的に鳴くと考ふるより、大抵な者所謂實驗の無きものは、皆疑ふ所なり、鳥聲も蟬聲も共に一聲を放つのみ、此の一聲が如何にも靜寂の境と相應じ、人の詩思をして玄妙の域に進ましむ、城中に棲む人の知るを得ざる所なり、鯨吞洗鉢水是れ海中の景、鐵鉢は僧食を入れる具、食後之を海水にて洗ふ、其餘糧を鯨魚が呑む、慈悲相の前には、鯨魚も害せざるのみならず、却て柔和の物と爲る、犀觸點燈船犀は水犀、毛は豕の如く、頸は馬の如く、鼻上、頭上、額上に各の一角あり、其の性月を喜ぶ、今船中に點する燈を認めて月と爲し來りて之に觸る、以て僧の害心なく、慈悲を示すなり、島嶼分諸國是れ畫の景、舟中より東方の島は何、西方の嶼は何と、明白に分判することを得、星河共一天是れ夜の景、天上と海上と同一色にして、區別なきを云ふ、前句は差別、此の句は平等を意味す、長安却回日此の却



回は本へ回るの意、禪宗では「キヤウイ」と發音する、詩語としては「キヤククワイ」で妨げ無し、海南の化益終りて再び長安に回るの日、松偃舊房前唐の玄奘三藏は西域に往く、其の房前に松あり、其の枝西偃す、忽ち一日枝東偃す、弟子曰く師歸らん果して然り、今師も長安に回るの日、定んで玄奘の如きことあらんとなり、

【評論】此の篇、平易に製したる觀ありて、其の實甚だ努力せしものなり、春秋二季は佛制として僧の行脚を許し、夏冬には行脚することを特種の事を除く外、許さず、此の春秋の佛家に切なる文字を以て起し、而して題目の海南を云ふに句句水上の景を以てし結末二句其の歸來を叙して我が敬慕する意を表はす、佛典を讀み其の理に通ずる人にあらざるより、決して此の詩無し、余深く其の努力の詩たるを讚す、句法は交股格なり、三句は五句と同じく晝景、四句は六句と同じく夜景、股を交へて對を爲す、方虛谷曰く、洞賈島を學んで詩を爲る、第五句佳、紀曉嵐曰く、五六是れ一氣、虛谷何を以て但上句を賞するや、

鄂北李生舍

圭峰秋後夜 亂葉落寒虛 四五百竿竹 二三千卷書  
雲深猿盜栗 雨霽螳沾蔬 只隔門前水 如同萬里餘

圭峰秋後の夜、亂葉寒虛より落つ、四五百竿の竹、二三千卷の書、雲深くして猿栗を盗み、雨霽れて螳蔬に沾す、只門前の水を隔てて、萬里餘に如同す、

【句釋】鄂北鄂は縣の名、夏の時の扈、商の時の崇、漢代の右扶風郡、今日の陝西省漢中府南鄭縣の地、李生は未詳、舍は李生の宅か寓舎か判然せず、圭峯終南山の別峯を圭峯と云ふ、李生が舍の在る所、秋後夜方に冬に近からんとする時の夜、亂葉落寒虛は「ソラ」冬日なれば寒虛と云ふ、夜坐して風の爲めに落木の亂れる音が、颯颯と聞える、四五百竿竹是れ舍外の景、仄仄仄仄の法、亦以て知るべし、二三千卷書是れ舍内の景、仄仄仄仄の法、仄仄仄仄の法、句を爲す邦人は宜しく此等の法を見るべし、雲深猿盜栗是れ樹上の景、栗は舍主が愛護して賣らんと欲する物、之を取る猿は盜猿ならずや、雨霽螳沾蔬是れ地上の景、雨後に螳が營營と自活の道を講ずる状、沾蔬を素隱和尚は解して曰く、「雨後ニ螳が蔬ノ上ニ登リタルヲ見レバ、螳が蔬ヲウルホシタルヤウナリ」と、是れ謎を解きたる如し、唐賢は謎の如き詩は決して作らず、實景を其の儘叙し、細工を加へず、案するに沾は整頓、添也、益也、集也、雨後の氣を愛して



蝥が蔬上そじやうに集あつまるなり、何なんの爲ために集あつまると云ふことは、問題もんたいが別べつにて、詩しの意いは集あつまるものなり、蝥ありが登のぼりたるを見れば、蔬その濕うるはは雨あめの爲ためにみならずして、蝥ありの爲ためなりなぞと解かするは謎なぞと唐詩たうしとを混同こんどうしたる説せつ、余よは取とらざるなり、只ただ隔門かくもん前水門ぜんすいもん前ぜんの人家じんかとは、一水すいを隔へだつるのみ、五步ごほ十歩じゅうほの間あひだのみ、而しかも其その雅俗がどくの異ことなり、喧寂けんじきの別べつなるは、如同にんどう萬里まんり餘遠よとほく普通ふつうの人じん家かと離はなれて棲すむが如ごとき感かんを爲なすなり、

【評論】此の篇、幽居ゆうきよの状じやうを描えがき良よと人にひとをして其その境きやうを目前もくぜんに彷彿へいふせしむ、杜子美としのみの「仰蜂やうほう粘ね落絮らくしよ、行蝥上かうじやう枯梨こら、と雲深うんしん猿盜えんたう栗り、雨霽うさい蝥沾かうせん蔬そと、殆ほとんど軒輕けんけい無なきものとす、

塞上

司空圖

萬里隋城在 三邊虜氣衰 沙填孤障角 燒斷故關碑

馬色經寒慘 鵬聲帶晚悲 將軍正閒暇 留客換歌辭

萬里隋城在り、三邊虜氣衰ふ、沙は填む孤障の角、燒は斷つ故關の碑、馬色寒を経て慘み、鵬聲晚を帶て悲む、將軍正に閒暇、客を留めて歌辭に換ふ、

【句釋】塞上塞は去聲讀即ち「サイ」なり、入聲讀の「ソク」は今の要にあらす、要塞、邊界、夷狄を擁塞する所以、乃ち中國と邊土との界を成る兵營を指すと見て可なり、軍の出發に際し、「塞上曲」あり、軍の凱旋に際し「塞下曲」あり、今の塞上は出發にあらざるなり、萬里隋城在隋の煬帝の大業三年に築きたる長城を萬里隋城と云ふ、始皇の築きたる城を再修したるものならん、三邊は南蠻、北狄、西戎の三土を云ふ、虜氣衰胡虜は常に中土を犯さんと欲する者、犯して勝てば必ず王と爲ればなり、元の鐵木眞、忽必烈、清の愛親覺羅の如き邊土より起りて、中原を征服せし人の例なり、沙填孤障角障は元來山なれども、今は小城の注を取る、即ち小城の角に沙土が充填してある、戦時には沙は散じてあらざるなり、燒斷故關碑戦時には篝即ち「カガリビ」を揚げて以て警戒す、今や太平其の事なく、故關の下には石碑が存立するのみ、馬色經寒慘寒を経るも慘ならしめざるが、愛馬の當然なり、然るに馬色が寒を経て慘なるは、馬を大事にする必要なければなり、鵬聲帶晚悲鵬は鷺の類、猛性の鳥なり、然るに晩色を帯びて悲むは、食ふ所の人屍肉も無く、馬屍も無ければなり、悲字一本に飢に作る、悲を可とす、將軍正閒暇塞上の司令官は戦時には多事なるも、太平の時には閒暇甚だしきものなり、留客換歌辭客は作者自身を指す、太平なれば將軍も詩人を留めて、歌辭を賦し以て武事に換ふとの意なり、



【評論】此の篇、對法を以て起し、而して塞上にして太平、太平にして塞上の景を叙し、句句塞上ならざるは無く、語語太平ならざるは無し、表聖集中の傑作に屬す、

寄永嘉崔道融

旅寓雖難定 乘閒是勝游 碧雲蕭寺霽 紅樹謝村秋

戍鼓和潮暗 船燈照島幽 詩家多滯此 風景似相留

旅寓定め難しと雖も、閒に乗じて是に勝游す、碧雲蕭寺霽る、紅樹謝村秋なり、戍鼓潮に和して暗く、船燈島を照して幽なり、詩家多く此に滯る、

風景相留むるに似たり、

【句釋】寄は遠寄なり、永嘉は郡名、今日浙江省に屬す、崔は姓、道融は名、旅寓雖難定旅人の寓處は何處と定める譯にはゆかぬ、作者が河中に在て、永嘉に漫游する崔を指して云ふ、旅寓は崔の旅寓なり、乘閒是勝游何處と定めざるも是即ち永嘉に遊ぶは良とに勝游、我をして寄懷詩を作らしむるも、此の永嘉の游を爲し玉へばなり、碧雲蕭寺霽碧雲の字は宋僧慧休が日暮碧雲合の句を作り、名を一時に馳せしより、遂に僧に屬し、寺に關する文字に定められしなり、

蕭寺も亦然り、梁武の名を蕭と云ふ、此の天子非常に寺を多く造りしより、遂に寺を稱して一般に詩人は蕭寺と稱するに至れり、晴天なればこそ、寺邊は碧雲が懸る、紅樹謝村秋晉の謝靈運は永嘉郡の太守たりし事あり、其の遺跡として、謝公嶺を存す、謝村の名は無きも、用ひ得て亦妨げず、碧雲は霽、紅樹は秋、共に勝游に適す、戍鼓和潮暗永嘉郡は海に接す、其の海防の爲め兵營ありて之を成る、其の兵營より起る鼓聲と、海上より起る潮聲と相和して來る、其の響を暗中に聞く、船燈照島幽燈の字を諸本「窗」に作る、今本集に依て改む、船中に點する燈火が島を照して、幽かに見えるなり、詩家は詩人と同じ、多滯此此の永嘉に滯留する者多し、風景似相留詩人の滯留する所以は、風景の爲め留めらるるならんと云ふ、

泊靈溪館

鄭 巢

孤吟疎雨絕 荒館亂峯前 曉鷺棲危石 秋萍滿敗船

溜從華頂落 樹與赤城連 已有求閒意 相期在暮年



孤吟疎雨絶ゆ、荒館亂峯の前、曉鷺危石に棲み、秋萍敗船に滿つ、溜は華頂より落ち、樹は赤城と連る、己に間を求むる意あり、相期暮年に在り、

【略傳】鄭巢は錢唐の人、大中間に進士に擧せらる、時に姚合詩宗と號す、杭州の刺史たり、巢所作の詩を獻じて、日に門館に遊ぶ、大に獎重を得、又湖山の諸寺に遊び、交を山僧に結ぶ、終身仕へず、詩一卷あり、

【句釋】泊は宿泊、靈溪は溪の名、館は旅館、杭州を去る日本里程六七十里にして台州府あり此の台州府に天台山在り、此の館は天台山中にあるなり、孤吟疎雨絶獨坐以て詩を吟じ、雨之を和するかと思ひしに何ぞ忽ち絶ゆ、荒館亂峯前山中の旅館なれば、極めて荒涼寂莫たり、曉鷺棲危石是れは旅館にて所見の曉景、人の見て危ふしと思ふ石上に鷺は安全と棲む、秋萍滿敗船秋の浮萍が敗船に茂生す、溜は飛溜、碧溜、奔溜などと熟語して、飛泉即ち「タキ」と見て可なり、從華頂落天台縣の東北三十里に華頂峯あり、隋の智者大師が坐禪せし處と云ふ、此の華頂の飛泉は天下に有名なるものとす、樹與赤城連赤城は山名、一に燒山と名く、石壁霞の如し、故に名く、縣北六里にあり、已有求聞意此の地の幽邃なるを見て、隱棲の意を生ずるなり、

相期在暮年隱棲の意あるも只今直ぐと云ふにあらす、暮年即ち六七十の後にせんとなり、【評論】此の篇、題目は泊とありて、篇中夜趣を叙せず、唯書景を叙す、前後二聯、靜中に動あり、動中に靜あり、曉鷺の一句、杜甫の黃鸝翅垂雨と其幽致を同うす、

甘露寺

孫 魴

寒暄皆有景 孤絶畫難形 地拱千尋嶮 天垂四面青

晝燈籠雁塔 夜磬徹漁汀 最愛僧房好 波光滿戶庭

寒暄皆景あり、孤絶畫けども形どり難し、地は千尋の嶮を拱し、天は四面の青を垂る、晝燈雁塔に籠め、夜磬漁汀に徹す、最も愛す僧房の好きを、波光戸庭に滿つ、

【略傳】孫魴は唐末の處士、樂安の人、沈彬李建勛と同時なり、唱和亦多し、魴に夜坐の詩あり、世の爲めに稱玩せらる、建勛尤も之を器待す、日に與に談讌す、嘗て魴を齋幕中に匿す、沈彬が來るを待て、乃ち問て曰く、魴が夜坐の詩如何、彬が曰く、田舍翁の火爐頭の語、何ぞ道ふに足らんや、魴幕中より出で、彬を謂て曰く、何ぞ讖諤するの甚だしきや、彬が曰く、晝



多灰漸冷、坐久席成痕、此れ田舎翁の爐上にあらずんば、誰か此の況あらんや、一座大笑すと、  
『唐書』に傳を缺き、「才子傳」に傳ふる所上の如し、

【句釋】甘露寺は浙江の潤州城東南に在り、大江に臨んで築く、唐の寶慶間に丞相李德裕建  
てて、穆宗の冥福を資く、建る時甘露降る、以て寺名と爲す、寒暄皆有景寒暄は四時と見て可、  
寒は秋冬、暄は春夏、四時共に賞すべき景あり、孤絶畫難形孤絶は、獨絶と同じ、勝景の獨絶  
なること如何に名畫師も其の真相を描寫し難しとなり、地拱千尋險拱は環なり、「メグル」と訓  
す、高層の形容は、千尋か萬尋を以て最とす、八尺を一尋と爲すなぞの注は無用なり、天垂四  
面青、峻險なる山峯が四面を環る故に天も亦其の青色を四面に垂れたるが如し、晝燈籠雁塔大  
なる雁塔の中に小なる燈火が籠る、晝夜消せざるゆゑに長明燈と稱す、夜磬徹漁汀僧が夜課に  
打つ磬が遙かなる漁汀に徹する如く響くなり、最愛僧房好「律髓」に「更愛僧房外に作る、好は  
前句に已に叙す、外の字に如かず、僧房外の景色を更に愛するなり、波光滿戶庭海水の光が梵  
庭に逼る、日も波上より來り、月も亦波上より光を移して梵庭に來るなり、其の光が充滿す  
る、

【評論】此の篇の甘露寺を描寫して大乘の域に入るものなり、方虛谷曰く魴が金山寺詩に「驚

濤濺佛身」の句あり、佳なり、此の詩第四句最も好、尾句亦佳、五六は則ち套語なり、紀曉嵐  
曰く五句は是れ套、六句は套にあらず、夜磬徹漁汀は、紀評の如く清新にして腐套にあらざる  
なり、

江行

李咸用

瀟湘無事後 征棹復嘔啞 高岫留殘照 歸鴻背落霞  
魚依沙岸草 蝶寄汨流槎 共說干戈苦 汀洲減釣家

瀟湘無事の後、征棹復嘔啞、高岫殘照を留め、歸鴻落霞に背く、魚は沙岸  
の草に依り、蝶は汨流の槎に寄る、共に説く干戈の苦、汀洲釣家を減すと、

【略傳】李咸用の傳は詳なるもの無し、宋の楊誠齋が李咸用集の序に於て曰く、唐末の人なら  
ん、詩を以て考ふるに宣宗の大中年、湖南の軍亂れて、其の觀察使韓宗を逐ふ、六年に黃  
巢、潭澄二州を陷す、而して光啓・乾寧、光化に涉りて瀟湘の地亂る、其の亂後の詩が此に載る  
詩とす、或は云ふ隴西の人と、信を措きがたし、

【句釋】江行は一本「湘江晚歸」に作る、此の四字を可とす、瀟湘瀟と湘とは其出る所異なるも、



二水合する永州の地を以て之を合唱す、無事後戦亂戢まりし後を云ふ、征棹復嘔啞舟游をする  
棹の聲が舊に復して嘔啞と響く、日本の如く竹棹にては響の發すべき事なし、械なるが故に聲  
を發するなり、高岫留殘照岫は山の極めて高處、歸鴻背落霞北歸の鴻雁は落霞に背き去る、背  
は「ウシロ」にすることとなり、共に是れ高處の景、魚依沙岸草是れは水底の景、蝶寄汙流槎  
流は逆流なり、槎は浮木なり、是れ水上の景、共説干戈苦舟人等と共に戦争の慘苦を説く、江  
洲滅釣家戦争後の漁家は滅じて、戦争前の盛んは見ずとなり、

【評論】 此の篇、所見を賦して感慨之に繋る、江中を中心として以て四方の景に及ぶ、細心の  
作とす、

春日野望

李中

野外登臨望 蒼蒼煙景昏 暖風醫病草 甘雨洗荒村  
雲散天邊影 潮回島上痕 故人不可見 倚杖役吟魂  
野外登臨して望めば、蒼蒼として煙景昏し、暖風病草を醫し、甘雨荒村を  
洗ふ、雲は散ず天邊の影、潮は回る島上の痕、故人見るべからず、杖に倚

つて吟魂を役す、

【略傳】 李中宇は有中、九江の人、唐末の進士、天祐四年を以て死す、

【句釋】 春日野望戦後の野景を見て、感慨以て賦したるなり、野外登臨望野外の高丘へ登臨し  
て以て東西南北を眺望す、蒼蒼煙景昏春は秋の如く天も地も澄むこと無し、所謂朦朧として分  
明ならず、此の句は其の氣味を云ふ、蒼蒼は草が茂りあふなぞと云ふは兒童の解なり、暖風醫  
病草嚴風の爲めには草木も病むが如し、暖風に遭へば必ず蘇る、甘雨洗荒村甘雨は凍雨又冷  
雨の反對、佛教で稱する慈雨と同じ、其の雨が降りて荒村も良村と變化したり、此の二句は、  
天軍勝ち、賊軍敗れしことを云ふ、雲散天邊影青天白日人意に適するを云ふ、雲散は賊軍の散  
するなり、天邊は賊軍が遠く去るなり、潮回島上痕潮は回る處へ回らざるべからず、回る處へ  
回ればそれを順と云ふ、是れ即ち島治も以前の如く、朝廷の役人が來り、舊の如く政治を執る  
を云ふ、故人不可見舊友は今何くに在るや、嘗て見る能はず、戦歿もあらん、逃去もあらん、  
倚杖役吟痕杖を卓して一感一咏窮まり無きなり、役は驅役、吟心を頻りに驅役して名句を求め  
んと欲するなり、

【評論】 此の篇、今日の良治を喜ぶと雖も、過去の紛亂を悲しむ、悲喜交至の狀字字句句彰影



たり、

勝果寺

僧處默

路自中峯上 盤回出薜蘿 到江吳地盡 隔岸越山多  
 古木叢青靄 遙天浸白波 下方城郭近 鐘磬雜笙歌  
 路は中峯より上る、盤回して薜蘿を出づ、江に到つて吳地盡き、岸を隔て  
 て越山多し、古木青靄を叢め、遙天白波に浸す、下方城郭近し、鐘磬笙歌  
 を雜ふ、

【略傳】 處默は越州の人、或は睦州の人と云ふ、羅隱同時の人、

【句釋】 勝果寺は浙江省杭州の鳳凰山に在り、或は聖果と云ふ、吳越の錢氏建つ、或は云ふ唐  
 の文喜建つと、宋の慶歴の初、塔に因て 此の寺に崇額を崇聖寺と稱す、尋で勝果に改む、南渡後、  
 其の地を以て殿司衙と爲し、寺を包家山に徙す、燒く、明の洪武間重建、今に尙存するなり、  
 路自中峯上中峯は宋の宮城外、勝果寺の右に在り、絶頂平曠、透起石峯屏の如し、「湖山便覽」  
 盤回出薜蘿メグリメグル事を盤回と云ふ、蕙などを漸くに出づ、到江吳地盡浙江を以て吳越の

境とす、吳が盡されば直ちに越、理としては言ひ易し、詩としては容易に言ひ難し、隔岸越山  
 多吳地盡も、越山多も、上方より望見して以て發する所の言なり、越は會稽山を指す古木叢青  
 靄寺の周圍、又鳳凰山の實景、靄は叢まる物に依て色を爲す、樹木は青色なれば靄亦青たり、  
 遙天浸白波鳳凰山より東南に大江を見る、天を浸して却て白し、下方城郭近杭州府城は鳳凰山  
 下に在るなり、鐘磬雜笙歌寺鐘と城歌と響き合ふを云ふ、

【評論】 此の篇、勝果寺に題する詩として尤も有名なるもの、それは地理を到江十字で言ひ盡  
 すの妙あればなり、然れども其の長きを嫌ふ者あり、宋の陳后山曰く吳越隔江分、明の謝茂秦曰  
 く吳越一江分以て各の得意とす、余を以て之を視るに一句としては言ひ得るも二句としては言  
 ひ得ざるなり、律體は必ず律體ならざるべからず、縮字の法固より必要なり、而かも衍字の法  
 も亦解せざるべからず、巧拙何ぞ必ず長短にあらん、明の華察の詩に、時聞雀鳥喧、因念黍  
 熟、沈歸愚評して曰く、王摩詰云ふ雀喧黍熟、此の五字を衍して十字と爲す、古人に及ばず、  
 一種の形に囚はれたる者の論、多く此の病に墮す、蓋し我邦人の長きを貴ぶ者の爲めには良藥  
 たらすんばあらず、紀曉嵐曰く三四味有り、後四句味無し、



靜林寺

僧靈一

靜林溪路遠 蕭帝有遺蹤 水擊羅浮磬 山鳴于闐鐘  
燈傳三世火 樹老五株松 無數煙霞色 空聞昔臥龍

靜林溪路遠し、蕭帝遺蹤あり、水は羅浮の磬を撃ち、山は于闐の鐘を鳴らす、燈は傳ふ三世の火、樹は老ゆ五株の松、無數煙霞の色、空しく聞く昔の臥龍

【略傳】 靈一は越中雲門寺の人、持律甚だ嚴、清高を以て世の歸仰する所となる、詩を能くす、劉長卿、嚴維、郎士元、皇甫冉の諸子皆詩を以て相往來す、

【句釋】 靜林寺は安吉州、即ち今日の湖北省襄陽縣に在り、梁の晉安王、表奏して靈泉寺を造る、周に靜林と改む、隋に景雲と改む、唐に至り靜林の舊に復す、靜林溪路遠襄陽は四面皆山、靜林に赴かんと欲するには溪路を經るは是れ實況なり、蕭帝有遺蹤武帝と言はずして、蕭帝と言ふ所に作者の苦辛を見るべし、前朝の天子に對する詩人の意欲察すべし、水擊羅浮磬羅浮山は廣州に在り、一名蓬萊山、增城博羅二縣の界、今日の廣東省、浙江省の靜林寺とは里數の隔

たること甚だしきが、此の寺に羅浮山より出たる石磬を藏せしならん、羅浮の石磬は雨に敲かるれば自ら音を發するなり、山鳴于闐鐘于闐と云ふ國は長安を去る九千六百七十里と稱せらる、此の寺を隔つる一萬里程とならん、此の于闐は一名瞿薩且那國、是れは印度人の稱する名にして、漢人は譯して地乳國と云ふ、葱嶺山脈は于闐に出づるなり、支那と印度の通路に、天山北路と、天山南路とあり、其の天山南路を經て、印度に赴く者は、必ず此の于闐を通過するものとす、漢の明帝の永平六年に將軍班超、此の國を征せしことあり、漢代の人は「ユイテン」と稱す、今日の漢人は「ホーテン」と發音す、古來印度僧の漢土に來らんと欲する者、多く甘肅や、于闐に停まりて、長安や、洛陽に至らざる者なり、故に佛教の遺跡今日に至りて多きこと當然のことなり、法顯三藏、智猛法師等、皆此の于闐を通過して、渡天せしものとす、此の國に出る鐘は、風至れば自ら鳴るとの傳説なり、燈傳三世火過去も、現在も、未來も照す功能ありとの意、燈燈相繼ぎ滅せざるを云ふ、三世は佛教で貴ぶ所なれば用ひしなり、樹老五株松寺庭に松を五株植ゑると云ふ事は別に佛典に教ふる所ならず、秦の始皇が巡狩して驟雨に遇ひ、五株の松を大夫の官に封せしことあり、其れを用ひて以て武帝と始皇とを比したるなりと素隱の説、甚だ當るを覺ゆ、無數煙霞春色の寺庭に滿るを云ふ、煙霞は春の景色を表はす語な



り、空聞昔臥龍何の事を言ふや作者以外の者は分明に知れざるなり、諸葛孔明に類する僧が昔し住せしが、今日は啞羊僧のみ住して、但昔しの事を空しく聞くのみと云ふ意か、或は寺門深くして昔し茲に眞龍が伏臥せしなりと云ふ意か、前に燈傳三世火とあるより見れば、愚僧が今日は住すと此の句を解するは當らず、愚僧では傳燈は出來ざるなり、昔し眞龍が潭に棲みしと云ふが、其れは今日見すと定めて可なり、杜審言の早春游望より此に至る三十四首是れを四實の體とす、華麗典重の間に雍容寛厚の態ありと稱せらるるものなり、

【評論】 比の篇、方虛谷曰く第五句最奇而して下句亦稱すべしと、紀曉嵐曰く第五句事晉書に出づ、殊に奇處無し、紀又曰く三四五六句調一同三四亦太だ裝點、余曰く燈傳三世火是れ尋常の語にして奇語にあらず、紀は事晉書に出づと云ふ滑稽笑ふ可し、佛典に出る所にして晉書に出るものにあらず、詩人の佛典に暗きこと古今同一嘆すべし、三四裝點と云うて紀は斥ふが此の首として摘句すれば三四を以てす、五六以下は平平の語のみ、

秋夜同梁錙文宴

錢起

客到衡門下 盃香蕙草時 好風能自至 明月不須期  
秋水翻荷影 清霜脆柳枝 微官是何物 計可廢吟詩

客は到る衡門の下、盃は香し蕙草の時、好風能く自ら至る、明月期することを須たず、秋水荷影を翻し、清霜柳枝を脆くす、微官是れ何物ぞ、計可吟詩を廢せん、

【句釋】 梁錙文は錢起の友人ならん、傳は未詳、客到衡門下衡は木が三本で門を造るもの、左右二本と上に一本、以て貧家と自稱する意味、富豪を朱門と稱する反對の白門と同一義とす、梁が客と爲りて來る、盃香蕙草時但酒猶可なり、況んや秋風蕙草の香はしき時に於て之を飲む、盃も亦香を覺ゆ、好風能自至求めざるも好風自然に室に入る、明月不復期招かざるも明月自然に來る、秋水翻荷影明月の爲め秋水が荷葉の影を翻がへすを知る、清霜脆柳枝柳枝は元來脆きものなり、秋霜に遇うて一層脆くなりたるを知る、共に池邊の景なり、微官は何物小官吏と爲るも、官紀などと云ふものに束縛せられて自由に放言できざるが普通なり、何ぞ思なることぞやと大悟すれば、是れ何物ぞと言はざるを得ず、錢起は考功郎中の官、日本今日の官制にては奏任三等位の所に當る、計可は「ドレホド」「イカホド」の意、廢吟詩官に居て詩文を弄するは、曠職なぞと咎めらるるは俗吏の常態なり、我等は愚輩が何と云うても、詩を廢する如き陋を



爲さずとなり、

【評論】此の篇、淡にして自然、韋蘇州の趣致あり、胡元瑞曰く錢が製作富而して章法多く乖くと、此の篇是れ何の乖く所あらん、

望秦川

李頎

秦川朝望迥 日出正東峯 遠近山河淨 透迤城闕重  
秋聲萬戶竹 寒色五陵松 客有歸歎嘆 凄其霜露濃  
秦川朝望迥なり、日は出づ正東の峯、遠近山河淨く、透迤として城闕重なる、秋聲萬戶の竹、寒色五陵の松、客に歸歎の嘆あり、凄其として霜露濃かなり、

【句釋】望秦川秦川は今日の陝西省西安府興平縣を流るる川、即ち長安城の西に當る、舊説に李頎未だ及第せざる時、此の題に依て不平を慰せしものならんと、朝望迥秦川の地を望むことと迥即ち遙かなり、日出正東峯賦體としては旭日が東峯に出るなり、比體としては君主の恩光東より出るなり、雙方へ係けて見るべし、遠近山河淨賦としては、字の如く遠近の山河が秋晴

に淨き色を呈するなり、比としては、天子の恩輝が平等に普遍するなり、透迤城闕重『説文』に透迤は斜に去る貌と、「マガル」「メグル」の意もある、城闕が地形に随がつて重なり合ふなり、秋聲萬戶竹城中家毎に竹を植う、秋聲を聞く爲めにはあらず、單に之を愛するなり、詩人を待て始めて其の秋聲を知る、寒色五陵松漢の高帝の長陵、惠帝の安陵、景帝の陽陵、武帝の茂陵、昭帝の平陵、長安城外數武の地に在り、客有歸歎嘆『論語』に孔子の曰く、吾道行なはれざれば、歸歎歸歎と、折角游行以て教を説くも、功なければ歸るに如かずと嘆す、李自ら客と云ふ、我も孔子の嘆を發せざるを得ず、凄其霜露濃凄として霜露濃かなり、其の字何等の義も有せず、秋の氣蕭條として愁思生じ易し、況や霜露降り人を戒しむ、悠游して他郷に流連すべきにあらず、凄其以風は『詩經』の語にて、霜露既降は『禮記』の語なり、

【評論】此の篇盛唐の氣格渾然見るべし、李頎が「秦原早望」の詩、一忝郷書薦、長安未得回、年光逐渭水、春色上秦臺、燕掠平蕪去、人衝細雨來、東風生故里、又過幾花開、此の篇と相伯仲するを覺ゆ、明の蔣一葵曰く秋聲を竹上に實く便ち頓挫、

池上

白居易

嫋嫋涼風動 淒淒寒露零 蘭衰花始白 荷破葉猶青



獨立棲沙鶴 雙飛照水螢 若爲寥落境 仍值酒初醒  
嫋嫋として涼風動き、凄凄として寒露零つ、蘭衰へて花始めて白く、荷破れて葉猶ほ青し、獨立つ沙に棲む鶴、雙飛す水を照す螢、若爲んぞ寥落の境、仍ほ酒の初めて醒むるに値ふ、

【句釋】池上は「才子傳」の注に香山の僧、如滿等と、淨社を結び、沼を疏し、樹を種ゑ、石樓を構へ、八節灘を鑿て、游賞の樂を爲す、茶鐺酒杓相離れず、案するに此の淨社は東林の白蓮社の事に倣ひ、道を談じ、詩を賦し、念佛し、以て淨業を修習せん爲めの結社ならん、如何に淨業を修習しても、香山居士の如き俗詩にては、結社せざる杜甫を以て余は寧ろ貴しとせん、嫋嫋涼風動嫋嫋は長弱の形容、曳形容、風動の形容、而かも春風には用ひず、初秋乃至仲秋の風に形容す、凄凄寒露零凄凄はスズカゼの形容、「詩經」に秋日凄凄とあり、此の時寒露が零るなり、寒を一本霜に作る、霜では前句の涼に對せず、蘭衰花始白紫色の蘭が白色の蘭に變じたるは、秋遂に夏に代はればなり、荷破葉猶春秋風の爲の荷花は零落するも、葉猶ほ看に入るなり、獨立棲沙鶴雙飛照水螢此の句は有情、前句は非情、對法として律體の正格なり、若爲は

「イカンゾ」なり、寥落境は「サビシキ」境界なり、仍值酒初醒酒醒めすんば、寥落の境もそれほど感慨を生ぜざるが、酒も醒めたるに依て自ら寥落の凄感が生ずるなり、  
【評論】此の篇、賦する所の景、畫なる如く、亦夜なる如く、而かも照水螢の字を除けば、他は悉皆晝景なり、蘭の白、荷の青、夜間何ぞ分明に見る事を得ん、鄙俚疎野惜むべし惜むべし、

西陵夜居

吳融

寒潮落遠汀 暝色入柴扃 漏永沈沈靜 燈孤的的青  
林風移宿鳥 池雨定流螢 盡夕成愁絕 啼螿莫近庭  
寒潮遠汀に落ち、暝色柴扃に入る、漏永うして沈沈として靜に、燈孤にし  
的的として青し、林風宿鳥を移し、池雨流螢を定む、盡夕愁絶を成す、  
啼螿庭に近づくこと莫れ、

【句釋】西陵は今日の湖北省黃州府黃岡縣の西北、舊注越州とあり、未詳、寒潮落遠汀俗に潮が退きしなり、潮が遠汀に落ちしは即ち退きしなり、暝色入柴扃外面が暝くなれば漸漸に室内



も瞑くなる、漏永沈沈、静夜静かなる時は唯時計の音のみ永きを覺ゆ、沈沈は静の形容、深也との注は取らず、燈孤的的、青的的は明見の形容、「青燈トハ光無キヲ言フ」と注したる本あり、何等の妄言ぞ、林風移宿鳥風の爲めに宿鳥が東林より西林へ飛移りたるなり、山中にては往往此の事を見る、池雨定流、螢雨後には四方に流飛せる螢が、一處に聚まり來るを云ふ、林風の句は戦亂にて人民が離散したるに譬へ、池雨の句は戦後にて離散したる人民が本住處へ還りたるを云ふと、側面には此の意あらん、盡夕は夜通しの事、成愁絶種種の感想が起り、通宵愁絶する、啼螿「キリギリス」莫近庭キリギリスの聲を聞けば、一層愁を添ふるに依て、我が庭に近づき啼くことなかれと云ふ、

【評論】此の篇、夜居の情を寫して真に通る、方虛谷曰く五六絶妙、移定字眼用工、紀曉嵐曰く第四句尤も神味あり、余云ふ四句太佳なり、神味は稱に過ぐ、虛谷の字眼を説く笑ふ可し、

旅游傷春

李昌符

酒醒郷關遠 迢迢聽漏終 曙分林影外 春盡雨聲中  
鳥倦江村路 華殘野岸風 十年成底事 羸馬厭西東  
酒醒めて郷關遠し、迢迢として漏の終るを聽く、曙は分る林影の外、春は

盡く雨聲の中、鳥は倦む江村の路、華は殘る野岸の風、十年底事をか成す、羸馬西東を厭ふ、

【略傳】李昌符字は巖夢、咸通四年の進士、尙書郎に至る、

【句釋】旅游傷春旅行中春に感じて作る、酒醒郷關遠酒醒めざる時は郷愁も忘れ居るが、醒むれば忽ち郷愁生ず、迢迢聽漏終「ハルカ」なるを迢迢と云ふ、要するに郷もハルカ、夜もハルカ雙方へかかる、一夜眠らず夜漏を聽き終る、曙分林影外林影夕麗を分つ類にて、曙色が林に依て各の分る、春盡雨聲中春を破るものは雨と風とを以てす、霏霏たる雨聲を聞く中に春は已に盡く、晴日少かりしことも意味す、鳥倦江村路鳥も人と同じく、遊びに倦んで返る、花殘野岸風殘花は猶ほ開きて野岸に在り、十年成底事人は十年を経れば底事が成すを以て志しある者の常とす、然るに我は底事も成し得ずとなり、羸馬は瘦馬と同じ、イキチの無きツカレ馬、厭西東十年間徒らに辛勞して、生命を旅途に送る、今日では其の旅行を厭ふに至る、鳥の飛ぶに倦むと同一なり、

【評論】此の篇、一二夜情を叙し、三四以下畫情と景とを叙す、脈路整正たり、方虛谷曰く第四句最佳と、紀曉嵐曰く起句過夢歸一層を藏す用筆超妙、五句稍晦し、鳥倦江村路の五字を晦



しと云ふなり、人倦江村路なれば可なり、鳥にしては可ならず、晦なる所以見るべし、嗚乎難い哉詩や、

春 山

僧貫休

重疊太古色 濛濛華雨時 好山行恐盡 流水語相隨  
黑壤生紅朮 黃猿領白兒 因思石橋日 曾與道人期  
重疊たり太古の色、濛濛たり華雨の時、好山行く盡きんことを恐る、流水語つて相隨ふ、黑壤紅朮を生じ、黃猿白兒を領す、因つて思ふ石橋の日、曾て道人と期せしことを、

【略傳】貫休字は德隱、婺州蘭溪和安寺にして紫衣を賜ふ、吳越の錢氏歸向して禪月大師と賜ふ、又得待來和尚と稱す、皓然、齊己と三高僧と稱せらる、晚唐の人、其の詩、其の畫と共に一代の大宗、課餘の業竟に千秋と爲る、

【句釋】春山は四季異なる、春の景色を叙す、重疊は山の重なり疊むなり、太古色幾千年前より現出せしやを知らず、太古の色は變せず、濛濛華雨時春は即ち色として、濛濛たり、澹澹

たり、好山行恐盡好山は路の長く興の盡きざるを欲す、然るに生憎、苦は短かくて長く、樂は長くて短の如く、行が盡き易し、流水語相隨水聲が袞袞と流るるは、其の言語を發して我が行を助くるものの如し、黑壤生紅朮黒色の土の肥たる處、藥艸たる紅色の朮を生ず、黃猿領白兒親猿が兒猿を領じて、林中を游行す、因思石橋日種種の景を見聞するに因て昔し天台の石橋に遊びしことを思ひ出すなり、曾與道人期天台山の道人即ち世外の人と再遊を約したることを、錢起の秋夜より此に至る六首、前三十四首と略同様の髓製とす、

【評論】此の篇、春山の狀を描寫して、一家の面目見るべし、論者云ふ休公詩俗氣野氣多しと、霸氣の人、遂に俗氣あるを免れず、休公は方外の身を以て霸氣稜稜、霸氣一轉して道氣となれば可なりしも、惜哉人は道氣を存するも詩としては霸氣に富む、蓋し此の篇、霸氣を見ず誦すべきものなり、黑紅黃白の四色を用ふるの類、俗氣の致す所か、第一句の平仄法の如き、論ずる所にあらず、

送懷州吳別駕

岑 參

灞上柳枝黃 墟頭酒正香 春流飲去馬 暮雨濕行裝  
驛路通函谷 州城接太行 覃懷人總喜 別駕得王祥



灞上柳枝黃なり、壚頭酒正に香し、春流去馬に飲ひ、暮雨行装を濕す、驛路函谷に通じ、州城太行に接す、覃懷人總べて喜ぶ、別駕王祥を得たりと、

【句釋】 吳は姓、別駕は官名、懷州の別駕と爲つて行くを送る、灞上柳枝黃長安城の東に滋水あり、滋水に架する橋を霸橋と云ふ、秦の穆公が霸功を表する爲め、滋水を霸水と改めしなりと云ふ、柳色の新らしきときは黄色とす、春柳なること知るべし、壚頭酒正香文君壚頭は何人も知る所、即ち酒店と見て可なり、今日のバーは是れなり、酒器を置く所を一段高くする是を壚と云ふ、柳枝は黄にて、酒氣は香、人を送る厚し、春流飲去馬馬夫が春流に入て、別駕が騎る所の馬に飲かはし、征人の爲め用意を爲す、暮雨濕行裳天上より一過の雨もあらん、又送別者か涙雨も此の句中に在ると見るべし、驛路通函谷函谷を通過せずんば、長安より何處へも赴むく能はざるなり、函谷關には現に老子説經臺なるものあり、老聃が令尹喜の爲め道徳經を説きし地と云ふ、州城接太行太行山は山西省の絳州に屬す、王屋山、龍門山と共に奇秀を争ふ、覃懷人總喜覃州と懷州との二國の人、皆懷迎することならん、別駕得王祥人が喜ぶ所以は、別駕其の人、人格の高きこと晉の王祥にも譲らざる人なりと爲せばなり、王祥は魏より晉に來り、

太保に拜せられ、德望一世に冠たりしなり、

【評論】 此の篇、雄偉盛唐の面目彰彰たり、唐人送別詩に於る、無名子と雖も誦すべきものあり、況や岑嘉州の如き大家に於てをや、方虛谷曰く壯浪宏闊、晚唐の手望むべきにあらず、紀曉嵐曰く嘉州此の鮮華の韻を得難し、前半特に秀絶、

高官谷贈鄭鄩

谷口來相訪 空齋不見君 澗花然暮雨 潭樹暖春雲  
門徑稀人迹 簷峯下鹿羣 衣裳與枕席 山靄碧氛氳

【句釋】 高官谷は未ニ驗尋、山西省の王官谷とは別なり、鄭鄩が隱棲の在る所ならん、鄭を以て古の鄭子眞に比す、谷口來相訪空齋不見君特に君を訪問したるも、生憎不在にて晤語する能はざるなり、澗花然暮雨主人を見ずして、反つて澗中の花が然んと欲する如く、赤色を呈して暮雨中に開く、潭樹暖春雲潭上の樹、春雲の爲め、其の暖なる状を呈す、門徑稀人跡人跡稀なるは



門徑の深きを知る、簷峯下鹿羣鹿羣の下るは、捕獲する者無きを知る、衣裳與枕席室中に有する所の物、衣裳と枕席とを見るに、山靄碧氛氳氳氣が氛氳として、衣裳と枕席とを掩うて、洵に塵中の棲家にあらず、神仙中の感を生ずるなり、

【評論】此の篇、嘉州の本領たる雄宏の氣を以て出し、而して隱棲の俗界を離れたる風致觀る若し、

山居卽事

王維

寂寞掩柴扉 蒼茫對夕暉 鶴巢松樹遍 人訪華門稀

綠竹含新粉 紅蓮落故衣 渡頭燈火起 處處探菱歸

寂寞として柴扉を掩ひ、蒼茫として夕暉に對す、鶴は松樹に巢うて遍く、人は華門を訪ふこと稀なり、綠竹新粉を含み、紅蓮故衣を落す、渡頭燈火起る、處處菱を採て歸る、

【句釋】山居卽事藍田縣の輞川に在つて作る所、輞川は山中の別墅なり、寂寞掩柴扉寂寞が柴扉を掩ふにあらず、寂寞たる柴扉を掩ふなり、掩の字、寂の上頭にある意味、蒼茫對夕暉蒼茫

が夕暉に對するにあらず、蒼茫たる夕暉に對するなり、寂寞は「サビシ」蒼茫は「ヒロキ」形容なり、鶴巢松樹遍松として鶴巢の無きは無し、人訪華門稀曾て人の訪ひ來るものあるあらず、筆は「シバナアミド」荆を以て戸と爲す之を筆と謂ふ、綠竹含新粉新粉の節節に白粉を著けたる事を云ふ、紅蓮落故衣新陳代謝するを言ふ、渡頭燈火起輞川より下方の渡頭を望めば、日暮れ燈火の起るあり、處處探菱歸其の燈火は何ぞ、是れ人人が菱即ち「ヒシ」を採つて歸り來るなり、

【評論】此の篇、山居の情景を叙して、自然の致を極む、右丞の詩、詩中に畫あり、畫中に詩ありと東坡評したるは千古の定論斷じて動かすべからず、工を求むれば諸家あり、高を求むるに有唐三百年實に一人のみ、此の外「終南別業」「歸嵩山」「韋給事山居」「輞川閑居」の五律悉く神に入る、

題薦福寺衡岳禪師房

韓翃

春城乞食還 高論此中間 僧臘堦前樹 禪心江上山

疎簾看雪捲 深戶映花關 晚送門人去 鐘聲杳靄間



春城食を乞うて還る、高論此の中に閑なり、僧臘塔前の樹、禪心江上の山、疎簾雪を看て捲き、深戸花に映じて關す、晩に門人を送り去る、鐘聲杳靄の間、

【句釋】 題は題詠なり、薦福寺、大薦福寺の二寺あるも、恐くは饒州の薦福寺ならん、素隱は衡岳を人名とせず、山名と見る、誤る、衡岳と稱する禪師の名なり、春城乞食還乞食は鉢鉢のこ、と、印度傳來佛陀の弟子に命じたる修行とす、鉢に滿つれば乃ち還る、餘分を乞ふは禁制なり、高論此中間佛法を論ず、論すと雖も意境清閑なり、僧臘塔前樹臘は壽又年と同じ、出家せし以前を俗臘と稱し、出家後の年を僧臘と云ふ、例せば、俗臘八十、僧臘四十とあるは、此の人四十歳の時、具足戒を受けしこととなる、今の意塔前の老樹の如く、禪師の僧臘もただ高きなり、禪心江上山禪に依て修習したる心は端然不動山の如しと云ふ、疎簾看雪捲雪を看んが爲め疎簾を捲くなり、冬に屬す、深戸映花關人の禪坐を妨げんとを恐れ固く關す、春に屬す、晩送門人去門人とは參禪の徒を云ふ、鐘聲杳靄間晚鐘の聲は是れ客の歸を送る、杳「ハルカ」靄即ち「クモ」の間を渡るなり、

【評論】 此の篇、禪師を主にして咏じ、寺は賓たり、方虛谷曰く第三句最佳、五六套に近し、尾句味ひ有り、紀曉嵐曰く三四微しく俗韻あり五六に及ばず、余今謂ふ五六套に近しとの言は不當なり、又三四俗韻ありとの紀評も不當なり、要するに王孟二家の間に其の姿致を見る、

送史澤之長沙

司空曙

謝朓懷西府 單車觸火雲 野蕉依戍客 廟竹映湘君  
夢渚巴山斷 長沙楚路分 一盃從別後 風月不相聞  
謝朓西府を懷ふ、單車火雲に觸る、野蕉戍客に依り、廟竹湘君に映ず、夢渚巴山斷え、長沙楚路分る、一盃別れてより後、風月相聞かず、

【句釋】 送史澤之長沙司空曙が長安に在つて、史澤が人の讒に遇うて、長沙に謫せらるるを送るなり、長沙は湖南省長沙府長沙縣、謝朓懷西府齊書に謝朓、齊王の文學と爲つて、前州に在り、世祖勅して都へ還らしむ、道中詩を爲り以て西府に寄す、今史澤を以て謝朓に比し、西府の同僚を懷ふは、自らを云ふ、單車觸火雲單車は一輛の車、急赴の者の爲め驛路に用意しある、史澤は此の夏日火の如き雲の盛んなる時に際し、讒に遇うて謫せらるるは、殆んど謝玄暉が讒



言に依て、都へ還されしと同一なりと、同情の言を吐くなり、野蕉依客長沙は芭蕉が到る處に在りとの意、戍客に依るとは史澤の寓處に依るなり、長沙を成る客は即ち太守、太守は史澤なり、廟竹映湘君湘君廟に在る竹は曾て湘君が涕下りて竹に揮ぐ、竹盡く斑を爲す、其の竹が今日廟内に祀る湘君の木像に映するなり、夢渚は雲夢澤のこと、湖南の岳州府に屬す、巴山斷巴山は湖北の荊州、雲夢澤邊に至れば巴山は斷えて見えざるを云ふ、長沙楚路分長沙にては楚路が分るならん、長沙は湖南、楚路は湖北なり、一盃從別後今日離別の宴後、風月不相聞春風秋月互に相聞知せず、

【評論】此の篇、對法を以て起し、讒に對する故事を用ふること太だ工、強て之を評すれば七八平凡たるを免れず、方虛谷曰く永嘉長沙風土各の新麗を極む、取る所二聯又皆下句勝る、凡そ詩、下句を以て、上句に勝る者、作家と爲す、先の一句好、而後の一句弱なるもの或は稱せず、虛谷の意、廟竹映湘君、長沙楚路分の十字を以て好と爲すなり、或は當る、

送裴侍御歸上都

張謂

楚地勞行役 秦城罷鼓鞞 舟移洞庭岸 路入武陵溪  
江月隨人影 山華逐馬蹄 離魂掣別夢 先爾到關西

楚地行役に勞す、秦城鼓鞞を罷む、舟は移る洞庭の岸、路は入る武陵の溪、江月人影に隨ひ、山花馬蹄を逐ふ、離魂別夢を掣て、爾に先つて關西に到らん、

【句釋】裴は姓、侍御は官名、上都は長安を云ふ、楚地勞行役楚地に行役して疲勞し玉ふらん、湖北荊州府江陵が楚地なり、秦城は歸らんとする長安なり、罷鼓鞞安祿山の戰亂戢まりしことを云ふ、舟移洞庭岸裴が歸路の景、舟路を云ふ、路入武陵溪是れ陸路の景、江月隨人影是れ舟中の景、第三句に應ず、山花逐馬蹄是れ武陵の景、第四句に應ず、離魂掣別夢侍御が上都に著せざる前に我が魂は別時の恨みを「モテ」夢と成り、先爾到關西爾は「ナンデ」と訓めども、日本語の「アナタ」「ソナタ」の意に當る、關西は即ち長安、

【評論】此の篇、是れも對法を以て作る、語語沈著、交股對として太だ工なるものに屬す、

過蕭關

張蠟

得出蕭關北 儒衣不稱身 隴狐來試客 沙鷓下欺人  
曉戍殘烽火 晴原起獵塵 邊戎莫相忌 非是霍家親



蕭關の北に出るを得たり、儒衣身に稱はず、隴狐來つて客を試み、沙鶻下りて人を欺く、曉戍烽火残り、晴原獵塵起る、邊戎相忌むこと莫れ、是れ霍家の親にあらず、

【略傳】張蠙字は象文、乾寧の進士、櫟陽に尉たり、亂を避けて蜀に入る、蜀王に依て、金堂令と爲る、詩二百首を進む、召して知制誥と爲さんと欲す、朱光嗣、蠙が輕忽物に傲るを以て之を止む、官に卒す、

【句釋】蕭關は甘肅省平涼府固原州なり、『漢書』の匈奴傳に孝文十四年、匈奴單于十四萬騎、朝那蕭關に入ると、漢代の蕭關は朝那縣に在りしなり、得出蕭關北長安に返らんとする路は必ず蕭關の北に出るものとす、儒衣不稱身日本で言へば羽織袴にては道中不都合なりとの意、人の目にも立ち、歩行も迅速ならざるなり、隴狐來試客儒衣が不都合なりとあるが、然らば變裝したるか如何と云ふに、詩の上では分らざるなり、隴狐は家の穴に棲む狐、旅客を試むるは魅し易ければ魅し、魅し難ければ逃る意を持つ、沙鶻沙際の際なり、和名「クマダカ」鷹の強猛なるもの、下欺人人などを畏れて居らぬのみならず、却て欺むかと欲するなり、曉戍殘烽火

防邊の爲め戍營より時時烽火を揚ぐ、曉行の時、昨夜の烽火が猶殘れるを見しなり、晴原起獵塵鶻や狐を獵せんと欲する者馬塵を揚げ來る、邊戎人なり、邊戎莫相忌七言にすれば直ちに分る、「言ヲ寄ス邊戎相忌ム莫レ」なり、我は人種が別なりと云うて忌むこと莫れ、非是霍家親漢の將軍衛青は乃ち霍去病の舅なり、嘗て匈奴を征して大に克つ、武帝幕に就て大將軍に拜す、衛青は即ち衛皇后の弟、去病は後の姊が子、匈奴の憎む所の者は乃ち霍家の親類にあり、然るに我は霍家と縁なきのみならず、實は儒家にして、武人にあらず、幸に我を忌み我を畏るること勿れとなり、

【評論】此の篇、極めて邊土荒原の狀を描寫して雄偉、起特に突兀、開門見山の概あり、

秋夜宿僧院

劉得仁

禪寂無塵地 焚香話所歸 樹搖幽鳥夢 螢入定僧衣  
破月斜天半 高河下露微 翻令嫌白日 動即與心違  
禪寂無塵の地、香を焚いて所歸を話す、樹は幽鳥の夢を搖かし、螢は定僧の衣に入る、破月天半に斜に、高河露を下して微なり、翻つて白日を嫌は



しむ、動もすれば即ち心と違ふ、

【句釋】秋夜宿僧院テラに宿泊して山房の幽趣を寫す、禪寂の寂は「セキ」と發音せず、「ジャク」と發音すべし、無塵地清淨は佛寺の專有、焚香話所歸所歸とは自分の道に於て心の歸著するを云ふ、即ち佛法の玄理に歸向して其の旨を山僧と話す、樹搖幽鳥夢林が時に風の爲め搖かさるるあり、幽鳥も聲を發するを聞く、此れ等の趣致を云ふ、螢入定僧衣僧伽は慈悲を主とす、其の殺意なきを知るが故に、微微たる螢も坐禪せる僧衣に入る、破月斜天半破月は片月なり、片月なれば中天半と言はずして、斜天半と言ふ、高河下露微銀漢アマノガハを高河と云ふ、曉天に近づき露氣微しく下る、翻はカヘツテ即ち却と同義、令嫌白日白日は外境の爲め内心が動かされて、地定まらず、静夜の心慮全く無きに及かず、動即與心違白日は外境の爲め内心が動かされて、兔角塵念が生じ易し、自身の本心で無きことを知るも、靜に道を思惟する能はず、動もすれば、惡念が起る、動は往往にして、同意義なり、

【評論】此の篇、本集に宿樓白院とあり、樓白は劉が方外の友なり、僧院の幽趣を寫して目前に彷彿せしむ、方虛谷曰く螢入定僧衣此の一句古今之れ無し、他に坐學白塔骨、坐石鳥疑死の句あり、刻苦太甚し、此の間雅に如かず、尾句尤も高し、紀曉嵐曰く五六對偶本工、又十四字

(七言二句)の句法にあらず、太草草を嫌ふ、尾句は晩唐の習逕、高しと言ふに足らず、余云ふ、第四句、本『大論』の尙閣梨の鵠頂上に巢ふより其の意來る、詩としては前人に此の句なし、尾句は高にあらず、工にあらず、平平の語のみ、

宿宣義池亭

暮色遶柯亭 南山出竹青 夜深斜舫月 風定一池星

島嶼無人迹 菰蒲有鶴翎 此中休便得 何必泛滄溟

暮色柯亭を遶る、南山竹を出でて青し、夜は深し斜舫の月、風は定まる一

池の星、島嶼人迹無く、菰蒲鶴翎あり、此の中休せば便ち得ん、何ぞ必ず

しも滄溟に泛ばん、

【句釋】宣義は里名、會稽の山陰縣に在り、池亭は旅館にあらざるべし、宿すと云ふも、普通の池亭に一夜を明かしたと云ふに過ぎず、「夕ビヤ」と解する者は過ぎて及ばず、暮色遶柯亭池邊に在るを以て、題に池亭としたるも、亭の名は柯亭なるべし、柯は枝、小亭の意、南山出竹青柯亭前面の景を叙す、夜深斜舫月舫は枋なり竹木を以て之を爲り、水上に浮ぶ、是れを本



義とす、「モヤヒブネ」と訓して、兩船並也と注するは轉訛後の説なり、池中に浮ぶ素人製の「イカダブネ」に月影斜なるを云ふ、風定一池星風靜かならざれば、池に落ちし星影を見る能はず、星影を見るからには風は已に定まりたるなり、島嶼無人跡會稽の地たる東西に大小の島あり、或は多人の處もあり、或は無人の處もあり、況や深夜、人の行く者無し、菰蒲「マコモ」と「ガマ」有鶴翎鶴の此の地へ來ることもあらん、其の證は翎の落ちたるものあり、此中休便得此の如き好處に、此の身の休するを得れば、人生の願足るなり、何必泛滄溟桴に乗じて海に浮ばんは孔子の言、今借りて以て、我が意の此に在りて、彼に在らざることを叙す、

【評論】 此の篇、柯亭の夜景を叙し、尋常の平語なるも、其の見るべき所、句法の整正たるにあるのみ、

送殷堯藩游南山

姚合

詩境西南遠 秋聲晝夜蛩 人家連水影 驛路在山峯  
溪靜雲生石 天晴雪覆松 我爲公府繫 不得此相從  
詩境西南遠し、秋聲晝夜の蛩、人家水影に連り、驛路山峯に在り、溪靜に

して雲石に生じ、天晴て雪松を覆ふ、我は公府の繫がれ爲り、此に相從ふことを得ず、

【句釋】 殷堯藩は元和九年の進士、李翱に長沙の幕府に従ふ、游山南乃ち李翱の幕下、湖南の長沙へ赴むくを送るなり、詩境西南遠長安より陝西、湖北の二國を経て長沙に至る、其の途中の詩境の地理を云ふ、秋聲晝夜蛩詩趣に豊富なる境、日夜に詩を吟じて定んで蛩聲を爲すならん、人家連水影長沙即ち古の楚地は水國にて、家の水に沿はざる無く、水の家に沿はざるは無し、驛路在山峯今日の陝西湖北二省の地理は日本の甲斐信濃の如く、所謂山系に屬す、溪靜雲生石途中の景、雲の石より生ずること、石は雲の根なりと云ふにて知るべし、天晴雪覆松雪後の天、松上に雪の尙覆ふを見るべきを云ふ、是れも途中の景、我爲公府繫我は役人にて、私人にあらす、職の爲め自由意志を行なふ能はざるなり、爲を「タメ」と訓むべからず、「タリ」と訓んで平聲たり、「タメ」は仄聲とす、不得此相從君の赴く地、并びに其の途中の風景なぞ稱すべく見るべきもの多きも、惜哉我は君と共に此の行を爲す能はずと嘆するなり、

題李疑幽居

賈島



閒步少鄰並 草徑入荒園 鳥宿池中樹 僧敲月下門  
過橋分野色 移石動雲根 暫去還來此 幽期不負言  
閒居鄰並少なし、草徑荒園に入る、鳥は宿す池中の樹、僧は敲く月下の門、橋を過ぎて野色を分ち、石を移して雲根を動かす、暫く去つて還つて此に來らん、幽期言に負かず、

【句釋】李疑の疑は款ならんとの説あり、共に不詳、幽居は閒居、隱居と同じ、訪問して此の詩を作る、閒居少鄰並多ければ閒居にあらず、少なきを以て閒居なり、草徑入荒園草の生えたる徑徑は小を通過して、一向に手を入れざる荒園へ入るを得、鳥宿池中樹黄昏より往訪して遂に夜に入る、鳥も已に池中の樹に宿するを以て聲なし、僧敲月下門敲と推との二字の爲め、一時辛苦し、千古の高名を成せしもの、鳥此の時無本と云ふ出家沙門なりしなり、過橋分野色是れ門内の所見、月光の爲め東野と西野との區別を分つことが出来るなり、移石動雲根石泉配置の方其の宜しきを得たるを云ふなり、雲根を動かすと云ふことは、ツマリ石を動かすなり、暫去還來此來る者は還らざるを得ず、還るも又來らん、夜半に還りしや一宿せしやは、本人な

らでは詩の上で分明ならず、宿したりと注者が定めるは、滑稽なり、幽期不負言幽期は此に來つて閒居を共にすること、食言せざるを不負言と云ふ、

金山寺

張祐

一宿金山寺 微茫水國分 僧歸夜船月 龍出曉堂雲  
樹影中流見 鐘聲兩岸聞 因悲在城市 終日醉醺醺  
一宿す金山寺、微茫として水國分る、僧は歸る夜船の月、龍は出づ曉堂の雲、樹影中流に見え、鐘聲兩岸に聞ゆ、因て悲しむ城市に在つて、終日酔ひて醺醺たるを、

【句釋】金山寺は今日の江蘇省鎮江府大江の中に在り、裴頭陀、山を開き金を得たり、故に此の名あり、一宿金山寺一宿せんと欲して來る金山寺なり、宿即臥と解すべからず、微茫水國分カスカなる形容を微茫と云ふ、水國は成る程水國だと分るなり、僧歸夜船月各房の僧が、各自に房に歸るに皆船を借らざるは無し、水國なればなり、龍出曉堂雲眞の龍が曉堂の雲を出る意と、僧伽を龍象と稱するより、僧伽が雲の如く曉堂に集まるの意と二義を含むと明白なり、



龍象雲聚は佛家の套語なればなり、樹影中流見寺中の樹影は中流より見るを得べし、鐘聲兩岸聞彼岸の人も此岸の人も差別すること無く、鐘聲を聞き得るなり、因悲在城市此の如き塵外の事を見聞するに因て我が身の長く紅塵堆裏に在るを悲しむ、終日醉醺醺は酒氣の臭きを云ふ、

商山早行

温庭筠

晨起動征鐸 客行悲故郷 雞聲茅店月 人迹板橋霜

槲葉落山路 枳華明驛牆 因思杜陵夢 鳧雁滿回塘

晨に起つて征鐸を動す、客行故郷を悲む、雞聲茅店の月、人迹板橋の霜、

槲葉山路に落ち、枳花驛牆に明かなり、因つて思ふ杜陵の夢かと、鳧雁回

塘に滿つ、

【句釋】 商山は一名楚山、又商顔、又商於山と云ふ、商州に在り、長安を去て襄陽へ赴むかんとする時、此の商山を經て作る、晨起動征鐸は字の如く金にて製する鳴具、鈴と同物なり、車の四隅に付けてあるもの、客行悲故郷客と爲つて他郷へ行く者はイザ去ると云ふときは、言

ふべからざる悲哀を感ず、故郷の好きを思へばなり、雞聲茅店月一番雞か二番雞か分明ならざるが、月が茅店の屋上に明らかなる時なれば、未だ曉天に到らず、人迹板橋霜我は随分早く出立せしと思ひしに、何ぞ料らん板橋の霜に履痕あるを見れば、我より前に出立せし人ありしなり、槲葉落山路槲は和名カシハ、一本に槲に作る、槲は「コエマツ」なり、カシハの葉が山路に滿つ、枳花明驛牆枳は「カラタチ」の花、驛亭の牆邊に明かに開く、因思杜陵夢此の如き道中の諸景を見るに因て、曾て長安の杜陵即ち故郷に在つて、夢見し事を思ひ出すなり、鳧雁滿回塘杜陵の回塘には鳧雁が無數に居る、其の事を想ひ出さざるを得んや、今此の道中に鳧雁が多く住すると言ふにはあらず、景色の具合を見て郷と同一の感想ありと言ふなり、

秋日送方千游上元

曹松

天高淮泗白 料子趣脩程 汲水疑山動 揚帆覺岸行

雲離京口樹 雁入石頭城 後夜分遙念 諸峯霧露生

天高うして淮泗白し、料る子が脩程に趣くことを、水を汲めば山の動くかと疑ひ、帆を揚げて岸の行くかと覺ゆ、雲は離る京口の樹、雁は入る石頭



城、後夜遙念を分たば、諸峯霧露生ぜん、

【句釋】方干は詩友なり、上元は縣名、今日の江蘇省江寧府なり、天高淮泗自淮水と泗水、長安を流るる川、泗水は濟陰より出て臨淮に至り、以て淮水と合す、今や秋日、水色正に白し、料子趣脩程料は思料想像、曹松が方干が趣く道中の景物を想像する、脩は修に同義にあらざるも、同義に用ふるもの多し、「トトノヘル」と云ふ意味より道程と用ふるもの如し、汲水疑山動舟中にて水を汲めば水に墮する山影が動揺すること實事なり、其の事を言ふ、揚帆覺岸行舟中や車中は、舟も車も動かずして却て岸や樹木が走るかと覺ゆ、是れも詩家の妄語にあらざりて、普通旅行者の實驗する所なり、雲離京口樹京口は古吳の都せし處、雁入石頭城石頭城は吳の城、京口も石頭も共に方干が目的地として行く上元 即ち建康なり、雲離、雁入、一方は離れて、一方は入ると云ふ意義のみ、雲も雁も字を借りしのみ、其の實方干其の人を言ふ、後夜今別れて後の夜なり、初夜中夜後夜と一夜を三に分つ意味の後夜にはあらざるべし、分遙念曹松が方干を思ふ念を分つ「ドウシテ居ルカナ」と云ふ念、遙は遠方なれば云ふ、諸峯霧露生吳天を望むも諸峯霧露生じて決して居ることを得ずと嘆す、

寄陸睦州

許棠

下國多高趣 終年半是吟 汐潮通越分 部伍雜蠻音  
曉郭雲藏市 春山鳥護林 東游雖未遂 日日至中心  
下國高趣多し、終年半ば是れ吟、汐潮越分に通じ、部伍蠻音を雜ふ、曉郭雲市を藏し、春山鳥林を護す、東游未だ遂げずと雖も、日日中心に至る、

【略傳】許棠字は文化、宣州涇縣の人、咸通十二年の進士、  
【句釋】陸睦州陸は姓、名は肱、棠嘗て其の從事たり、睦州は今の河南省河南府なり、下國は日本で昔し上方だの關東だのと分ちしが如きなり、長安を上國とするより睦州なぞは下濕の國と稱するもの如し、多高趣好景多しと云ふが如し、終年半は吟一年の中、半年は恐くは詩賦の爲め忙殺せらるるならん、汐潮通越分夕の「ウシホ」を汐、朝の「ウシホ」を潮、分は國の界を云ふ、越の國境に通ず、部伍雜蠻音種種の部類の人種が接伍する故に其の言語も南蠻の音を雜用する、曉郭雲藏市曉天に城中を見し景色、春山鳥護林三月に春山を見し景色、東游雖未遂許棠自らを云ふ、我は東游即ち睦州方面の游に志はあるが、荏苒未だ遂げざるなり、日日至中心中心は心中の倒用、睦州の事を日忘るる能はずとなり、「岑參の「送懷州吳別駕」の詩より



此に至る十五首、共に其の作法、同一なり、

與崔員外秋直

王維

建禮高秋夜 承明候曉過 九門寒漏徹 萬井曙鐘多  
月迥藏珠斗 雲銷出絳河 更慚衰朽質 南陌共鳴珂  
建禮高秋の夜、承明曉の過ぐるを候つ、九門寒漏徹し、萬井曙鐘多し、月迥にして珠斗を藏し、雲銷して絳河を出す、更に慚づ衰朽の質、南陌共に珂を鳴すことを、

【句釋】 崔は姓、員外は尙書員外郎、秋直は秋夜に宿直するなり、今日日本の宮内省の如きものに屬す、建禮高秋夜建禮は宮廷の門の名、尙書郎は晝夜交代して一週に一回宿直す、此の門頭正に高秋の夜に當る、宿直する處は門にあらず、承明は石渠閣の中に在り、日本今日の宮廷祇候間とか、伺候間とか云ふものに當る、候曉過天明を候つ、九門は九重門、天上の門、以て天子の門と爲す、寒漏徹寒なるが故に時計の響きも透徹するなり、萬井曙鐘多長安城中、時計の音を聞くと同時に、又曙鐘鳴る、井の字義、戸と同じ、月迥藏珠斗月は迥かに見ゆれども、

珠斗即ち北斗は藏れて見えぬと云ふ意味、斗の光形珠の如きを以て北斗に譬ふ、承明廬より見る所、雲銷出絳河絳河は天河なり、雲影消滅せしが故に天河は中天に横はるを見る、更慚衰朽質維は此の時、尙書右丞の職に在り、崔と同宿直して自身を顧みるに崔は年少にあらざるも、自身に比較すれば年較や下る、是の故に衰朽の身を以て官祿を食むを慙づとの意なり、南陌共鳴珂靜坐香を焚き地を掃ふが維の本心なり、騎馬鳴珂は其の本心にあらざるなり、天子は位南面に居す、臣僚は皆北面なり、故に天子に朝する者、皆南陌よりす、珂は禮服に著ける具と、馬勒の飾具とあり、鳴るは馬勒に屬すると知るべし、

送東川李使君

萬壑樹參天 千山響杜鵑 山中一夜雨 樹杪百重泉

漢女輸寶布 巴人訟芋田 文翁翻教授 不敢倚先賢

萬壑樹天に參し、千山杜鵑響く、山中一夜の雨、樹杪百重の泉、漢女寶布を輸し、巴人芋田を訟ふ、文翁翻つて教授す、敢て先賢に倚らざらんや、

【句釋】 東川は地名、四川省梓潼縣東川郡なり、蜀漢の梓潼郡、隋に梓州と改む、李氏此の郡



の太守即ち知事と爲つて行く、之を送る、萬壑樹參天長安より東川へ赴く道中の景、壑は溪壑と熟語して「タニ」の事、故に深きなり、兒童は之を嶺の如く解す、大に誤まりなり、壑底の樹木が森森と聳えて天を衝かんとする様を云ふ、千山響杜鵑四川の道中、杜鵑に就ては屢ば辨する如く、他州に比して特に多きこと再辨の要なし、千山に響くは其の数の多なると、且聲の大なるを云ふ、山中一夜雨蜀の山中一夜雨あらんか、樹杪百重泉雨の樹杪即ち樹の「コズエ」より落下する泉は百重の多きを爲す、漢女輸實布漢女が織る布は、公税として納むるものを云ふ、蜀に漢水あり、『毛詩』に漢有ニ游女とある所より漢の字を用ひしなり、輸は「オクル」意なれば、以て納に代用す、魏晉の時、邊郡の夷人布を輸る戸ごとに一匹、之を實と云ふ、實は總なり、其の有する所を率て、切に之を貴ばざるなり、實は賦と税の意、巴人訟芋田巴人等が明府の裁決を仰がんとて、訴訟などを提出するならん、巴は郡名、蜀の東隅、芋魁は蜀に多く作るを以てなり、文翁翻教授前漢の文翁が蜀の刺史と爲るや、郡吏をして長安に游學せしめ、又自身出行ごとに學官の諸生を従がふ、吏民之に化し、蜀中の學、齊魯に比す、今李君が刺史と爲つて赴き、郡民がツマラヌ芋田の訴訟なぞ起すは、畢竟無學の致す所、是の故に之を善導して、以て訟の如き愚事なからしむ、翻は「カヘツテ」と訓む、訴訟事なぞ獎勵せず、反對に教授すると云

ふ意味、不敢倚先賢古の文翁の如き賢人に倚りて民を治めんとなり、  
【評論】此の篇、人を送る詩として千古の絶調とす、萬千一百等の數字層出するも曾て其の自然を害せず、方虛谷曰く、風士詩多く人の官に之き、及び遠行を送るに因て其の方所を指言す、習俗の異、清新、雋永、唐人此の如き者極めて多し、許棠云ふ王租只貢金、周繇云ふ官俸請二丹砂、皆是れ、紀曉嵐云ふ、此の論五六句然り、此の詩の佳處、五六に在らず、起四句二十字、高調雲を摩す、結二句解すべからず、今云ふ紀の解すべからずと云ふは、深く考へざるの失なり、此の平易の語、兒童猶解す、大人豈解せざることあらんや、漢書循吏傳を讀めば文翁の事明白なり、豈解すべからざることあらんや、

送楊長史赴果州

褒斜不容憶 之子去何之 鳥道一千里 猿聲十二時  
官橋祭酒客 山木女郎祠 別後同明月 君應聽子規  
褒斜憶を容れず、之の子去つて何にか之、鳥道一千里、猿聲十二時、官橋祭酒の客、山木女郎の祠、別後明月を同じうせば、君應に子規を聽くべ



し。  
 【句釋】楊は姓、名は濟、長史は官名、漢代、邊郡以外に長史あり、文官にして兵馬の權も握る、隋の長史司馬、唐の治中、是れなり、果州は四川省即ち蜀に在り、宋明清時代の順慶府なり、前詩の東川李使君の東川の地是れ、元代は東川と言ふ、李は使君と爲り、楊は長史と爲り之に赴く、時は同時なるや、別時なるやは分明ならず、褒斜不容憶徑の嶮難阻隘、通行困苦なるを云ふ、長安即ち陝西より蜀即ち四川に入るに、南北二谷あり、南の谷を斜と曰ふ、興元府に在り、北の谷を褒と曰ふ、利州に在り、長安を去る二百里、諸葛武侯が魏を伐たんとして兵を此の谷より出しし處なり、憶は「ホロ」車網を云ふ、之子去何之何に之くやと云ふ疑問の辭を以て出し、而して以下の句に之を自ら解く、之子は吾友はと云ふが如し、鳥道一千里長安より寧羗州即ち四川の國境に至る五百里、寧羗より以て順慶に至る五百里と打算しても、詩意を害せず、此の間所謂、鳥道、人道とは言ひ難きなり、猿聲十二時一千里の間、晝の旅行も、夜の旅行も唯猿聲を聞くのみなり、官橋祭酒客長安には瀾橋、三橋、第五橋此の中、瀾橋を以て客を送る場處とす、官橋即ち是れ、漢の法、上客を祭酒と曰ふ、祖道を祭るに酒を行ふ人を云ふ意味、送者の行者を稱する語、山木女郎祠果州の金華山中に「觀」あり、即ち神女謝自然を祠る、行者が

送者に答ふる語、只今は諸兄の厚意にて官橋祭酒の客であるが、蜀へ入らば山木女郎祠で、良とに寂寞の者と爲る、別後同明月長安にて見る月も、蜀で見る月も、天に二月なし、天の一月を見るは同じけれど、人は一千里を隔て、同賞する能はず、君應聽子規送者は住者にて長安に住する者、子規を聽くも感は薄し、行者は蜀客と爲るなり、豈故郷を想はざることあらん、子規を聽かざるも感あらん、況や子規を聽くに於てをや、  
 【評論】此の篇、前作に優るも劣るなし、徹頭徹尾、塗せず、澤せず、直ちに叙し、小逕に入らず、方虛谷曰く右丞の詩、宋の梅聖俞と互に看るべし、紀曉嵐曰く、梅は右丞と同日に語るべからず、此の詩一片の神骨、凡馬空しく多肉なるに比せず、今云ふ虛谷の肉眼、何ぞ慧眼、法眼の人を窺ふを得ん、

赴京途中遇雪

孟浩然

迢遞秦京道 蒼茫歲暮天 窮陰連晦朔 積雪遍山川  
 落雁迷沙渚 飢鳥噪野田 客愁空佇立 不見有人煙  
 迢遞たり秦京の道 蒼茫たり歲暮の天 窮陰晦朔に連なり、積雪山川に遍



し、落雁沙渚に迷ひ、飢鳥野田に噪ぐ、客愁ひて空しく佇立す、人煙有るを見ず、

【句釋】京は長安、襄陽より京師に赴く時の作とす、亂後の作たること明白なり、迢遞は遠方と見て可なり、迢は「ハルカ」遞は「トホシ」秦京道長安は本秦の都、湖北と陝西は鄰國なれど、此の間、支那里七百里あるべし、蒼茫歲暮天廣く且大の形容を蒼茫と云ふ、十二月の天、自然の氣已に陰、況や蒼茫として雪ならんと欲する天に遇ふをや、窮陰連晦朔是れ途中の事を叙す、十二月の末を窮陰と云ふ、晦は「クラシ」又「ツヅモリ」月の盡るなり、朔は「ツイタチ」又「ハジメ」又盡に用ふ、今は「ハジメ」の義を取る、三十日と一日と連屬したりとの詩意、積雪遍山川正しく題目の雪を叙す、落雁迷沙渚四面皆白し、雁が其の降らんと欲する沙渚の見分け難きに迷ふなり、飢鳥噪野田カラスは野田に下るも、粟の有る没し、唯徒らに噪ぐのみ、外界の實事以て自身の境遇をも此の中に籠る、客愁空佇立客は自身なり、サテ何處に宿を定めんかなと思うて道上に空しく佇立して、四方を望む、不見有人煙人煙を見るときは、客愁も亦有らざるなり、人煙を見ざるに依て、客愁乃ち在り、

【評論】此の篇、襄陽の詩としては至るものにあらず、然れども他人に在りては上乘の作とす、

方虛谷曰く規模好と、紀曉嵐曰く此れ所謂唐人の矩度古格存す、廢すべからざるなり、然れども之に倣ふ則は空腔に入り易し、虛谷評の三字最も斟酌す、

早行

郭良

早行星尙在 數里未天明 不辨雲林色 空聞流水聲  
月從山上落 河入斗間橫 漸至重門外 依稀見洛城  
早行星尙在 數里未天明ならず、雲林の色を辨ぜず、空しく流水の聲を聞く、月は山上より落ち、河は斗間に入つて横る、漸く至る重門の外、依稀として洛城を見る、

【句釋】郭良は「唐書」に傳を缺く、早行星尙在正しく門を出し時、數里未天明正しく旅途に就く時、不辨雲林色是れ頭上の景、四面模糊として辨じ難し、空聞流水聲是れ脚下の景、目は用を爲さず、耳のみ暗中に用を爲す、月從山上落月と言ふも片月ならん、山上に挂りてありし月が落つ、天明に近きなり、河入斗間横銀河が北斗の間に横はる、漸至重門外重門は驛亭の門、依稀は猶ほ髣髴と言ふが如し、髣髴は似て居ること、見洛城驛亭に著したるとき、早洛城に來



りしと思ふ、已に都門に著したりと解する鴻齋の説は誤りなり、若し都に著いたとすれば、依  
稀の字全く活用せず、

宿荆溪館呈丘義興

嚴維

失路荆溪上 依仁忽暝投 長橋今夜月 陽羨古時州  
野燒明山郭 寒更出縣樓 先生能館我 何事五湖游  
路を失す荆溪の上 仁に依て忽ち暝投す、長橋今夜の月、陽羨古時の州、  
野燒山郭に明かに、寒更縣樓より出づ、先生能く我を館す、何ぞ五湖の游  
を事とせん、

【句釋】

荆溪は今日の江蘇省常州府武進縣なり、嚴維は越州より常州に趣く途次、此に一宿す、  
丘義興は其の郡宰、維の舊友なり、失路荆溪上荆溪の地たる已に常州なり、目的地へ著して黃  
昏に暝投り、遂に路を失せしものと見ゆ、依仁忽暝投「ナサケ」に依て幸に其の宿處を得たりと云  
ふ、「依仁」は『論語』の語、暝色に及んで投宿を請ふなり、長橋今夜月長橋は荆溪に架する橋、  
陽羨古時州古の楚國、漢代の陽羨、今日の宜興なり、新らしき月は即ち古時の月、宜興の名

は新らしけれども其の州は古の州なり、月も地も今古異ならざるを云ふ、野燒明山郭野草を燒  
く火が、山の郭を照すを望む、寒更出縣樓更は夜の意味なれども、此の更は漏即ち時計、又鼓  
と見るべし、縣樓即ち役所より出る鼓の聲が、如何にも音が寒く聞える、先生能館我丘を指し  
て先生と云ふ、我を嫌はず、慇懃に宿泊を許可せらる、何事五湖游越の軍師范蠡は昔し功成り  
名遂げて後、官を辭し去て五湖に遊ぶ、然るに我は范蠡の事を學ぶに及ばず、先生の我を館し  
玉ふ厚情にて、樂十分なりとの意、

漂母墓

劉長卿

昔賢懷一飯 茲事已千秋 古墓樵人識 前朝楚水流  
渚蘋行客薦 山木杜鵑愁 春草年年綠 王孫舊此游  
音賢一飯を懷ふ、茲事已に千秋、古墓樵人識り、前朝楚水流る、渚蘋行客  
薦め、山木杜鵑愁ふ、春草年年綠なり、王孫舊し此に遊ぶ、

【句釋】

漂母墓史記淮陰侯傳に曰く韓信城下に釣す、諸母漂す、水を以て漿を擊 一母あり信の  
飢るを見て、信に飯す、漂を終て數十日、信喜び、漂母に謂つて曰く、吾必ず以て重く母に報



するあらん、母怒つて曰く、大丈夫自ら食すること能はず、吾王孫を哀んで食を進む、豈報を望まんや、漢の五年、韓信楚王に封せられ下邳に都す、從て食する所の漂母を召し千金を賜ふ、其の墓、漢の臨淮郡、今日の江蘇省淮安府清河縣の東南五里の地に在り、昔賢は韓信なり、懷一飯漂母の事前の如し、茲事已千秋漢初より唐に至る已に千年、古墓樵人識樵人も能く其の墓の所在を識る、前朝楚水流信は楚王なれば、特に楚水の字を用ふるなり、前朝は現朝より以前は際限なく用ふ、是の故に此の前朝は漢代と知るべし、人は無し、水は依然たり、渚蘋行客薦渚邊に生ずる蘋草を採て、路人が是を漂母の墓に薦める、山木杜鵑愁山中の樹に啼く杜鵑は漂母の爲めに愁ふるが如し、春草年年緑人生の短なるは、草木の冬枯るるも、春亦生ずるの長きに及かず、王孫舊此游韓信を指して王孫と云ふ、千年も以前なれば舊と云ふ、韓信が遊ぶは食を乞ひし時なり、漢代の詩に王孫游兮不歸、春草生兮萋萋とある詩意より此の結末が案出せられしなり、

湖中間夜

朱慶餘

釣艇同琴酒 良宵背水濱 風波不起處 星月盡隨身  
浦迥湘雲卷 林香嶽氣春 誰知此中興 寧羨五湖人

釣艇琴酒を同じうす、良宵水濱に背く、風波起らざる處、星月盡く身に隨ふ、浦迥にして湘雲卷き、林香うして嶽氣春なり、誰か知らん此の中の興、寧ぞ五湖の人を羨まんや、

【略傳】 朱慶餘、字は可久、又字慶緒、越州の人、寶曆二年の進士、

【句釋】 湖中間夜洞庭湖に船を浮べて夜游を賦す、釣艇同琴酒題に友人は記してあらざるも、同の字より見れば友人と釣艇にて琴酒を同じうする、艇は小舟、良宵背水濱良宵は多く中秋即ち八月十五夜に用ふる語なれども、此の句は晴宵の意味に用ふ、濱は岸邊を云ふ、背くとは岸を離れて遠く水心に艇を放ちしなり、風波不起處、星月盡隨身風波が起らざるを以て、星月が我が身に隨ふなり、浦迥湘雲卷浦は「水濱也」と注す、是の故に迥なり、瀟湘の雲が水濱に卷く、卷くは即ち無きなり、林香嶽氣春洞庭の山嶽より送り來る香あるが爲め嶽上は花あることを知るなり、誰知此中興、寧羨五湖人今夜の如き興ある游を得れば、何ぞ范蠡が黄金十萬を載て五湖に遊びしことを羨まんやとなり、五湖人は范蠡を云ふ、王維が與崔員外秋直一の詩より此に至る八首、前の詩と略同等の格とす、



四 虛

周弼曰く謂ゆる中の四句皆情思にして虚なり、虚を以て虚と爲さず、實を以て虚と爲す、首より尾に至る、行雲流水の如し、此れ其の難きなり、元和より已後、此の體を用ふる者は、骨格存すと雖も、氣象頗る殊なり、向後は則ち枯瘠に偏にして、輕俗に流せり、探るに足らず、

今日く周弼の中の四句と云ふは、三四五六の二十字なり、所謂前聯後聯なり、虚と云ふは外形に表はれざるもの、即ち我が主觀を指す、實は其の反對、外形に表はれたる客觀的事物を指す、詩家は虚と實景客觀と情主觀と稱す、今「虚を以て虚と爲さず」と云ふは、主觀の中に客觀が籠るなり、「實を以て虚と爲す」と云ふは、客觀を以て直に主觀と爲すの謂ひなり、首より尾に至るは即ち四十字一律全體を指す、「行雲流水の如し」とは、有法の極、無法に歸したるの謂ひなり、此は虚、彼は實、此は景、彼は情と判然區別あるものと異なるを云ふ、「此れ其の難きなり、」大家にあらざれば、容易此の境に至り難きなり、「元和より已後、」順宗の子、憲宗の年號を元和とす、十五年にして穆宗の長慶と爲る、詩家の稱して中唐時代と做すもの

なり、此の體を用ふる者、「骨格存すと雖も、氣象頗る殊なり、」周弼の此の言を吐くは、元和以前即ち玄宗の開元、天寶、肅宗の至徳、乾元、代宗の永泰、大曆間に出でし即ち盛唐の諸家を稱讚するの意明明たり、然らば其の盛唐諸公の詩を多く探つて、中晩唐の人を除外すべきなるに、何ぞ料らん探る所の詩、中晩唐に多くして、盛唐に少なきは自語相違の謗を免れざるべし、然れども箇は是れ問題を改ためて論ず、茲に論ずるの煩を許さず、周弼曰く「骨格存すと雖も、氣象頗る殊なり」四虚と稱する格法の名は存するも、實を以て虚と爲すの氣象は缺如すとなり、「向後は則ち枯瘠に偏にして、輕俗に流せり、探るに足らず」晩唐以後宋に至るまでを通じて「向後」と稱したるもの如し、此の論は實に然り、晩唐より宋に及ぶ詩は生命を亡ぼしたるもの、濫厚の旨を失し、理路を貴び、野狐外道、天下に跋扈するに至る、不レ足採也の四字は、實に天下の公論、伯弼の私言にはあらざるなり、是れ亦問題を改ためての論、茲に贅せず、

陸渾山莊

宋之問

歸來物外情 負杖閑巖耕 源水看花入 幽林採藥行  
野人相問姓 山鳥自呼名 去去獨吾樂 無能愧此生



歸り來る物外の情、杖を負うて巖耕を閱ぶ、源水花を看て入り、幽林藥を採つて行く、野人姓を相問ふ、山鳥自ら名を呼ぶ、去去獨吾樂んで、無能此の生を愧づ、

【句釋】陸渾は地名、河南省河南府に在り、山莊は即ち作者宋之問の隱居所とす、諸注に「之間不遇にして此の山に隠る」とあるが、正人の不遇は同情すべきも、邪人の不遇は同情すべきも、點なし、之間の不遇は寧ろ當然のみ、天罰のみ、歸來物外情權勢に阿附する力盡きて、此に歸り來るなり、萬物の外に情を養ふ、負杖閱巖耕手を背にして杖を持つを負杖と云ふ、農人が巖石の間の田を耕やすを閱る、源水看花入、幽林採藥行昔し漁父が花の流れ來るを看て、舟を其の流れ來る方面に棹さし行けば、遂に洞源に達し、又昔し龐德公が鹿門山に隱居して藥を採り身を修む、我も亦此の如くに類するやと、實事にあらざることを叙す、是れ即ち實を以て虚と爲すの格、之間の如きものに較べられては、漁父も龐德公も驚くことなるべし、野人相問姓、山鳥自呼名野人に遇へば、見慣れぬ人間ゆる之間に其の姓を問ふ、又山鳥は自分で自分の名を呼ぶ、自分で自分の名を呼ぶに就て議論がある、鷓鴣は鷓鴣と呼び、子規は謝豹と呼び、鳩は

布穀と呼び、皆自ら名を呼ぶなり、或説に鳥自ら呼ぶにあらず、其の聲に依て、古人が名を附せるなり、鴉は「カア」と聞えるより名け、鳩は「キウ」と聞えるより名けると、此の二説異なるに似て一致する、自ら呼ぶに依て、古人が名を付せしも、古人が名を付せしに依て、自ら呼ぶも何等の別なし、自ら呼ぶが主たるべきなり、去去獨吾樂去去の文字は普通字義の如く、「去る」にはあらず、他に頓著せざるの謂なり、古來の注者皆解せず、野人の姓を問ひ、山鳥の名を呼ぶ、共に是れ應酬するは免倒なり、左様なことに頓著せず、我は吾獨樂しまんとなり、無能愧此生無能の我、他賢者に追隨する能はず、畢竟自ら樂しんで生を終らん、此の生を愧づる念は之れなしとなり、

新年作

郷心新歲切 天畔獨潛然 老至居人下 春歸在客先  
嶺猿同旦暮 江柳共風煙 已似長沙傳 從今又幾年  
郷心新歲切なり、天畔獨潛然たり、老至つて人の下に居し、春歸つて客の先に在り、嶺猿日暮を同じくし、江柳風煙を共にす、已に長沙の傳に似た



り、今より又幾年ぞ、

【句釋】新年作之問、初め太平公主に媚び、其の寵遇を得、後安樂公主に倣するに及んで、太平公主の意を失し、越州長史に貶せらる、之問、剡溪山に酒を置き詩を賦し、行を修めず、且其の詩人人傳唱す、睿宗之を惜み、詔して欽州に流す、此の詩即ち欽州に在つて作る、郷心新歲切郷とは其の生地汾州を云ふ、故郷を思ふの心、新歲に遇うて愈よ切、天畔は天涯と同意獨潸然涙を流して潸然、邪人なれども涙あるものと見ゆ、老至居人下素隱此の句を解して曰く、「元三の祝の座敷の次第は、幼き者を上座になほし、年の老いたる者を下座になほす、なせと云ふに人生は百年が限りぞ、五十までは、年を得る道理ぢやとて、少き者を先づ祝するぞ、五十より一年づづ失せて、百年には死するほどに、後に祝せんとて下座に置くぞ、盃をも幼き者が始むるぞ、此の如き式も漢土に無きにはあらず、然れども此の句の意にあらず、此の句の意は少年の官等が己れの上の在るを云ふ、己れは奏任なるに、少年は勅任の地位に居るとの意なり、春歸在客先春歸の字は二義あり、三春の盡きて初夏ならんと欲する時と、冬盡きて新春正に之れに代る時となり、今は春來るを云ふ、春は歸るも我は未だ客と爲て此の欽州に在りと嗟するなり、嶺猿同旦暮嶺に啼く猿は終日止むとき無きなり、江柳共風煙江に沿ふ柳は風光と煙景を共

にする、已似長沙傳漢の賈誼は年少にして、才奇一世に冠絶す、讒者の爲めに長沙に謫せられ、長沙王の傳即ち親王の師傳として、邊地に在住せし事あり、己亦之に似たり、從今又幾年幾年を經て、欽州より汾州へ歸るを得るや、知るべからず、と嘆嗟するなり、何ぞ料らん三四年を超えずして、死を賜ふに至る、其の自業自得を知らずして詩を賦し、世を憤る、憫むべきなり、

喜鮑禪師自龍山至

劉長卿

故居何日下 春草欲芊芊 猶對山中月 誰聽石上泉  
猿聲知後夜 花發見流年 杖錫閑來往 無心到處禪  
故居何れの日か下る、春草芊芊たらんと欲す、猶ほ山中の月に對して、誰か石上の泉を聽かん、猿聲いて後夜を知り、花發いて流年を見る、錫を杖いて閒に來往す、無心到處に禪す、

【句釋】鮑禪師僧は二字の名を略して一字で稱する例多し、貫休は休上人齊己は己上人の類、何鮑なるならんが、傳は未詳、禪師は僧に對する敬語、龍山は澤州にも福州にも在り、いづれなりと定め難し、劉が家を訪問せられしなり、故居何日下禪師を見て劉が質問する、禪師は何



日に故居の龍山を下せしぞ、春草欲芊芊、東西南北共に草色芊芊たり、禪師下山すれば、龍山の草芊芊、何人か之を掃除せん、芊芊は音「セン」草の茂盛なる形容、猶對山中月、禪師不在となれば、猶ほ龍山の月を賞する者ありや、誰聽石上泉、仰いで月、俯して泉、之を見、之を聽く者は誰ぞや、猿聲知後夜、花發見流年、此の二句は禪師が長卿の間に答へしなりとの説と、然るにあらず龍山の實景を叙せしのみとの説とあり、余は姑らく後説を取る、禪師の答ふる要無ければなり、答へざるを以て禪の妙味の存する所とす、長卿が質問を發して見て、後考ふイヤ左様にはあらず、月を見るも泉を聽くも無い、自然は自然なり、禪師不在なればとて、山猿は必ず後夜に啼き、山花は春風に發きて、南風に落つ、是れが山中の自然なり、何ぞ禪師の不在に關せんや、初夜、中夜、後夜の三時に一夜を分けて僧が坐禪する法あり、後夜は午前二時頃なり、杖錫開來往、無心到處禪、禪師の下山を何故ぞと初めは疑ひしも、遂に悟るを得たり、僧伽は隨縁を貴んで、執著を賤しむ、山中と雖も、是と定めて執著するは、畢竟解脱の道に背く、佛陀も遂に山中を出し人なり、禪師が錫を杖いて、山中市中、到處に禪す、雲の嶺を出て又嶺に歸ると同じく無心なり、

酬秦系

鶴書猶未至 那出白雲來 舊路經年別 寒潮每日回  
家空歸海燕 人去發江梅 最憶門前柳 閒居手自栽  
鶴書猶ほ未だ至らず、那ぞ白雲を出で來る、舊路年を経て別れ、寒潮毎日  
回る、家空うして海燕歸り、人去つて江梅發く、最も憶ふ門前の柳、閒居  
手自ら栽ふしことを、

【句釋】 酬は彼に對する我の返事なり、秦系字は公緒、會稽の人、天寶の末亂を剡溪に避け、自ら東海釣客と稱す、北都の留守薛兼訓、奏して倉曹參軍と爲す、就かず、泉州の南安に客たり、九日山中に大松あり、系廬を其の下に結んで、石を穴て研と爲し、老子を注す、年を彌て出でず、年八十餘にして卒す、南安の人之を思うて、其の山を號して、高士峯と爲す、鶴書猶未至此の句は長卿の手に、君が行くと云ふ報知の書未だ至らざるにと解しても通ずるが、諸注多く天子の召書未だ至らざるにと解す、仙人の書も鶴書なり、天子の書も亦鶴書なり、姑らく諸注に隨がつて置く、那出白雲來天子未だ召さざるに何ぞ白雲に背きて出で來るや、舊路經年別南安の舊路を出で年已に久しきを云ふ、劉が秦の意を忖度して云ふなり、南安は四川にもあ